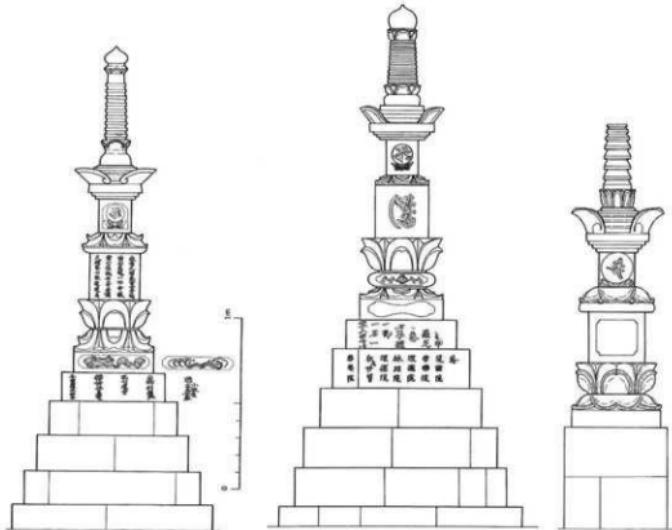


# 富山市内石造物調査報告書

IV



2015

富山市教育委員会  
埋蔵文化財センター

## 例　　言

1 本書は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが実施した、市内に所在する近世石造物及びそれらと関連する石造物の調査報告書である。

2 現地調査から報告書作成に至るまでに、次の方々の指導・助言・協力を得た。記して謝意を表します。

安念幹倫、上野幸夫、浦畠奈津子、尾田武雄、加藤基樹、亀田正夫、朽津信明、久々忠義、酒井靖春、佐藤武彦、佐藤円香、長 秋雄、西井龍儀、平井一雄、福江 充、間野 達、三鍋久雄、三浦知徳、安田良栄、米原 寛、森井順之、花岡山真興寺、金城山宝寿院、瑞龍山最勝寺、天養山高徳寺、慈眼山正源寺、新井山願海寺、五穀山龍高寺、大岩山日石寺、石川県金沢城調査研究所、富山市郷土博物館、立山町教育委員会、立山町文化財保護審議委員会（順不同、敬称略）

3 本書の執筆は、当センター職員の協力を得て古川知明（埋蔵文化財センター所長）が行った。

## 目　　次

例言	1	III 考察	
調査位置図	2	1 最勝寺宝篋印塔の類型について	96
I 宝篋印塔		2 金岡氏の造塔について	99
1 花岡山真興寺	3	3 富山町石工佐伯伝右衛門について（続）	109
2 金城山宝寿院	25	4 岩石帶磁率による地域石材の分類（予察）	117
3 瑞龍山最勝寺	42		
4 天養山高徳寺	53		
5 慈眼山正源寺	62		
II 燈籠		参考文献	134
1 金城山宝寿院門前燈籠	75	報告書抄録	136
2 親鸞聖人分骨堂燈籠	81		



(国土地理院地形図より)

- 1 真興寺
- 2 宝寿院
- 3 最勝寺
- 4 高徳寺 (射水市)
- 5 正源寺
- 6 親鸞聖人分骨堂 (立山町)

## I 宝箧印塔

## 1 花岡山裏興寺宝篋印塔

- |           |                                     |
|-----------|-------------------------------------|
| (1) 調査の目的 | 石造宝篋印塔の年代・製作石工・製作の歴史的背景を解明するための記録調査 |
| (2) 調査日   | 平成 25 年（2013）10 月～平成 26 年 6 月       |
| (3) 調査者   | 古川知明（埋蔵文化財センター所長）                   |
| (4) 所在地   | 富山市梅沢町 3 丁目 5-13 花岡山真興寺境内           |
| (5) 種別    | 宝篋印塔                                |
| (6) 年代    | 天保 4 年（1833）                        |

## (7) 真興寺の概要

花岡山真興寺は、富山藩祈願所となった真言宗古刹である。寛和2年（986）真興僧都（934-1104）が上市黒川の花岡山に開山したのが始まりという。鎌倉期に富山の八島に移転し花岡山真興寺を建立了。上市町黒川に所在する中世信仰遺跡である国史跡「上市黒川遺跡群」を構成する伝承真興寺跡が、発詳地であるという。この伝承真興寺跡は、平成10~12年に上市町教育委員会が発掘調査を実施した。発掘調査成果によれば、寺跡は、「フルデラ」と呼ばれる山腹に所在し、3,200 m<sup>2</sup>の範囲に11ヶ所の平坦面が確認された。発掘では、5間×4間の本堂跡、南西に三重塔とみられる小型塔跡、1間×2間の鎮守社とみられる社殿跡、3段の階段のある参道跡、山門跡、池跡、石垣、横穴等が検出された。出土遺物から、9世紀に始まり、14世紀に一度消失するが、15世紀から16世紀末まで続くことがわかった〔上市町教委2005〕。

寛文3年(1663)頃の『万治年間富山旧市街図』(富山县立図書館蔵)には、「五番町」と「南新町横丁」に囲まれた角地に「真言 真興寺」が存在する。これは現在富山市中央小学校敷地となっている。また、寛文6年『御調理富山絵図』も『万治年間富山旧市街図』と同じ位置にある。両者ともに「拌領地」の記載はない。

享保 10 年（1725）の『寺院御印押領地写書』によれば、真興寺は富山藩から押領地 791 歩（2614.3 m<sup>2</sup>）を与えられた。前者の 2 枚の古絵図の寺域は、概ねその面積と一致する。

安永4年(1775)上市町館の淨土真宗本敬寺梵鐘銘に、「越中富城華岡山真興寺文城堯岳作銘」とある([上市町誌])。文城堯岳の素性は不明である。禪宗僧か。

安政元年（1854）『越中富山御城下絵図』も同じ位置にあり、北側街路が「シンユチマイ」、西側街路が「不セシ多マチ」となっている。

明治 32 年（1899）の大火で被災したが、焼け残ったため、焼失した富山市役所の仮庁舎として使用されることとなつ



図1 真興寺旧地

た(『富山市史』)。この時点では梅沢町に所在している。また、明治 18 年の市街地図でも梅沢町の現在地に所在している。推定であるが、明治 3 年の合寺令以後その影響を受けて五番町(現富山市立中央小学校構内)旧地から移転し、その後梅沢町に再建されたものとみられる。梅沢町の移転先地は、『万治年間富山旧市街図』・寛文 6 年『御調理富山絵図』、安政元年『越中富山御城下絵図』では法華宗長蓮寺である。

#### (8) 調査概要

**① 経緯** 本寺は、南面する道路から山門を通り本堂正面に至る。宝篋印塔は、本堂の南西側に所在し、南側を正面とする。組合せ式の石造塔で、江戸後期における越中真言宗寺院の模範様式を備えた塔である。近世・近代の大火あるいは戦災により、各石材は剥落・ひび割れが著しい。

正確な年代は不明であるが、昭和 30 年以降一度解体修理が行われ、その際欠損部のモルタル充填、部材の接着等が行われた。また、新たにコンクリート基壇を設けその上に本体を復元した。

#### ② 全体構成(表 1)

本体高さは 9 尺 9.45 寸(301.3cm)である。

石塔本体の構成は、上から相輪、笠、塔身(4 石 5 段)、基礎(3 段)、基壇(5 段)の 15 段構成である(表 1)。

石塔の大きな特徴は、基壇 1 段目に供養者の戒名・施主を刻む点である。

**③ 相輪** 上から、宝珠・上部請花・九輪・下部請花・伏鉢で構成し、これらを 1 石で造る。火熱により、剥落・ひび割れが顕著である。立山天狗山石と呼ばれる常願寺川上流産の角閃石安山岩製である。

宝珠は整った球形で、最大径が中央で 5.4 寸である。先端は小さく尖る。

上部・下部請花とも、主弁は単弁 6 葉、間弁は単弁 6 葉の計 12 弁である。蓮弁は横長で、弁周囲が盛り上がる。弁先端は小さく尖って反る。

九輪は 1 段目径 4.6 寸、9 段目径 5.8 寸で下の輪の径が大きい。九輪の各輪の表面は平坦である。

下部請花は花弁縁端に厚みをもたせ、中央部はやや丸みをもたせて立体感を出す。

伏鉢は半球形である。

表 1 真興寺宝篋印塔規格

区分	部位	高さ		幅		石材	備考
		寸	cm	寸	cm		
相輪		18.8	57.0	7	21.2	立山天狗山石	
笠		6.35	19.2	16.3	49.4	安山岩	軒上4段、軒下3段
塔身	輪1	7	21.2	6.4	19.4	立山天狗山石	4面の院刻月輪内に梵字種子
	反花	2	6.1	10.3	31.2	安山岩	軒2と1石
基礎	輪2	10.3	31.2	10.3	31.2		正面「シッチリア」、右面光明真言梵字、1面経文、1面経縞
	請花	6.1	18.5	15.6	47.3	安山岩	
基壇	鏡頭形	3.4	10.3	12.8	38.8	安山岩	4面家紋
	反花	2	6.1	16	48.5	安山岩	基礎と1石
	基礎1	4	12.1	16	48.5		4面に額、額内はハツリ整形
基壇	基礎2	5.5	16.7	21.2	64.2	安山岩	2面に刻銘、3石組
	基壇1	7.5	22.7	26.2	79.4	安山岩	4面に刻銘、4石組
	基壇2	7.5	22.7	30.7	93.0	安山岩	6石組
	基壇3	7.5	22.7	37.3	113.0	安山岩	8石組
	基壇4	7.5	22.7	40.9	123.9	安山岩	11石組
計		99.45	301.3			安山岩	12石組

④笠 軒上4段、軒下3段である。軒上・軒下ともに階段状である。全体的に厚みが薄い。

隅飾突起は38°の角度で外側へ広がり、内側は弧状である。隣接する隅飾突起2つの先端の間隔は1尺6.3寸(49.4cm)である。

隅飾突起外面の文様は、突起周囲が輪郭を巻き、その内部は細かいハツリ整形により凹凸を表す。隅飾突起上端面は、笠上端よりも0.2寸程低い。

⑤塔身 4石5段で構成する。上から軸1、反花、軸2、請花、幔頭形となる。

A 軸1 やや縦長の方形石である。4面には、月輪と蓮華座を線刻し、月輪の中央に梵字種子を葉研影で陰刻する。

4つの梵字種子は、密教でいう金剛界曼荼羅に説く金剛界五仏のうち大日如来を除く四仏を示す。宝篋印塔本体は主尊である大日如来を意味するとされている。

四仏は通常定まった方位に配置される。北面は不空成就如来(梵字種子:アク)東面は阿闍如來(梵字種子:ウーン)、南面は宝生如來(梵字種子:タラーク)、西面は阿弥陀如來(梵字種子:キリーク)である。本塔では、正面となる南側がタラークであり、方位通りである。

蓮華座は葉研影で表現する。中央には宝珠形の蕾、その両側に花弁8葉、下には子葉2葉を配する。

B 反花 軸2と1石で作る。主弁は単弁8葉の二重形式で、間に間弁を置き、計16葉である。

主弁の上下弁ともやや薄いが、先端は厚みをもち、尖って反る。上段の弁の中央は丸みをもつ。間弁は先端が三角形となり厚い。稜はシャープである。

C 軸2 縦長の方形石で、反花と1石で作る。4面には刻銘がある。銘文は陰刻で彫る。

正面(南面)は、宝篋印陀羅尼經を意味する梵字種子「シッチリア」を葉研影で大きく深く彫る。定型的なシッチリアではなく、右側の跳ねを短くし、「(ク)」を加えている。

左面(西面)は、8文字×3行=24文字の経文である。「若有衆生能於此塔／一香一花礼拝供養／八十億劫生死即滅」は、連続した経文であり、宝篋印陀羅尼經と通称する「一切如來心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼經」(大正T.1022B)の19.0713b19後段~21冒頭からの引用である。ただし、経文の冒頭「若有有情」は「若有衆生」に、末尾の「生死重罪」は「生死即滅」に変更されている。

右面(東面)は、光明真言梵字23文字である。右上から始まり下に進め、8文字×3行である。字形は筆書体である。

裏面(北面)は、「法界万盡一切含識／前亡後滅平等利益／天保四癸巳秋造立之」とあり、願意である。天保4年は西暦1804年である。

以上により、軸2銘文の流れは、(正面)「(梵字)シッチリア」→(左面)宝篋印陀羅尼經文→(裏面)願意・造立年→(右面)光明真言梵字の順で記載されていることになる。

D 請花 主弁は、単弁8葉の二重形式で、主弁間に

間弁を置き計16葉である。軸2上部反花とは弁の形態が異なり、下段の弁は薄く、中央がくぼむ。弁先端は少し尖り、先端部のみ稜がある。上段の弁はやや厚く、丸みをもち、先端は大きく尖って反る。間弁は先端が三角形で、中央に明瞭な稜がある。火熱を受け、表面のほとんどが剥落している。

E 幔頭形 敷茄子ともいいう。平面四角形で、側面は半円形である。

【北面】  
法界万盡一切含識  
前亡後滅平等利益  
天保四癸巳秋造立之

【西面】  
若有衆生能於此塔  
一香一花礼拝供養  
八十億劫生死即滅

【東面】  
オ・ン・ア・ボ・キ・ヤ・ベ・イ・ロ・シ・ヤ・ナ・ウ  
マ・カ・ボ・タ・ラ・マ・ニ・ハ・ン・ド・マ  
ヂ・ン・バ・ラ・ハ・ラ・バ・リ・タ・ヤ・ウ・ン・終

側面は、4面ともに浮彫文様を施す。額内を一段彫り込み、中央には六角形の枠内に二ツ巴文が浮彫される。六角形から両側へ対称的に蔓草が延びる。

中央の浮彫文は、家紋分類でいう「角取り角形内の二ツ巴」である。

⑥基礎 3段で構成する。上から反花、方形石1、方形石2となる。反花と方形石1を1石で作る。方形石2は2面に刻銘がある。

**A 反花** 主弁は、單弁 8 葉の二重形式で、主弁間に間弁を置き計 16 葉である。軸 2 上部反花とは弁の形態が近似するが、上段の弁の先端のみ尖らず、丸くなるという相違がある。

**B 方形石** 側面は4面ともに無文である。上の反花と1石で造る。

C 方形石2 3石で造る。南側は1石、北側は2石である。3石ともに火熱による欠損・ひび割れ等が著しい(表2)。南北側面に楷書で陰刻された刻銘がある。

正面となる南面には、3文字×5行、2文字×2行の7行にわたり計19字がある。大きく深い彫り方である。「宝鏡印陀羅尼口 华蔵一部 一石一字書写」と復元できる。

北面の刻銘のある石材には、「□石一／□□写」と2行が確認できる。「一石一字書写」と復元できる。文字は小さく、浅い彫り方である。南面の書体とは異なり、別人による刻銘とみられる。北面のもう1石には刻銘は見られない。

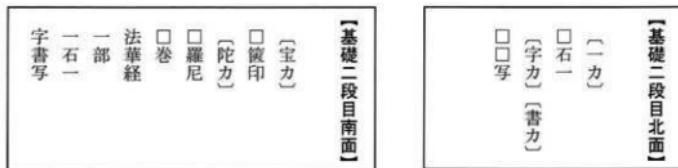


表2 基礎(方形石2)板石規格

番号	位置	長		高		厚		備考
		寸	cm	寸	cm	寸	cm	
1	南面	21.2	64.2	5.5	16.7	11	33.3	1面に刻銘
2	北面	12	36.4	5.5	16.7	10	30.3	
3	北面	9	27.3	5.5	16.7	10	30.3	1面に刻銘
平均		14.1	42.6					

## ⑤ 基塘

## A 基墙石材

5段の板石組基壇である。全体が階段状の方形壇となり、内部は中空である。

1段目は4石、2段目は7石、3段目は8石、4・5段目は11石の計42石で構成する。

板石単体の長さは、最小3寸2分(9.7cm)から最大2尺1寸6分(65.4cm)で、平均は1尺4寸9分(45.1cm)である。板石の長さは、上段ほど長いものが用いられている。

小口面は5段目を除き、幅3.8~5.3寸である（表3）。

B 基壇刻銘

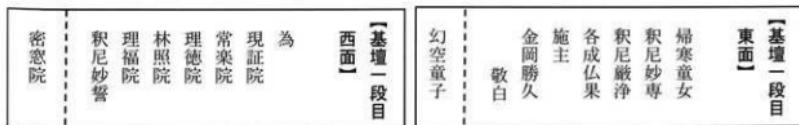
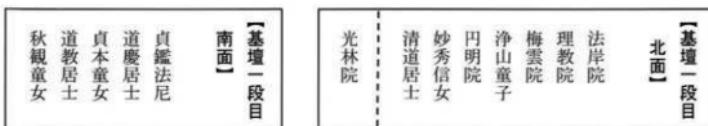
基壇の1段目には、四面に刻銘がある。戒名を主とし、ほかに施主名がある。

南面は、6人の戒名、西面は「為」の後2石にわたり計7人の戒名、北面は2石にわたり計8人の戒名、東面は3人の戒名の後、「各成仏界」の語句、施主名、「敬白」、次の石に戒名1人である。

戒名者は 25 人、俗名者 1 名の計 26 名である。

表3 基壇板石規格

段	番号	位置	長	高	厚	備考		
			寸	cm	寸			
1段目	1	南面	21.2	64.2	7.5	22.7	4.4	13.3
	2	西面	20.6	62.4	7.5	22.7	5	15.2
	3	北面	21.6	65.4	7.5	22.7	5.3	16.1
	4	東面	21	63.6	7.5	22.7	4.9	14.8
2段目	5	南面	15.8	47.9	7.5	22.7	5.1	15.5
	6	南面	15	45.5	7.5	22.7	4.7	14.2
	7	西面	21.5	65.1	7.5	22.7	計測不能	
	8	北面	14.7	44.5	7.5	22.7	4.2	12.7
	9	北面	4	12.1	7.5	22.7	計測不能	
	10	北面	12	36.4	7.5	22.7	4.2	12.7
	11	東面	21.2	64.2	7.5	22.7	計測不能	
3段目	12	南面	14.8	44.8	7.5	22.7	計測不能	
	13	南面	17.1	51.8	7.5	22.7	4.7	14.2
	14	西面	15.8	47.9	7.5	22.7	計測不能	
	15	西面	16.5	50.0	7.5	22.7	4	12.1
	16	北面	15.2	46.1	7.5	22.7	計測不能	
	17	北面	17.3	52.4	7.5	22.7	5	15.2
	18	東面	16.3	49.4	7.5	22.7	計測不能	破断
	19	東面	15.5	47.0	7.5	22.7	5.3	16.1
	20	南面	5.4	16.4	7.5	22.7	計測不能	
4段目	21	南面	14.9	45.1	7.5	22.7	計測不能	
	22	南面	17.4	52.7	7.5	22.7	3.8	11.5
	23	西面	17.3	52.4	7.5	22.7	計測不能	
	24	西面	15.5	47.0	7.5	22.7	計測不能	
	25	北面	14	42.4	7.5	22.7	4.8	14.5
	26	北面	11.4	34.5	7.5	22.7	計測不能	
	27	北面	16.1	48.8	7.5	22.7	4.4	13.3
	28	東面	19.3	58.5	7.5	22.7	計測不能	
	29	東面	3.8	11.5	7.5	22.7	計測不能	
	30	東面	13.3	40.3	7.5	22.7	4	12.1
5段目	31	南面	16.5	50.0	4	12.1	6.3	19.1
	32	南面	14.8	44.8	4	12.1	計測不能	
	33	南面	7.8	23.6	4	12.1	計測不能	
	34	西面	12.8	38.8	4	12.1	7.6	23.0
	35	西面	18	54.5	4	12.1	計測不能	
	36	西面	16	48.5	4	12.1	5.6	17.0
	37	北面	10	30.3	4	12.1	計測不能	
	38	北面	17.7	53.6	4	12.1	計測不能	
	39	北面	13.3	40.3	4	12.1	6.3	19.1
	40	東面	3.2	9.7	4	12.1	計測不能	
	41	東面	15.5	47.0	4	12.1	計測不能	
	42	東面	13.5	40.9	4	12.1	計測不能	
			平均	14.9	45.1	5.0	15.1	



刻銘の文字を見ると、2種類があることがわかり、別人による刻銘とみられる。これは基礎方形石2の南北面での違いでも明らかになっている。

筆跡Aの人物の文字は、整った楷書で、細めである。

筆跡Bの人物の文字は、片彫り的で、やや太めである。末尾面となる東面の「幻空童子」から「敬白」までがこれにあたる。それ以外はすべて筆跡Aの文字である。なお、「幻」は誤字となっている。

これを刻銘のある部材ごとに同定した結果を表4に示した。これによれば、筆跡者Aが石塔全体のうち75%、軸2の梵字部分も筆跡者Aと想定すると80%の高率で

占めており、中心的な部分の担当者であったことがわかる。筆跡者Bは、基礎において筆跡者Aと同じ語句を対面に彫り、また基壇戒名においては、末尾の1面のみを担当している。この末尾面には願主金岡勝久の俗名が記載されている。

筆跡Aの人物は、経文や梵字を熟知していることから宗教関係者、具体的には真興寺住職等が想定される。筆跡Bの人物は、筆跡Aの人物を受けて、その残り及び願主部分を担当していることから、願主である勝久本人かその関係者と想定される。

⑥補修 本体各部材のはほとんどは造立当初のものと推定されるが、一部防水コーティングやモルタルによる接着を施している部分もある。笠は、隅飾突起の形状・角度、石材、様式からみて、近代において新設したものとの可能性が否定できないが、ここでは造立当初のものとみておく。

#### (9) 審察

##### ①石塔の意義

宝篋印塔はいわゆる宝塔であり、その中に宝篋印陀羅尼經を奉納することにより功德を得られるとして、宝篋印塔の造立が鎌倉期以降盛んに行われた。

中世（鎌倉・室町・戦国時代）における宝篋印塔は、本例のように塔身全部を刻銘とするものはほとんど見当たらず、梵字種子（パン・キリーク・アーンクなど）や阿弥陀如来坐像等像容を刻出するものが主である。

近世期（江戸時代）における宝篋印塔は、形態や造立目的等の多様性から、石塔形式としての確立した分類編年ではなく、中世期からの延長として概括的な変化変容について述べられることが多い。刻銘からのアプローチが一部あるが、特に塔内に納められた経文あるいは礫石経との関係性の分析は、内部の発掘例がほとんどないため検討事例が少ない。近世期における宝篋印陀羅尼經奉納方式の解明はまだ不十分であるといえる。

宝篋印塔造立は、江戸中期18世紀後半以降に隆盛し、主として寺院境内に設置された。密教では真言宗・天台宗・禅宗では曹洞宗寺院を中心としており、3mを超える大型のものも多い。

これまで行った真言宗寺院医王山東葉寺・五穀山龍高寺・藤居山富山寺における宝篋印塔及び礫石経の分析から、18世紀末～19世紀中頃における宝篋印塔造立は、宝篋印陀羅尼經の書写・納置による造立祭祀という共通性のもとに行われたことが判明した。

宝篋印塔陀羅尼經に書かれた宝篋印塔造立の趣旨は、手段として宝篋印陀羅尼經の納經が行われることが本来の形である。しかし、中世以来全国における宝篋印塔造立の現状を見ると、納經された經典（礫石経が主）は法華經等が主体であり、宝篋印陀羅尼經はごくわずかである。

この意味で、富山における18世紀末～19世紀中頃における宝篋印塔造立の祭祀のありかた、すなわち宝篋印陀羅尼經の納經行為は、元來の宝篋印塔造立の趣旨に立ち戻ったものであり、仏教史にお

表4 筆跡に基づく部材別鑑定

部材	筆跡A	筆跡B
軸2	南面・西面	一
基礎	南面	北面
基壇	南面・西面・北面	東面

いても大きな年期を示すものと評価できる。

### ②宝篋印塔造立者金岡勝久について

本石塔が造立された経緯は、軸 2 裏面と基壇の銘文の情報をもとに推定が可能である。これによれば、現証院ほか計 25 人の戒名者の追善供養のため、金岡勝久が発願して造立したものである。

金岡勝久は、富山藩士金岡彦四郎勝久のことである。勝久は、富山市文殊寺出身の金岡家 8 代当主で、文政 7 年（1824）30 俵士分、天保 4 年（1833）知行 100 石となり、後に御郡頭取となった。翁久允が入手した「金岡彦一郎に関する古文書」によれば、天保初め頃自殺し、土分を取上げられたという〔翁 1939〕。

勝久の戒名は「円明院一実勝久居士」で、天保 4 年 10 月 17 日 38 歳で死去した。したがって、本石塔は、勝久が死去する直前か死去後間もない時期に造立されたことがわかる。この規模の石塔は、発注してから完成まで数か月以上かかることから、発願は勝久の存命中のことと理解できる。戒名は生前戒名を授けられていたとすれば、勝久の戒名が掲載されていてもおかしくはない。しかし戒名等の刻銘は短時間でできること、また造立日は遡ることが可能であることなどから、勝久の死直後に製作を着手したと考えることも無理ではない。このことは、勝久の戒名と俗名は筆跡が異なり、別々の人物によって書かれたことと関連するのかもしれないが、その詳細な事情は不明である。

### ③戒名者について

基壇に刻銘された戒名者 25 人については、金岡家初代から、勝久を含めた 8 代までの当主とその室、及び勝久自身の血縁者とみられる。由緒等の情報を整理したものが表 5 である。

表5 刻銘者一覧

番号	表記	該当者情報		個人情報
		戒名・法名	忌日	
1	現証院	徳田一法居士	寛文11 1671.12.3	金山与兵衛一法、(金岡家初代)
2	常楽院	法岸秀意大師	元禄2 1694.6.4	金山与兵衛妻
3	理徳院	法金道山居士	享保13 1728.10.12	富山小杉村 金山庄右衛門(金岡家二代)
4	林照院	理法妙全大師	享保12 1727.5.10	富山小杉村 金山庄右衛門妻
5	理福院	悦山道安居士	延享5 1748.1.8	小杉屋庄三郎(金岡家三代)、元在小杉村、初テ富山住、家系図では庄三郎勝安
6	釈尼妙誓	(位号 禅尼)		庄三郎妻、富山寺町正覚寺葬。太郎丸屋庄治良血縁? 家系図では片掛円童寺娘
7	密窓院	真山道法居士	寛政3 1791.4.3	売薬商人? 小杉屋彦三郎(金岡家四代)、家系図では庄三郎勝良
8	法岸院	清光妙泉大師	寛政3 1791.7.11	彦三郎妻
9	理教院	弧峯良仙居士	寛政3 1791.2.9	小杉屋庄三郎(金岡家五代)家系図では彦三郎庄治郎
10	梅雲院	高岸義明大師	寛政10 1798.10.12	庄治郎妻
11	源法院	密印淨山童子	寛政5 1793.12.24	小杉屋庄之助(金岡家六代)
12	円明院	一實勝久居士	天保4 1833.10.17	富山藩士 金岡彦四郎勝久(金岡家八代)
13	妙秀信女			
14	清道居士			
15	幻空童子			
16	貞鑑法尼			
17	道応居士			
18	眞本童女			
19	道教居士			
20	秋觀童女			
21	理貞法尼			
22	光林院	真覚宗清居士	文化元 1803.12.16	太郎丸屋庄次郎
23	帰寒童女		天明6 1786.11.23	五代庄三郎二女
24	釈尼妙専信女	釈尼妙専	文化8 1811.2.3	六代庄之助妹
25	釈尼巖淨			

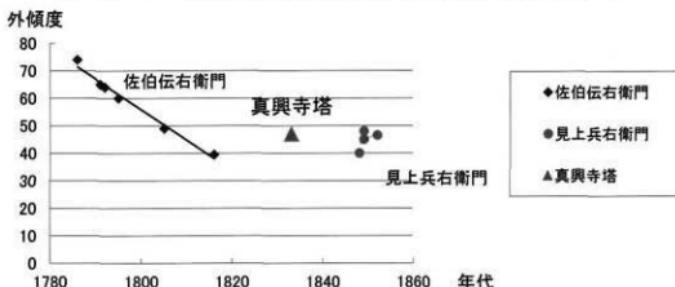
これら金岡家の代々系譜について供養のため宝篋印塔に刻む行為は、その後、勝久の二男彦一郎勝任が、複数の宝篋印塔造立を行い、継承した。この詳細については後段で検討する。

#### ④製作石工の推定

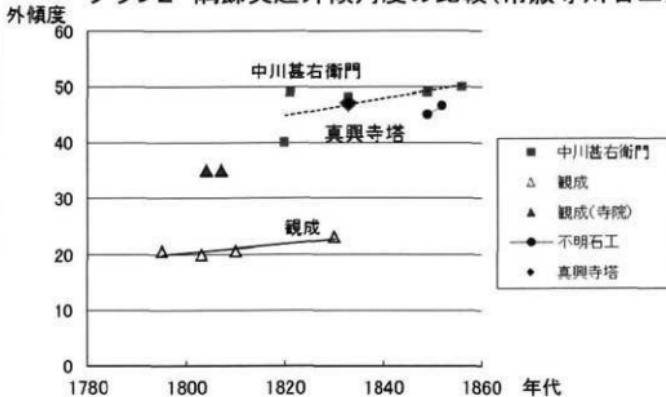
本石塔の製作石工は、石工名刻銘がないため、不明である。本石塔の製作石工を明らかにするため、他の宝篋印塔との比較を試みる。

本塔以後、勝久の二男勝任が造立した3基の石塔のうち、本塔の15年後に造立された富山寺塔は、富山町石工見上兵右衛門の製作である。見上兵右衛門は、文政元年（1818）以降石工名刻銘が認められ、宝篋印塔においてはこれまで富山寺塔が最も古い〔富山市埋蔵文化財センター編 2013〕。それ以前の宝篋印塔製作石工として佐伯伝右衛門が知られる〔古川 2013a〕が、伝右衛門は遅くとも文化2年（1805）以降製作を行っていないので、富山町石工であれば見上兵右衛門である可能性が最も高い。このことについて詳細にみると、笠の隅飾突起の外へ開く傾きの角度は、石工によって異なり、一

グラフ1 隅飾突起外傾角度の比較(富山町石工)



グラフ2 隅飾突起外傾角度の比較(常願寺川石工)



定の特徴と推移を持つことが判明している〔富山市埋蔵文化財センター編 2013〕。これにより本塔がどの石工の範疇に含まれるかを確認する。

富山町石工においては、佐伯伝右衛門は年の経過とともに外傾度は小さくなっていく。すなわち隅飾突起は起き上がってくる。一方見上兵右衛門は、40～48 度の間で概ね一定する（グラフ1）。真興寺塔は 47 度であり、両方に含まれうるが、年代からみて見上兵右衛門の可能性がある。

一方、常願寺川石工においては、年代からみて、善名村石工観成と馬瀬口村中川甚右衛門がいる。観成・甚右衛門ともに年代の経過とともに外傾度は大きくなる傾向にある（グラフ2）。真興寺塔は、中川甚右衛門の範疇と一致する。

よって、隅飾突起の外傾角からみて、見上兵右衛門と中川甚右衛門が候補者となる。

次に塔の文様や様式から検討する。両者の最も顕著な違いは、請花・反花の主弁形態である。富山寺以降の兵右衛門では主弁が二重となる。一方甚右衛門は、大型塔では主弁は単弁で弁脈をもつ。小型塔では単弁で弁脈がないといった相違がある。このことから、主弁が二重となる真興寺塔は、見上兵右衛門の形態に近いといえる。

以上のことから、本塔は富山町石工見上兵右衛門が製作したと推定しておきたい。

#### ⑤真興寺とのかかわり

金岡氏の菩提寺は、富山市文珠寺の真言宗金城山宝寿院である（p25 参照）。

金岡勝久が施主となった宝篋印塔が真興寺に境内に置かれた経緯は不明である。他寺院において寄進された宝篋印塔が境内に置かれた場合、その施主・願主は当該寺院の有力信徒・檀家であることがほとんどである。したがって、金岡勝久は真興寺の有力信徒であったことが推測されるが、当時の過去帳は焼失して現存せず、確認は困難である。

なお、本塔造立時における真興寺住職は 29 世（位号不詳）または 30 世覚円（安政 6 年寂）と推定されるが、詳細は不明である。

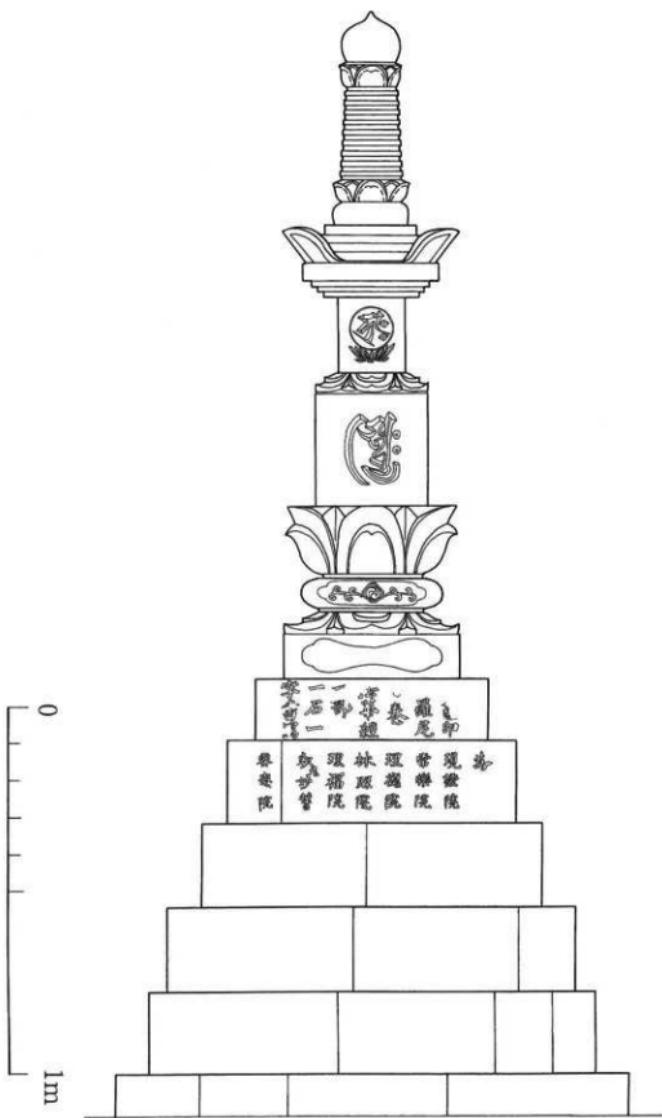
#### （10）結語

本宝篋印塔は、富山藩士金岡彦四郎勝久が発願して天保 4 年（1833）造立したものである。基壇には、金岡家初代から 8 代勝久までの代々血縁者等 25 人の戒名が刻まれており、先祖供養のため造立したものと推定される。しかし、勝久以前に年忌の該当者がいない。

勝久は造立と同じ頃に死去した。本塔では勝久を施主としている形であるが、実質的には勝久の菩提を弔うために造立したものと考えられる。

勝久の子 9 代金岡彦一郎勝任は、弘化 5 年（1848）以後富山寺など 3 基の宝篋印塔を造立し、真興寺塔と類似した形の先祖供養を継承した。いずれも富山町石工見上兵右衛門が製作しており、本塔も兵右衛門が製作したものと推定される。

本塔は、金岡氏ゆかりの宝篋印塔であり、真興寺の有力信徒であったと推定される勝久を供養するため金岡氏によって境内に設置されたものと考えられる。



真興寺宝篋印塔実測図



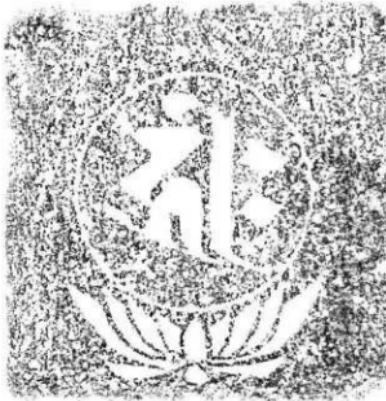
軸1 南面 実測図（タラーク）



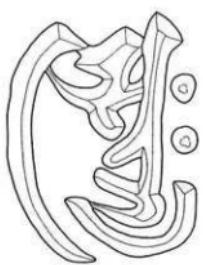
同左 拓影



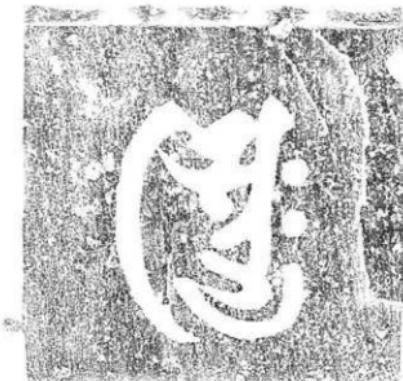
軸1 東面（ウン） 拓影



軸1 西面（キリーク） 拓影



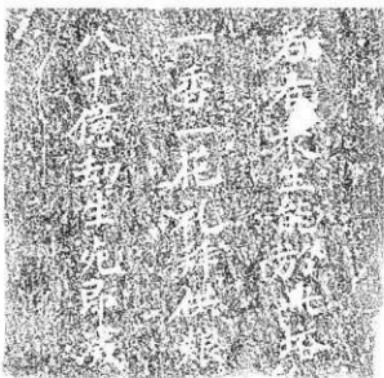
軸2 正面実測図 (シッチリア)



同左 拓影

若有衆生能於此塔  
一香一花禮拜供讚  
八十億劫生兜頭戒

軸2 西面 経文



同左 拓影

軸2 (1/4)

法界万灵一切含識  
前古後滅平等利益  
元保四裔已歎造立之

軸2 北面 年号等



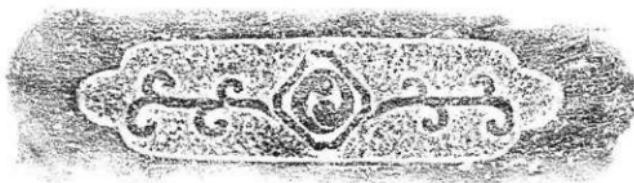
同左 拓影

光明真言梵字

軸2 東面 光明真言梵字



同左 拓影



幔頭形 正面 拓影 (1/3)

字  
書  
寫  
一  
石  
一部  
華  
經  
卷  
羅  
尼  
道  
師



基礎 2 段目 正面 (上: 実測図、下: 拓影)

三  
居  
一  
寫



基礎 2 段目 北面 (左: 実測図、右: 拓影)

基礎 2 段目 (1/4)

壽  
現  
常  
樂  
院  
理  
德  
院  
林  
熙  
院  
理  
福  
院  
妙  
誓  
觀  
卷  
院



基壇1段目 西面（上：実測図、下：拓影）

法  
華  
院  
理  
教  
院  
梅  
雲  
院  
淨  
山  
童  
子  
圓  
明  
院  
妙  
秀  
信  
女  
清  
道  
居  
士  
光  
林  
院



基壇1段目 北面（上：実測図、下：拓影）

真鑑妙尼

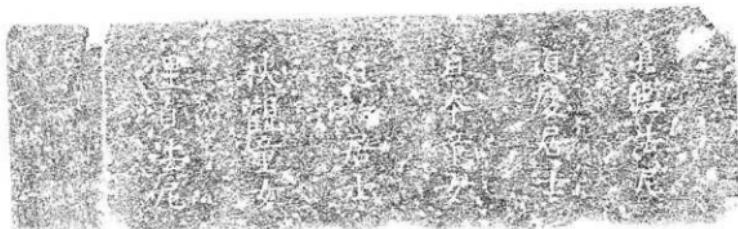
道慶居士

真本童女

道教居士

秋觀童女

理真法尼



基壇1段目 南面（上：実測図、下：拓影）

女榮童女

觀尼妙畢

觀尼麗淨

各成佛果

施主

金闕勝久

敬白

幼空妙子



基壇1段目 東面（上：実測図、下：拓影）

基壇刻銘 （1/5）



境内入口門（南から）



宝篋印塔位置（東から）



宝篋印塔全景（東から）



相輪・笠（南西から）



相輪（上から、上が東）



相輪の宝珠



軸1・2（北面）



笠・軸1（南面）



軸2正面 梵字「シッチリア」



軸2裏面（北面）光明真言梵字



軸2東面 宝篋印陀羅尼經文



軸2西面 經文・造立年



反花（南東から）



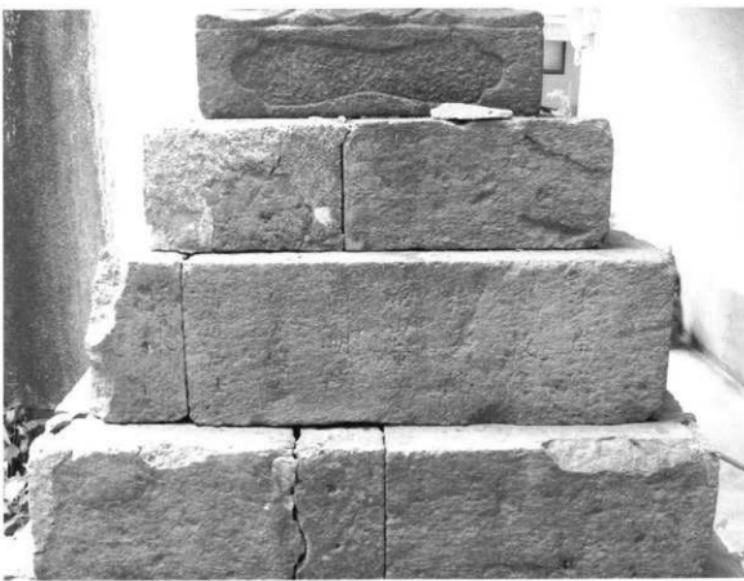
饅頭形・基礎 (東面)



基礎 正面 刻銘 (南面)



基礎・基壇 正面 刻銘



基礎・基壇 北面 刻銘



基壇 東面 刻銘 「円明院」は金岡勝久の戒名



基壇 西面 刻銘 「金岡勝久」

## 2 金城山宝寿院宝篋印塔

- (1)調査の目的 富山町石工製作石造宝篋印塔の記録調査  
(2)調査日 平成 26 年（2014）6 月～7 月  
(3)調査者 古川知明（埋蔵文化財センター所長）  
(4)所在地 富山市文珠寺 金城山宝寿院境内  
(5)種別 宝篋印塔  
(6)年代 天明 7 年（1787）  
(7)宝寿院の概要

金城山宝寿院は、真言宗古刹である。開基は承久 2 年（1220）良舜とする。慶長 4 年（1599）宗信が中興し、以後現在まで 29 世に及ぶ。

貞享 2 年（1685）の『寺社由緒書上』〔井上校訂 1974〕には、「承久式年ニ開山良舜建立仕」とあり承久 2 年良舜開基とする。宝寿院山門の棟札（富山県指定文化財）には「以前造立棟札承久二年歳次庚辰八月八日」とあり、この年号を開山年に引用した可能性がある。棟札の表には「奉造立社頭 応仁元歳次丁亥四月廿八日、願主明舜法印七十八歳、御遷宮同十一月十五日」とある。応仁元年は 1467 年で、某「社」とは宝寿院の別当社である武部神社か明舜が別当を勤める立山寺かとしている〔高瀬監修 1999〕。明舜は、文明 6 年（1474）年立山院主であることが同年太田保面白寺梵鐘（射水市専念寺蔵）から判明する。

『越中史徵』〔森田 1973〕によれば、往古「武部之文殊」と呼ぶ靈仏を本尊とする七堂伽藍（一院三十坊）が存在し、寺号を文珠寺・院号を宝寿院と唱えたという。また、文珠寺は立山の末社であったとする。

『金城山宝寿院由緒』〔堀 1935〕によれば、10 世光遍代に、本堂は字「中坪」から現在地に移転したという。

### ⑧調査概要

①経緯 宝篋印塔は、境内北西側に所在する。山門から本堂へ向かう参道の右側に置かれており、参道に面する面が正面として意識されていると考えられる。

この宝篋印塔は、組合せ式の石造塔で、江戸後期における越中真言宗寺院の模範様式を備えた塔である。宝篋印塔は、本体と石積基壇からなる。経年劣化によりずれ・風化・ひび割れが認められるが、全体として遺存状況は良好である。

### ②全体構成（表 1）

本体高さは 10 尺 1 寸 7 分（308.2cm）である。

石塔本体の構成は、上から相輪、笠、塔身（5 段）、基礎（2 段）、基壇 4 段の 13 段構成である。

本体下の石積基壇は、安山岩主体の割石積で、上辺 45 寸（136.4cm）、下辺 55 寸（166.7cm）、高さ 24 寸（72.7cm）の台形である。本体造立当初から存在していたかどうかは不明である。

③相輪 上から宝珠・上部請花・九輪・下部請花・伏鉢の順となる。これらは 1 石で造る。

宝珠は球形で、上端は少し尖る。上部請花との間に欠首がある。

上部請花は、横長の単弁で、主弁は中央を達磨形に彫りくぼめる。間弁は中央に稜がある。主弁 4 葉、間弁 4 葉の計 8 葉構成である。

九輪は横断面円形、縦断面方形で、径は上が小さく、下が大きい。作りはシャープである。九輪上部と上部請花の間は 2 寸空いている。ここに飾金具が取り付けられていた可能性がある。1 輪目と 2

表1 宝寿院宝篋印塔規格

	区分	部位	高さ		幅		備考
			寸	cm	寸	cm	
本体	相輪	相輪	22.6	68.5	6	18.2	
	笠	笠	6.5	19.7	16	48.5	軒上5段、軒下2段
	塔身	軸1	6.5	19.7	6.2	18.8	4面に月輪浮彫+梵字種子
		反花	2.8	8.5	12.5	37.9	
		般頭形	1	3.0	12.5	37.9	反花と一体造
		軸2	9.2	27.9	9.7	29.4	4面に経文・造立経緯等刻銘
		請花	14	42.4	5.5	16.7	2段
	基礎	反花	4.5	13.6	15.6	47.3	
		基礎1	4	12.1	15.6	47.3	
		基礎2	5.5	16.7	20	60.6	2面に刻銘（供養者・施主・石工）
基壇	基壇	基壇1	6.6	20.0	24.9	75.4	礫石経投入口1か所あり
		基壇2	7	21.2	29.4	89.1	
		基壇3	6.5	19.7	34.4	104.2	
		基壇4	5	15.2	39.2	118.8	
		計	101.7	308.2			

輪目の間で折れ、モルタルで接着復元されている。

下部請花は、横長花弁の上縁が3段の花頭形になるもので、弁縁は縁取がされ盛り上がる。花頭形の下方末端は弧を巻く。

伏鉢は半球形である。下部請花との間は欠首がある。笠とはモルタルで固定されている。

④笠 軒上5段、軒下2段である。軒上2段は三角形に突出する段であり、その上3段は階段状となり、上にいくにつれ小さく低くなる。

隅飾突起は57°の角度で外側へ広がり、内側は弧状である。隣接する隅飾突起2つの先端の間隔は16寸(48.5cm)である。

隅飾突起外面の文様は、突起上端のみ輪郭を卷いた弧下端が渦巻状となる。内部は無文で、丁寧に平滑加工している。

隅飾突起上面は、平滑で丸い。隅飾突起上端は、笠上端とほぼ同じ高さである。

⑤塔身 4石5段で構成する。上から軸1、反花、般頭形、軸2、請花となる。

A 軸1 縦横ほぼ同寸の方形石である。上の笠下部が5mm程度彫り込まれ、そこに天端が收まる。また下の反花天端も同様に浅く彫り込まれ、そこに底部が收まる。

4面には、花頭形に彫り込まれた中に月輪を浮き彫りし、その中央に金剛界四仏の梵字種子を薬研彫で陰刻する。本塔では、塔全体が東西南北の方位を意識した方向ではなく、本堂・山門等主要施設の方向を意識して置かれており、方位とほぼ45度のずれがある。

なお、北面にあるべきアク（不空成就如来）は、現方位では南西面に存在しており、45度以上のずれが認められることから、少なくとも一度以上移動した可能性が指摘できる。

月輪の下には蓮華座を薬研彫で表現する。中央には宝珠形の蕾、その両側に花弁6葉、下には子葉2葉を配する。

B 反花 下の般頭形と1石で造る。上面は軸1を嵌め込むため5mm程度彫り込んでいる。

主弁は8葉で上下2段である。間に間弁を置き、計24葉である。上段の主弁は先端部が厚くなり、大きく尖って反る。下段の主弁先端の反りは小さい。間弁は幅が狭く厚い。シャープな稜が通る。

C 軸2 横長の方形石で、反花と1石で作る。4面には刻銘がある。銘文は陰刻で彫る。

【南東面】参道からみて正面側となる。4行にわたり 25 文字で銘文がある。「奉唱光明真言百万遍／法界万魂一切含識／前亡後滅平等普潤／天明第七秋建造焉」とあり、願意及び造立年が書かれる。「法界万魂」は、一般には「法界万靈」と表記しており、経文等にも見える。「万魂」の表記はたいへん珍しい。「一切含識」は大藏経中 42 経に見える単語で、「前亡後滅」は「夢窓国師語録」(No.2555) のみに用語がある。

造立した天明 7 年は西暦 1787 年である。

【北東面】右面である。光明真言梵字 24 文字を、8 文字×3 行にわたり刻む。右上から左下へ縦に進む。

【北西・南西面】宝篋印陀羅尼經と通称する「一切如來心秘密全身舍利寶篋印陀羅尼經」(大正 T.1022B) からの引用である。北西面は 8 文字×3 行=24 文字で、19.0713b19~21 に該当する。経文原文とは 2 か所異なる。経文の冒頭「若有有情」は「若有衆生」に、末尾の「生死重罪」は「生死即滅」に変更している。

南西面は 8 文字×2 行と末尾行は 7 文字の計 23 文字である。頭初の 2 行は 19.713b22~23 に該当する 3 行目の 7 文字は、経文ではなく、各所からの単語引用による集成と思われる。

したがって、この軸 2 における刻銘は、南東面から始まり、南西面→北西面→北東面へと流れることがわかる。内容の順序としては、願意・造立年→宝篋印陀羅尼經文(部分引用)→光明真言梵字の流れで記載されていることになる。

造立時、どの位置にどの方向であったかは不明であるが、現在の南東面が正面として意識されていたと推定される。

D 講花 1 石で造る。主弁は 8 葉で上下 2 段である。間に間

弁を置き、計 24 葉である。上段の主弁は先端部が小さく尖って反る。下段の主弁は薄く丸い。間弁は薄く先端は丸い。稜が通る。塔身反花・基礎反花と異なり、立体性に乏しい。

E 饰頭形 敷茄子ともいう。平面四角形で、側面は半円形である。

上段の反花と 1 石で造る。厚さ 1.8 寸の無文方形部があり、下の輪 2 がはまるよう 5mm 以上彫り込んでいる。同じ様式の饗頭形は、本塔と同じ富山町石工佐伯伝右衛門の製作である天明 6 年(1786) 千光寺塔〔富山市埋文センター 2014〕に見える。

⑥基礎 基礎は上下 2 石に分かれれる。

A 上段石(基礎 1) 上から、反花・方形段となる。反花は、塔身②の反花と同形態で、上段の弁先端が厚く、尖って大きく反ることが大きな特徴である。

方形壇の側面は、四面ともに額形を陽刻し、その中に祥雲文もしくは波涛文の文様を彫り込むもので、彫出手法は、天明 6 年千光寺塔と共通する。

祥雲文は、正面とみられる南東面と対面する北西面、波涛文は、北東面と対面する南西面にある。

南東面と北西面の祥雲文の構成は異なっており、南東面では、画面中央を境に左側に 4 個、右側に 3 個の計 7 個を配置する。尾は 1 個上向きが付く。左の 4 個は 2 個一対となっている。右側の祥雲の尾は各々に付き、下向きである。

その裏面となる北西面では左右の個数配分は同じであるが、左側の 4 個は横一列で、尾は下向き 1 上向き 2 である。右側の 3 個は上向きの尾 2 である。

【南東面 正面】	奉唱光明真言百万遍 法界万魂一切含識 前亡後滅平等普潤 天明第七秋建造焉
-------------	---

【北西面 裏面】	若有衆生能於此塔 一香一花礼拝供養 八十億劫生死即滅
-------------	----------------------------------

【南西面 左面】	或一札拝或一右繞 塞地獄門開菩提路 阿鼻重罪忽脫極
-------------	---------------------------------

【北東面 右面】 (光明真言梵字)	オン・ア・ボ・キヤ・ベイ・ロ・シャ・ナウ マ・カ・ボ・ダラ・マ・ニ・ハン・ドマ ヂンバ・ラ・ハラ・バ・リタ・ヤ・ウン・終
----------------------	--

北東面と南西面の波涛文の構成も異なっている。北東面は、画面中央を境に左側に右向きの波頭 3 + 飛沫 2、右側に複雑な構造の左向きの波頭 3 + 飛沫 2 を配置する。南西面は、画面中央を境に左側には、左右に割れた波頭 2×2、飛沫 3、右側には複雑な構造の右向き波頭 2 + 飛沫 2 を配置する。

B 下段石（基礎 2） 長方体の 2 石を横に並べる。正面となる南東面に小口面を置く。

2 石ともに大面に楷書陰刻による刻銘がある。刻銘の内容は次項で検討する。

#### ⑦基礎刻銘

南西面には、4 行にわたる楷書があり、「為利福院／悦山道安□□／釈妙誓禪□／各盡願成仏果」とある。

「為」とあり以下の 2 人の戒名者に対する供養であることを示す。「利福院悦山道安□□」は院号者の戒名で、末尾号は石材が欠損し不明であるが「居士」である。「釈妙誓禪尼」は女性であり、2 人は夫婦とみられる。室は浄土真宗信徒のため釈号である。末尾行はこの 2 人の靈に対し成仏するよう供養する趣旨を示した内容である。

対面する北東面には、右に「施主小杉屋／彦三郎」とある。

石塔造立の施主名で、造立費用の負担者である。「利福院悦山道安□□（居士）」「釈妙誓禪□（尼）」は彦三郎の両親とみられる。

北面左には、「富城住人／石工／佐伯伝右衛門」とあり、石工名を示す。

#### ⑧基壇

4 段からなる板石組基壇である。全体が階段状の方形壇となり、内部は中空である。

1・2 段目は 6 石、3・4 段目は 8 石の計 28 石で構成する。

切石単体の長さは、最小 7 寸 8 分 (23.6cm) から最大 2 尺 1 寸 8 分 (66.1cm)、平均 1 尺 5 寸 6 分 (47.1cm) である。小口面は幅 4~5 寸半のものが多い。

全体の 4 分の 3 弱の石材が常願寺川産の立山天狗山石（角閃石安山岩）である。その他は白色長石を含む安山岩で、同じ常願寺川産の八川石とみられるが、確定的ではない。

礫石経投入口から確認できた基壇内部には、信徒名を書いた紙で包んだ木札・布類・紙製蓮花等が詰まっていた。後述するが、おそらくこの塔を現在地に再建したときに、関係者及び再建時の祭式に使用したものを収めたと推定される。

⑨補修 本体各部材は造立当初のものと推定されるが、一部欠損部分の復元や雪による転落防止用固定のため、近年モルタルで接着作業が行われている。

#### (9) 考察

##### ①宝篋印塔造立の背景について

###### A 金岡家の事情

本塔が造立された経緯は、基礎と軸 2 東面の銘文により判明する。

これによれば、天明 7 年（1787）秋、本寺有力檀家の小杉屋彦三郎が、「利福院悦山道安居士」「釈妙誓禪尼」の 2 人の菩提供養のため造立したものである。

小杉屋彦三郎は売薬商人で、後に士分となり金岡姓を名乗る。金岡家 4 代当主庄三郎勝良である。寛政 3 年（1791）4 月 3 日死去した。戒名は密窓院真山道法居士である。彦三郎は、遺言により寛政 5 年 3 回忌に真言宗藤居山富山寺（普泉寺）に宝篋印塔を造立した〔富山市埋文センター-2013〕。

供養者の利福院は、金岡家 3 代当主庄三郎勝安で、4 代庄三郎の父である。小杉村（現富山市小杉）

【南西面】
各盡願成仏果
釈妙誓禪尼
悦山道安□□（居士）
為利福院

【北東面】
佐伯伝右衛門
石工
富城住人
施主小杉屋彦三郎

表2 基壇板石規格

段	番号	位置	長		高		厚		石材	備考
			尺	cm	尺	cm	尺	cm		
1段目	1	南東面	14.4	43.6	6.6	20.0	計測不能		八川石	
	2	南西面	12.7	38.5	6.6	20.0	5.8	17.6	立山天狗山石	
	3	南西面	12.2	37.0	6.6	20.0	5.3	16.1	立山天狗山石	
	4	北西面	15.5	47.0	6.6	20.0	5	15.2	八川石	礫石経投入口
	5	北東面	12.1	36.7	6.6	20.0	4.2	12.7	立山天狗山石	
	6	北東面	12.7	38.5	6.6	20.0	4.6	13.9	立山天狗山石	
2段目	7	南東面	14.4	43.6	7	21.2	5.6	17.0	立山天狗山石	
	8	南東面	15	45.5	7	21.2	4	12.1	立山天狗山石	
	9	南西面	20.9	63.3	7	21.2	計測不能		立山天狗山石	
	10	北西面	8.9	27.0	7	21.2	4	12.1	立山天狗山石	
	11	北西面	20.6	62.4	7	21.2	4.6	13.9	八川石	
	12	北東面	19.2	58.2	7	21.2	計測不能		八川石	
3段目	13	南東面	25	75.8	6.3	19.1	計測不能		八川石	
	14	南西面	10.1	30.6	6.3	19.1	4.9	14.8	立山天狗山石	
	15	南西面	8.4	25.5	6.3	19.1	3	9.1	八川石	
	16	南西面	16	48.5	6.3	19.1	4.5	13.6	立山天狗山石	
	17	北西面	13.7	41.5	6.3	19.1	4	12.1	立山天狗山石	
	18	北西面	11.8	35.8	6.3	19.1	3	9.1	立山天狗山石	
	19	北東面	17.4	52.7	6.3	19.1	4.5	13.6	立山天狗山石	
	20	北東面	17	51.5	6.3	19.1	4.8	14.5	立山天狗山石	
	21	南東面	20.8	63.0	5	15.2	4.6	13.9	立山天狗山石	
	22	南東面	18.4	55.8	5	15.2	4.7	14.2	立山天狗山石	
4段目	23	南西面	7.8	23.6	5	15.2	3.5	10.6	立山天狗山石	
	24	南西面	21.8	66.1	5	15.2	4	12.1	八川石	
	25	北西面	20.8	63.0	5	15.2	4.5	13.6	立山天狗山石	
	26	北西面	18.5	56.1	5	15.2	5	15.2	八川石	
	27	北東面	11.2	33.9	5	15.2	4	12.1	立山天狗山石	
	28	北東面	18.4	55.8	5	15.2	3	9.1	立山天狗山石	
	平均		15.6	47.1						

から富山町に出た。釈妙誓禪尼は庄三郎の室で、富山寺町淨土真宗本覚寺に葬られた。これは富山市片掛淨土真宗円龍寺の娘であることによる（本寺保管位牌等）。

利福院の忌日は、延享5（1748）年正月8日であり、宝篋印塔を造立した天明7年は、没後39年にあたる。

よって、宝篋印塔造立の直接的動機は、理福院悦山道安居士の40回忌の年忌供養のためと考えられる。ただし、40回忌の年忌供養は一般的ではないため、室とみられる釈妙誓禪尼の忌日（不明）が関係している可能性も否定できない。

## B 本寺との関係性

基礎銘文から見ると、宝篋印塔造立にあたって本寺が造立直接関わったことは確認できない。

しかし、この宝篋印塔が本寺境内に存在することは、本寺の承認なくして困難であることから、本寺とは何らかの関わりをもつものと考えられる。

第一に、立派な金岡家寺位牌が所蔵されていること、また金岡家墓所が本寺に隣接して存在することから見て、金岡家は宝篋印塔造立前後から、本家天正寺金山家とともに、本寺の有力檀家の一つであったと考えられる。このような事情から、菩提寺である本寺に先祖供養塔としての宝篋印塔造立を許されたものと考えられる。竣工時においては開眼の引導を本寺現住が担当し、多額の寄進を行ったものと推定される。

第二に、宝篋印塔における軸2経文は、宝篋印陀羅尼經からの引用であり、また光明真言梵字が使用されている。これらは僧籍者の関与なしに引用することは難しく、本寺住職が下書きを行うなどの関与があったことが推測される。

造立時における本寺住職は、表6に基づけば、13世行範代である。行範住職は、12世光漸住職の

死去を受けて就任したものとみられる。光漸住職の忌日は、天明 6 年 2 月 26 日で、宝篋印塔造立の 1 年半程前である。

ここで考えられるのは、宝篋印塔造立は光漸住職の一周年忌後半年後に行われていることである。

### C 造立の背景の推定

以上により、金岡家及び本寺の事情を踏まえて判断すると、光漸住職の一周年忌にあたり、当時最も有力檀家であった金岡家 4 代庄三郎が、先祖（両親）供養をも合わせた形で、宝篋印塔を造立したと推測するのが妥当であろう。ただし、宝篋印塔の刻銘に本寺関係者の記載がないことが考慮すべき点として残る。今後の資料に蓄積により再検討が必要である。

#### ② 宝篋印塔の位置について

本寺宝篋印塔は、現在本堂と山門を結ぶ参道を意識し、これと同じ方向で建てられていることは指摘したとおりである。

しかしながらこの方向は、方位（東西南北）と 45 度ずれが生じている。

宝篋印塔の多くは方位を意識している。これは軸 1 に彫られた梵字種子の四仏は、東西南北の方位を司っているためであり、四仏の方位にあわせて置かれている。

本寺では軸 1 に四仏梵字種子が彫られているが、全体が 45 度ずれているために、四仏の方向とは一致しない。

よって本宝篋印塔はもともと現在地に存在していたかどうかが問題となる。

本寺には信徒から寄せられた

古写真のデータが保管されている。これは大正年間の本堂前の写真と推定されている。

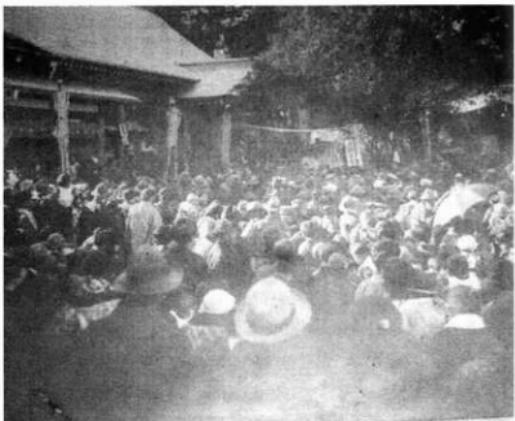
写真には、画面左に本堂があることから、写真是南西方向から撮影されたことがわかる。この写真には画面右に建物が写っているが、現在その建物はない。この建物の存在を示すものとして、基礎石が数石残っている。

宝篋印塔はかつてこの建物のあったところに存在しており、また、大正年間とされる写真には写っていない。

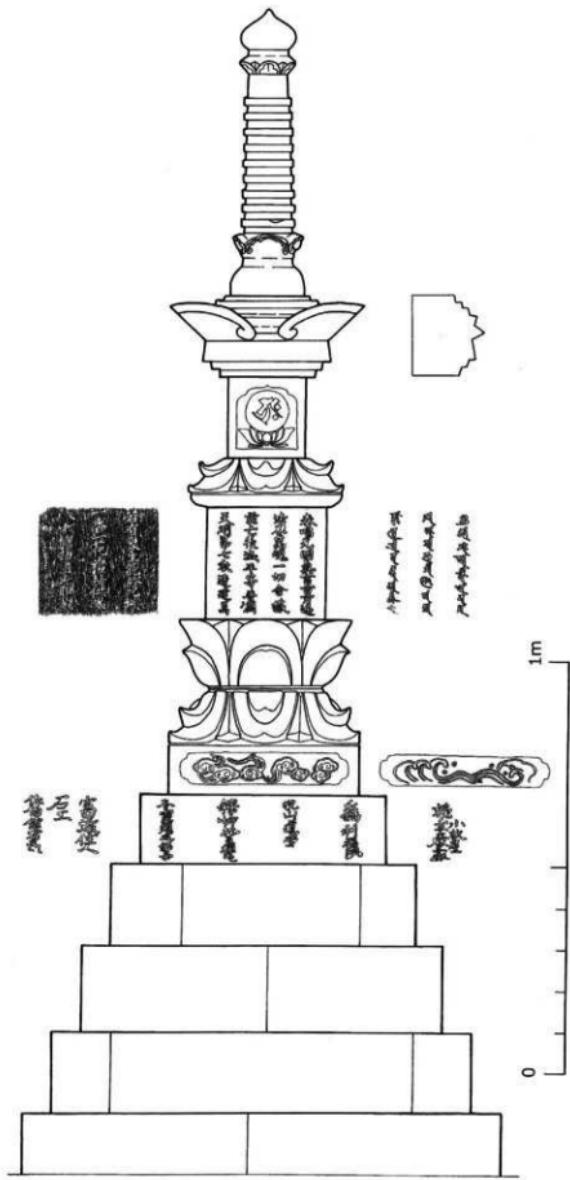
このことから、宝篋印塔は現在地とは別の場所にあり、大正年間以後、写真的建物が解体された後に旧地から移設され、現在のような形に再建されたものと推定される。その時期は不明である。

#### (10) 小結

本寺宝篋印塔は、有力檀家である金岡家 4 代勝良が両親の供養のため、天明 7 年に造立した。この時の宝寿院住職は 13 世行範である。金岡家の祖である金山氏は、文珠寺村から天正寺村へ移り加賀藩十村として有力化した。金岡氏も中級富山藩士となり、幕末には本寺有力檀家となった。金岡氏は多くの宝篋印塔を造立した。特に 4 代勝良と 9 代勝任が主体であり、本塔は最も古いものである。



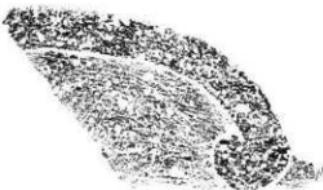
大正頃の本堂前の様子



宝寿院宝匝印塔 実測図



軸輪 上部請花 拓影 (1/2)



隅飾突起 側面 拓影 (1/3)



軸1 梵字種子ウン（阿閻如來）  
拓影 (1/3)



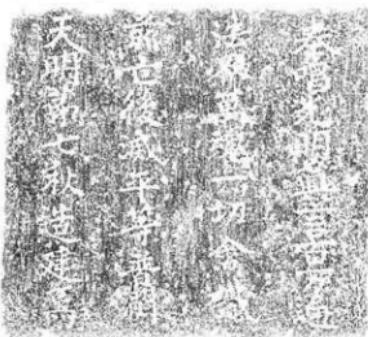
軸1 梵字種子アク（不空成就如來）  
拓影 (1/3)



軸1 梵字種子タラーク（宝生如來）  
拓影 (1/3)



軸1 梵字種子キリーク（阿弥陀如來）  
拓影 (1/3)



軸2 南東面刻銘 拓影 (1/4)

奉唱光明真言宣方道  
法界萬尊一切含藏  
前亡後滅平等普潤  
天明第七秋造建焉

同左 實測図 (1/4)



軸2 北東面刻銘 拓影 (1/4)

多聞水山是也  
凡聖皆可見也  
身已可見也

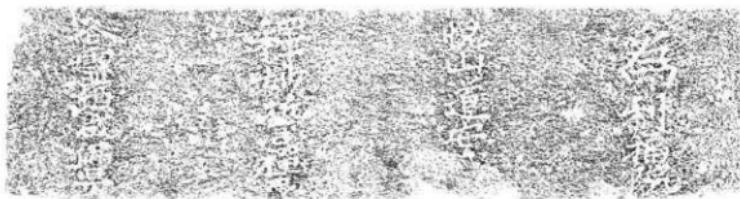
同左 實測図 (1/4)



軸2 北西面刻銘 拓影 (1/4)



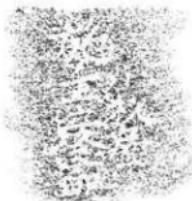
軸2 南西面刻銘 拓影 (1/4)



基礎2 南西面 刻銘（供養者）拓影（1/4）

香爐頭成佛  
釋迦牟尼佛  
悅山道人  
為利後學

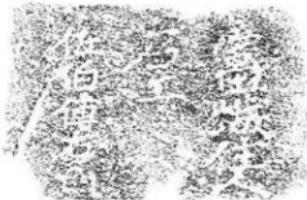
同上 實測圖



施主小秋星  
願

基礎2 北東面 刻銘（施主）拓影（1/4）

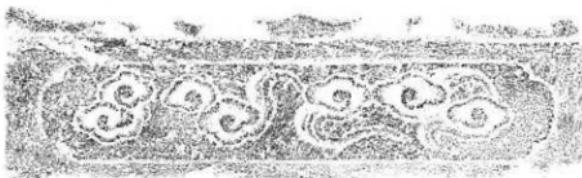
同左 實測圖



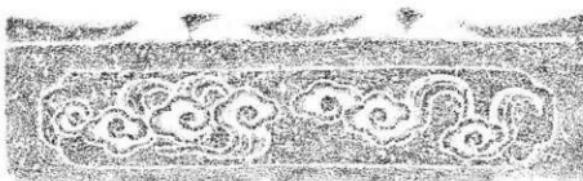
石工  
岱伯傳石匠  
富城住

基礎2 北東面 刻銘（石工）拓影（1/4）

同左 實測圖



基礎南東面 祥雲文浮影 拓影(1/4)



基礎北西面 祥雲文浮影 拓影(1/4)



基礎北東面 波涛文浮影 拓影(1/4)



基礎南西面 波涛文浮影 拓影(1/4)



宝篋印塔位置



相輪 全体



宝篋印塔全体（南東から）



宝珠



上部請花



九輪細部



下部請花・伏鉢



笠



隅飾突起



軒上段部



隅飾突起



軸1 南西面梵字種子（アク）



軸1 梵字葉研彫り



軸1 蓮台細部



反花・饅頭形



反花 先端



軸2 北西面刻銘



軸2 南西面刻銘



軸2 南東面刻銘



軸2 北東面刻銘



請花



基礎 南西面波濤文浮彫・刻銘

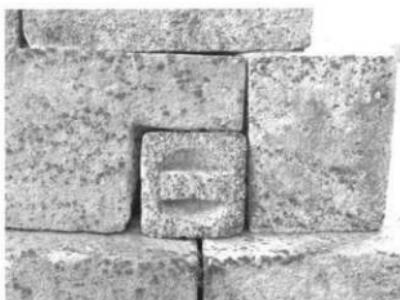


基礎 北東面刻銘（石工名）

基礎 北東面刻銘（施主）



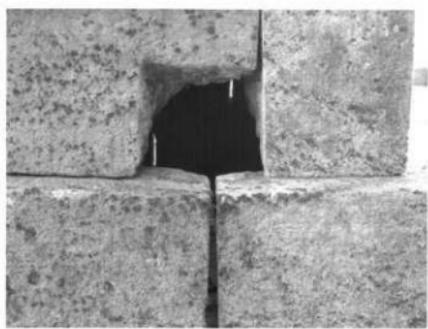
基礎（北から）



基礎 碓石経投入口



蓋石側面



礫石経投入口 蓋石を外した状態



基壇内部 切石内側状況



基壇内部状況

### 3 瑞龍山最勝寺宝篋印塔

- (1)調査の目的 石造宝篋印塔の記録調査  
(2)調査日 平成 26 年（2014）4 月～5 月  
(3)調査者 古川知明（埋蔵文化財センター所長）  
(4)所在地 富山市鰐川 瑞龍山最勝寺境内  
(5)種別 宝篋印塔  
(6)年代 不明（弘化 4 年頃か）  
(7)最勝寺の概要

当寺は、曹洞宗古刹である。山号は瑞龍山。開基は建久 9 年（1198）鰐川氏二世五郎親綱とされる。

明応年間（1492～1501）二世亀阜豊寿代に臨済宗から曹洞宗に改宗した。

元治元年（1864）焼失、明治 5 年（1872）再興。現在に至る。

『越中宝鑑』掲載最勝寺境内図には、宝篋印塔・法華塔が図示されている。

#### （8）最勝寺石造物研究史

高岡徹らは、境内墓地北側にある鰐川氏墓石の拓本、境内南側の住職墓地及び一般墓地の中世石造物の調査を行い、如来形石仏 6、宝篋印塔 2、板石塔婆 2、一石五輪塔 1、五輪塔片 12 を確認した。14 世紀から 16 世紀代に及び、15 世紀代が主体であることを明らかにした〔とやま歴史的環境づくり研究会編 1998〕。

平井一雄は、境内の石造物を調査し、石仏や石塔等の性格や年代を明らかにした〔平井 2003〕。その中の文久 3 年法華塔には、布尻石屋浅吉の石工銘があることを紹介した。

古川知明は、神通川石工石屋浅吉の動向を分析し、平井が紹介した石屋浅吉の石工銘は、唯一「石屋」姓のある石造物として評価できるとした〔古川 2014b〕。

#### （9）調査概要

①経緯 宝篋印塔は、山門に入った参道右手に所在する。この位置は、『越中宝鑑』境内図に描かれた位置と近似するが、山門との関係からみると山門とは現在の方が近い。山門の位置が変わっている可能性もある。

この宝篋印塔は、組合せ式の石造塔で、軸より上が欠失し、塔西側下に相輪下部部材が落下している。塔全体は火熱を受け破損が著しい。この火熱の原因は、元治元年の本堂全焼と推定される。

②全体構成 現存する本体高さは 56.25 寸（170.4cm）である。相輪・笠が欠失しており、相輪は西側に落下している。笠は失われている。石塔の構成は、上から塔身（5 段）、基礎（3 段）、基壇（2 段）の 10 段構成で、欠失した相輪・笠を加えると 12 段構成に復元できる（表 1）。

③相輪 崩落し、全体の下部 4 分の 3 が石塔西側に置かれている。上から宝珠・上部請花・九輪・下部請花の構成となり、一石造である。九輪のうち下 8 輪が残り、下部請花の文様部分は殆んど欠落している。九輪は下 3 輪がほぼ同じ太さで、4 輪目から上が次第



『越中宝鑑』挿図（宝篋印塔・法華塔部分）

表1 最勝寺宝篋印塔規格

区分	部位	高さ		幅		石材	備考
		寸	cm	寸	cm		
本体	相輪	(16.5)	(50)	8.8	26.7	安山岩	上部欠失。復元不能
	笠						欠失。復元高8.5寸、復元幅20寸
	塔身	軸1	8.6	26.1	8.1	24.5	安山岩 4面に陽刻月輪・蓮華座。北面のみ 円形陰刻あり
		反花	2.8	8.5	15	45.5	安山岩 般頭形1石
		般頭形	1	3.0	15	45.5	安山岩 反花1石
		軸2	9.3	28.2	13	39.4	安山岩 各面1文字:「宝」「篋」「印」「塔」
		請花	6.6	20.0	16.2	49.1	安山岩
	基礎	般頭形					欠失 または なし?
		反花	3.1	9.4	20	60.6	安山岩 基礎と1石
		基礎	4.1	12.4	20	60.6	安山岩 反花1石
	基壇	基礎2	4.5	13.6	25	75.8	安山岩 2面に刻銘
		基壇1	9.75	29.5	31.5	95.4	安山岩
		基壇2	6.5	19.7	31.5	95.4	安山岩
計		56.25	170.4				

( )内は現存寸法

に細くなる。九輪の断面は四角く、九輪と九輪の間は三角形に彫り込まれる。下部請花は、表面が剥落し復元不能である。下部請花の下面中央には円形のホゾを残し、下の笠上部のホゾ穴に差込む構造となっている。

宝珠・上部請花の存在は不明である。九輪上部が急激に小さくなることから、宝珠・上部請花が存在しないことも想定される。

④笠 欠失する。破片も見当たらない。

⑤塔身 4石5段で構成する。上から軸1、反花、般頭形、軸2、請花となる。

A 軸1 縦長の方形石である。大きく割れて破損しており、モルタルにより接着修理されている。

東面と北面をほぼ残し、西面表面は剥落して下に転落している。南面は欠損する。各面は月輪の下に蓮華座を彫る。北面のみ月輪内に「卍」形を陰刻する。東面の月輪は下部に三日月形を浮彫りする。

蓮華座の蓮花は、左右に計6葉と子葉2葉を配する。東面・北面は彫り下げて彫成、西面は浅く浮き彫りとする。前者と後者では蓮華細部の表現方法が異なっている。

B 反花 下の般頭形と1石で作る。主弁は8葉である。主弁はやや厚みがあり、中央が丸く盛り上がる。弁縁は帯状に丸く盛り上がる。先端は尖って反る。

C 般頭形(敷茄子) 上の反花と1石で作る。高さ1寸(3cm)で、側面断面が丸い。外表面は無文である。

D 軸2 方形石で、四面には額内を一段彫込み、各面に楷書の漢字1字を陰刻する。西面から右回りに「宝」「篋」「印」「塔」となる。表面は火熱で剥落している部分が多い。冒頭文字の「宝」が正面に配置されると仮定すると、西面が正面と理解できる。

E 請花 主弁は8葉の二重形式で、間に間弁を置き、計24弁となる。反花の構成と異なり一対とはならない。上面の主弁はやや厚みがあり、中央が先丸く盛り上がる。弁先端は尖っており、その上に平坦面を残す。下面の主弁も厚みがあり、先端には平坦面がみられる。間弁は先端が三角形に平坦面となる。稜はシャープである。

⑥基礎 3段である。上から反花、方形石1、方形石2となる。反花と方形石1を1石で作る。方形石2は2石を横置きする。

**A 反花** 下の方形石と 1 石で作る。主弁は 8 葉である。主弁はやや厚みがあり、中央が丸く盛り上がる。弁縁は帯状に丸く盛り上がる。先端は尖って反る。塔身 b 反花と同形式である。

**B 方形石 1** 側面は 4 面ともに無文である。上の反花と 1 石で造る。

**C 方形石 2** 2 石で構成する。東・西面が合端となり、南側

11 寸、北側 14 寸で、同寸ではない。表面は火熱で剥落している部分が多い。4 面とも側面は平滑で、東面と西面に楷書による刻銘の一部が残る。

東面は「四末五」とあり、年・干支・月と推定される。

西面は 2 文字目が「石」の可能性がある。その他は読めない。

文字の大きさ配列からみて、7 文字前後が刻まれていると考えられる。

**⑦基壇** 2 段の板石組基壇である。上下段とも同寸で、全体が方形壇となる。

1 段目は高さ 9.75 寸 (29.5cm) で、4 石からなる。

2 段目は高さ 6.5 寸 (19.7cm) 以上で、下部は土に埋まる。5 石からなる。

上下段で計 9 石の板石で構成される。

内部は中空と推定される。上段は  $12.4 \times 7 \times 9.75$  寸の空間、下段は  $14.8 \times (9.7) \times 6.5$  寸の空間となる。礎石経投入口はなく、

礎石経の存在は不明である。  
板石単体の長さは、最小 15.7 寸 (47.6cm) から最大 24.5 寸 (74.2cm) で、平均は 19.4 寸 (58.8cm) である。厚みは 6~13.2 寸で、平均は 9.7 寸である（表 2）。

#### (10) 考察

##### ①造立の背景について

本石塔は、先に示したとおり、劣化が著しい。本石塔は安山岩が石材であり、比較的自然風化に強いため、このような劣化状況は外的要因により発生したものである。劣化状況としては、剥落・ひび割れ・変色が生じていることから、転落や破壊等によるものではなく、高熱を受けたための劣化と考えられる。

この具体的な原因として、元治元（1864）年 2 月に発生した最勝寺諸堂全焼がある。境内に所在した本石塔は、諸堂焼失の火熱を受けることにより表面が劣化し、その後 150 年にわたる雨風雪の影響によりひび割れ・剥落が促進したと考えられる。

よって、本石塔は、元治元年以前に造立されていたと考えることができる。

次に、造立された年代・経緯については、基礎 2 面の銘文の情報等が手がかりとなる。

基礎銘文のうち東面の 3 文字は、年・干支・月と推定され、「4 未 5」と復元することができる。未年で元号が 4 年となる年で、元治元年以前は、以下がある。

□	□	五	未	四	□	□	東面
□	□	□	□	□	□	石	□

□	□	□	□	□	□	石	□	西面
?	?	?	?	?	?	?	?	?

基礎刻銘

表2 基壇板石規格

段	番号	位置	長		高		厚	
			寸	cm	寸	cm	寸	cm
1段目	1	西面	18.3	55.4	9.75	29.5	11.8	35.8
	2	南面	19.5	59.1	9.75	29.5	11	33.3
	3	東面	20	60.6	9.75	29.5	7	21.2
	4	北面	24.5	74.2	9.75	29.5	13.2	40.0
2段目	5	西面	23	69.7	6.5	19.7	11	33.3
	6	南面	20.3	61.5	6.5	19.7	8.2	24.8
	7	東面	17.3	52.4	6.5	19.7	計測不能	—
	8	北面	15.7	47.6	6.5	19.7	6	18.2
	9	北面	16	48.5	6.5	19.7	9.5	28.8
			平均	19.4	31.1		9.7	14.7

元禄 4 年 1691 年

元文 4 年 1739 年

安永 4 年 1775 年

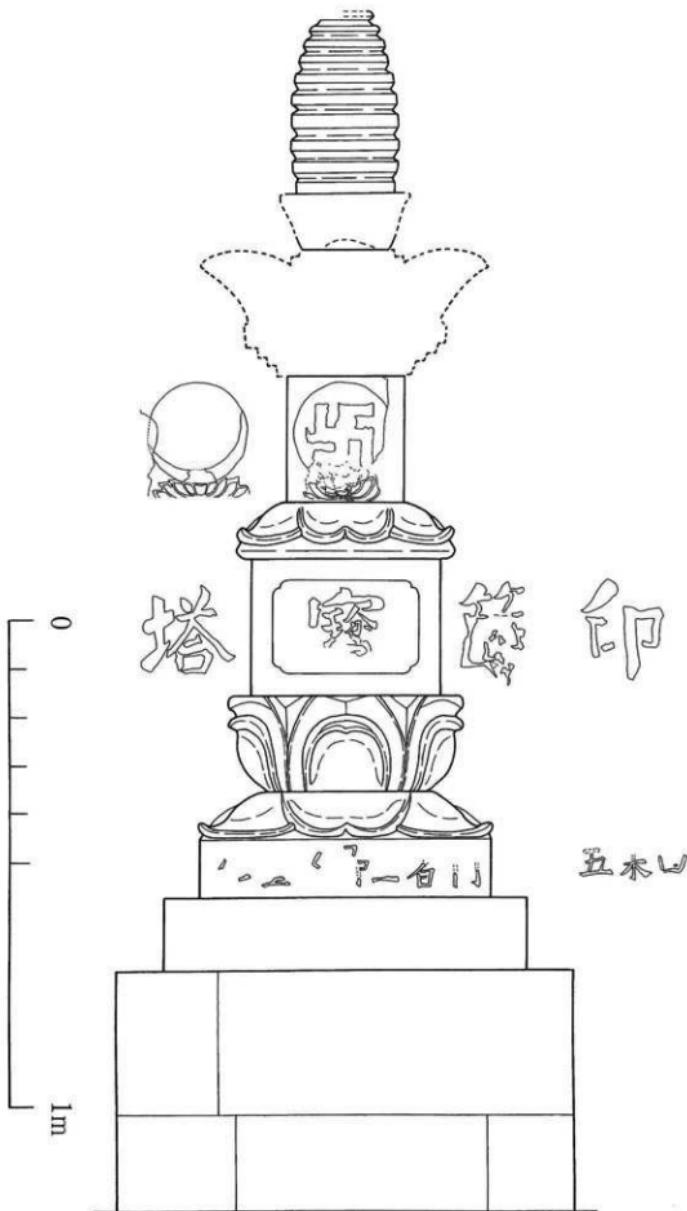
弘化 4 年 1847 年

次に、軸 1において、北面に「円」の刻銘がある。この円については、「仏」の文字の代用として用いられることが多い。『越中宝鑑』境内図解説の宝物の一に「円山和尚筆出山釈迦之像 一軸」「円山筆蟻川親照碑銘並序 一巻」と記載がある。この円山とは 29 世住職仏山智眼和尚のことである。仏山和尚は、慶応 3（1867）年 12 月 28 日寂である。また、位号に「仏」がある住職は、28 世仏閑慧秀和尚がいる。仏閑和尚は文政 6（1823）年住職となり、没年は不明である〔坂井ほか 1956〕。

軸 1に彫られた「円」は、一般的な「仏」を意味するのではなく、28 世仏閑和尚、あるいは 29 世仏山和尚を示すものと推定される。いずれかの断定は困難であるが、文政 6 年以降慶応 3 年までの間が想定可能である。

以上の諸点を踏まえた結果、本石塔の造立年代は、上記候補のうち弘化 4 年に比定しておくのが妥当であろう。この時に石塔造立にかかわったのは 29 世仏山智眼和尚住職と思われる。

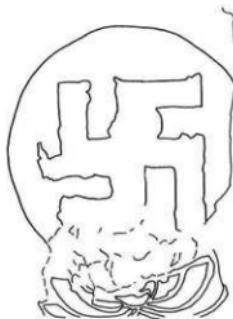
なお、石塔造立の経緯や具体的な理由については不明である。多くの場合、寺院における画期的行事（本堂再建等）や寺院関係者の年忌供養等が直接的動機となるが、本石塔が造立された弘化 4 年における寺の出来事は不明である。



最勝寺宝篋印塔実測図 (1/10)



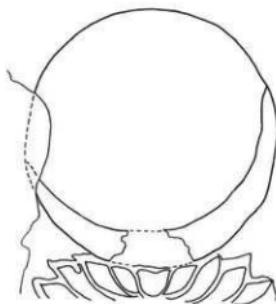
軸 1 北面 拓影 (1/4)



軸 1 北面 実測図 (1/4)



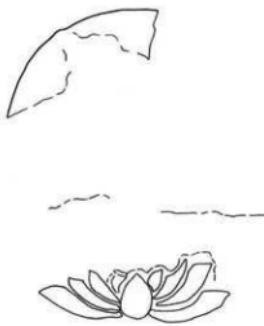
軸 1 東面 拓影



軸 1 東面 実測図



軸 1 (西) 面 拓影



軸 1 (西) 面 実測図



軸2 西面 拓影 (1/4)



軸2 西面 実測図 (1/4)



軸2 北面 拓影



同左 実測図



軸2 東面 拓影



同左 実測図



軸2 西面 拓影 (1/4)



同左 実測図 (1/4)



基礎 西面 拓影 (1/5)



同上 実測図



基礎 東面 拓影 (1/5)



同上 実測図



全景（北東から）



全景（北から）



相輪



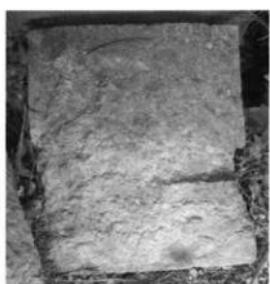
軸 1 東面



軸 1 北面



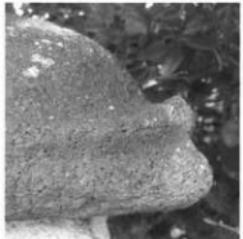
相輪底面（まぞ穴）



軸 1 西面（転落部分）



反花



反花端部



軸2 西面「宝」



軸2 北面「箇」



軸2 東面「印」



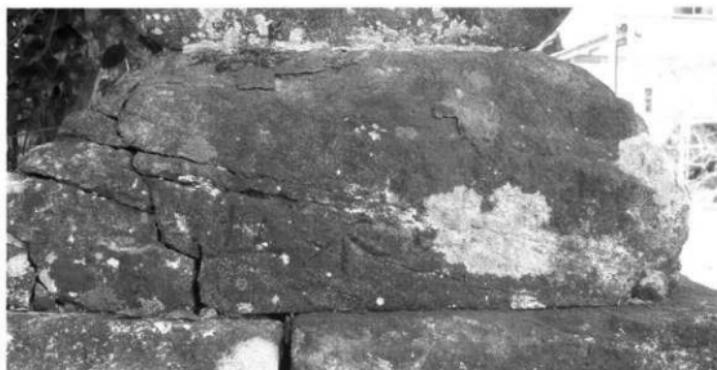
軸2 南面「塔」



請花・反花



基壇・転落した相輪（南西から）



基礎刻銘（東面）



基礎刻銘（西面）

## 4 天養山高徳寺宝篋印塔

- (1)調査の目的 富山市雄川最勝寺と共通した石造宝篋印塔や台座の年代・歴史的背景・製作石工等を解明するための調査
- (2)調査日 平成 26 年（2014）4 月～5 月
- (3)調査者 古川知明（埋蔵文化財センター所長）
- (4)所在地 射水市白石 天養山高徳寺境内
- (5)種別 宝篋印塔
- (6)年代 不明（弘化 4 年頃か）
- (7)高徳寺の概要

当寺は、曹洞宗古刹である。山号は天養山。現在開基は大永元年（1521）玉泉祖白大和尚としている〔下村史〕。3 回の再興をへて現住は 23 世である。

貞享 2 年（1685）加賀藩に提出した『寺社由緒書上』〔井上校訂 1974〕には「宝正元年富山海岸寺与申之三代玉泉和尚被致建立、至当歳式百式拾六年ニ罷成候」とあり、高徳寺住僧「古沢」が由緒を報告している。貞享 2 年から 226 年を遡った年は寛正元年（1640）であり、「宝正」の元号は「寛正」の誤りであると思われる。

享保年中（1716～1736）を余り下らない時期の成立とみられている『三州寺号帳』〔井上校訂 1974〕には、「瑞龍寺触下 九ヶ寺組」に「寛正元玉泉始祖也」とある。ここで前記の宝正元年を寛正元年に正式に訂正している。

### （8）調査概要

①経緯 宝篋印塔は、山門手前の参道南側に所在する。この石塔は、境内南東に鎮座する觀音菩薩像の付近に所在しており、戦後（昭和 30 年以前か）現在地に移動したものである。

この宝篋印塔は組合せ式の石造塔で、風化が著しいが、基礎が一部抜けていると推定されるほかは、ほぼ当初の姿を留めている。この石塔は、「般若塔」とも呼称されていたという。

②全体構成 現存する本体高さは 85.9 寸（260.3cm）である。相輪の上部が欠損しており、全体高は復元できない。

石塔の構成は、上から相輪・笠・塔身（5 段）、基礎（2 段）、基壇（2 段）の 11 段構成である。石材は、すべて花崗岩である。灰色を呈する細粒で、石材産地は不明である。

③相輪 一般には、上から宝珠・上部請花・九輪・下部請花・伏鉢の構成となり、一石造である。

本塔では宝珠・上部請花・九輪の 1 輪目が欠落している。九輪の下 8 輪・下部請花が残存しており、伏鉢は当初から存在しない作りである。

九輪は下 5 輪がほぼ同じ太さで、6 輪目から上が次第に細くなる。九輪の縦断面は台形で、九輪と九輪の間は三角形に彫り込まれる。9 輪目は厚みがある。下部請花は、縦長の主弁 8 葉と間弁 8 葉の計 16 葉からなる。主弁の先端は丸く、弁周囲は縁取りがある。間弁は三角形に尖る。下部請花の下面中央には先端がすぼまる円柱形のホゾがあり、笠上面のホゾ穴に差し込む構造となっている。ホゾの大きさは、根元径 8cm、長さ 8cm である。

④笠 軒上 5 段、軒下 3 段からなる。軒上 3 段は階段状となり上ほど小さい。下の 2 段は屈曲部が鈍角である。

四隅の隅飾突起は、稜部が内湾する。先端と基部を結んだラインは、40 度の外傾角である。突起の上面はほぼ平らであるが、先端から 5cm 程度が少し盛り上がっており、これは意匠である。側面 2 面

表1 高徳寺宝篋印塔規格

区分	部位	高さ		幅		石材	備考
		寸	cm	寸	cm		
本体	相輪	(16.1)	(48.8)	7	21.2	花崗岩	上部欠失。復元不能
	笠	7	21.2	18.8	57.0	花崗岩	
	軸1	6.6	20.0	7	21.2	花崗岩	4面に線刻月輪・蓮華座
	反花	3	9.1	14.5	43.9	花崗岩	饅頭形と1石
	饅頭形	1.8	5.5	14.5	43.9	花崗岩	反花と1石
	軸2	9.7	29.4	11	33.3	花崗岩	額内無文
	請花	6	18.2	15.5	47.0	花崗岩	
	反花	3	9.1	17.3	52.4	花崗岩	基礎と1石
	基礎	3.3	10.0	17.3	52.4	花崗岩	反花と1石
基壇	基壇1	9.4	28.5	20	60.6	花崗岩	
	基壇2	10	30.3	20	60.6	花崗岩	
計		75.9	230.0				

(寸) 内は現存寸法

は、上縁中央部から縁取りを行い、内側下端に円を巻く。これらは陽刻である。無文部は丁寧に平坦としている。

軒の幅は 12.2 寸 (36.9cm)、高さ 1.5 寸 (4.5cm) である。

天端中央に穿たれたホゾ穴の大きさは、上端径 11.5cm、深さ 9cm であり、ここに相輪下端のホゾを差し込み固定する構造となっている。

⑤塔身 4 石 5 段で構成する。上から軸 1、反花、饅頭形、軸 2、請花である。

現状では、軸 2 と請花の順が元来と入れ替わっている。

A 軸 1 やや横長の方形石である。4 面には、月輪とその下に蓮華座を浅く線刻で表現する。月輪内に金剛界四仏の梵字種子を篆研彫で陰刻する。本塔においては、東：タラーク（宝生如来）、南：キリーク（阿弥陀如来）、西：アク（不空成就如来）、北：バン（大日如来）となっており、本来の方位とは反時計回りに 90 度ずれて置かれている。この原因是、先述のように解体移転による。なお、東面においてはウーン（阿闍如来）であるべきところバンに入れ替わっている。それが示す意味は不明である。越中におけるこのような東面に梵字バンを表現した宝篋印塔は、これまで未見である。

蓮華座は、中央に中心軸、左右に 3 葉、その外側に子葉風の重ね 2 葉を配する。

B 反花 下の饅頭形と 1 石で作る。主弁は単弁 8 葉 + 間弁 8 葉の計 16 葉である。主弁はやや厚みがあり、中央が丸く盛り上がる。弁縁は帯状に隆起し丸く盛り上がる。先端は尖って反る。先端には浅い溝がある。間弁は小さく丸い。厚みは薄い。

C 饅頭形（敷茄子） 上の反花と 1 石で作る。高さ 1.6 寸 (4.8cm) で、側面断面が丸い。外面は無文である。

D 軸 2 方形石で、四面には額内を一段彫込み、各面は無文である。

E 請花 主弁は 8 葉の二重形式で、間に間弁を置き、計 24 弁である。反花の構成と異なる。上面の主弁はやや厚みがあり、中央が先丸く盛り上がる。弁先端は尖って反り、先端上面には浅い溝がある。この特徴は反花の主弁と一致する。下面の主弁は厚みが薄く、先端は尖らず三角形の平坦面とする。間弁は小さい。稜がシャープで、先端が三角形の平坦面となる。

⑥基礎 1 石 2 段である。上から反花、方形石となる。

A 反花 下の方形石と 1 石で作る。主弁は 8 葉で、間弁はない。主弁はやや厚みがあり、中央が

丸く盛り上がる。弁縁は帯状に丸く盛り上がる。先端は尖って反る。塔身反花・請花と同じ特徴である。高さがないため、主弁は横長である。

B 方形石 側面は4面ともに無文である。上の反花と1石で造る。

⑦基壇 2段の板石組基壇である。上下段ともおおむね同寸で、全体が方形壇となる。

1段目は高さ9.4寸(28.5cm)で、3石からなる。北側に長い1石を置き、南側は概ね同形の2石を置く。北側の石材と南側の石材の合端は、小口となる東面・西面とも、鉤曲のよう段状に加工している。西面の段はきれいな直角で、段差は1.5寸(4.5cm)である。東面の段は、鈍角で、段差は0.6寸(1.8cm)である。

また南面の2石の合端はやや斜めとなっている。角度は84度である。

2段目は高さ10寸(30.3cm)で、4石からなる。各辺7.4寸(22.4cm)～13寸(39.4cm)の方形石で、10寸前後が多い。南面の2石の合端も上段同様やや斜めとなっており、その角度は85度である。

内部が中空かどうかは不明である。石材内側を割り貫きしないと空間は生じないが、割り貫きの有無は不明である。礎石経投入口は認められない。

基壇の下はコンクリート土台となっており、近代に再建されたものであることを示す。

#### (9) 考察

##### ①類例について

本石塔と同型式の宝篋印塔は、富山市轟川に所在する曹洞宗瑞龍山最勝寺境内に1基所在しており、規模・様式がきわめて近似している。高徳寺塔の造立年代は、最勝寺塔と同じ型式といえることから、最勝寺塔の造立年代と同じ幕末・弘化4年頃と推定しておく。詳細な比較は考察において行う。

##### ②基壇石積に見られる技法について

基壇における石材の合端合わせに方法について考察する。

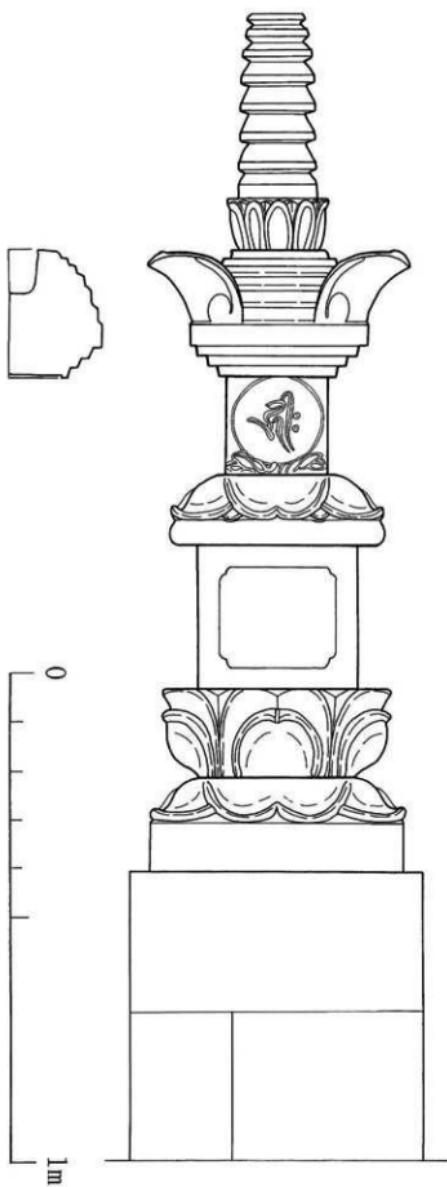
基壇には通常切石が用いられ、合端は直線である。本塔においては、先述のとおり鉤曲りのような段状の加工、及び直線ではあるが垂直ではなく、やや斜め(84～85度)となるという、他に例のない合端合わせ手法が見られる。このような手法は、一般に木材加工において継手仕口の種類に見られる手法である。鉤曲りとなるような仕口は「腰掛継ぎ」「段継ぎ」と呼ばれ、土台・基礎の材に用いる。斜めの仕口は「殺ぎ継ぎ」と呼ばれ、土台や垂木で用いられる。

このように、本塔では、石大工では通常見られない木大工の技術が採用されていると理解される。基壇が階段状でなく方柱状になる宝篋印塔は、砺波市千光寺(天明6年1768年)【富山市埋蔵文化財センター2014】、富山市円城院(寛延2年1749年)など18世紀中葉の真言宗寺院塔に少数見られるが、両塔とも本塔のような特殊な仕口は認められない。また年代も異なる。

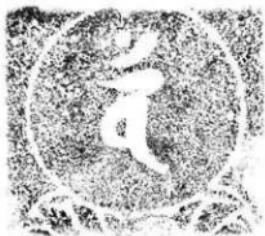
本塔は、同じ曹洞宗寺院最勝寺塔と同一型式であり、何らかの関係性において同じ石工により造立したものであるが、基壇部分については木大工の知識・技術が用いられた、特殊な塔であるといえる。その理由は、装飾性を意図したものか、後年における取り替えに由来するものか、不明である。

##### ③造立の背景について

本石塔は、刻名情報はないものの、類似塔の存在から、幕末の弘化4年頃と推定できる。その頃における本寺住職は、13世済焉昂道大和尚から16世大道祖門大和尚までの間と推定される。いずれも忌日が不明のため特定できない。また、造立に至った直接的な理由も不明である。



高德寺宝箧印塔実測図（1/10）



軸1 北面 梵字パン 拓影



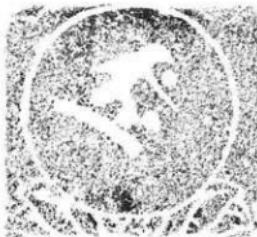
同左 実測図



軸1 南面 梵字キリ一ク 拓影



同左 実測図



軸1 東面 梵字タラーク 拓影



軸1 西面 梵字アク 拓影



宝篋印塔 位置（南から）

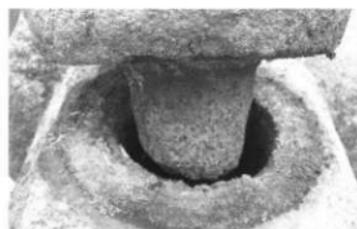
高徳寺 参道前全景（東から）



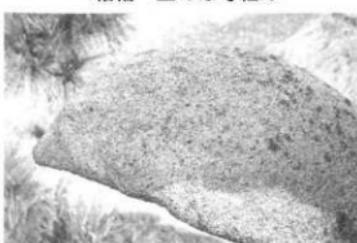
宝篋印塔全景（北西から）



相輪・請花



笠



笠・階段状軒

笠・隅飾突起 上面



笠・隅飾突起（下から）



笠・隅飾突起 外面下部文様



軸1 梵字パン（北面）



軸1 梵字アク（西面）



軸1 梵字キリーク（南面）



軸1 梵字タラーク（東面）



軸 1 (北西から)



饅頭形・請花



反花・饅頭形・請花



軸 2



基礎・基壇上部



基壇 (西面)

## 5 慈眼山正源寺宝篋印塔

- (1) 調査の目的 石造宝篋印塔の年代・製作石工・製作の歴史的背景を解明するための調査
- (2) 調査日 平成 25 年（2013）10 月～26 年 11 月
- (3) 調査者 古川知明（埋蔵文化財センター所長）
- (4) 所在地 富山市西番 慈眼山正源寺境内
- (5) 種別 宝篋印塔
- (6) 年代 天明 5 年（1785 年）
- (7) 正源寺の概要

正源寺は、曹洞宗寺院である。山号は慈眼山である。

貞享 2 年（1685）加賀藩に提出した『寺社由緒書上』〔井上校訂 1974〕には「天正式年則檀那上川郡馬瀬口村百姓五十嵐次郎右衛門ト申者致建立」とあり、天正 2 年（1574）年常願寺川右岸の馬瀬口村（現富山市馬瀬口）の百姓五十嵐次郎右衛門が発願して建立したことを、正源寺住職「雲積」が報告している。このときの寺院の所在地は「新川郡経塚村」とあるが、「経塚村」の名称は、正保郷帳（1646 年）・天保郷帳（1834 年）に見え、明治年間に「西番村」へ合併した〔高瀬監修 1994〕。

享保年中（1716～1736）を余り下らない時期の成立とみられている『三州寺号帳』〔井上校訂 1974〕には「瑞龍寺触下 弐ヶ寺組」に「天正二馬瀬口村百姓五十嵐次良右衛門建立」とあり、『寺社由緒書上』を踏襲している。

当寺は常願寺川中流左岸に所在し、常願寺川洪水で水害に苦しむ農民たちを守る洪水防止の祈禱となっている。本尊聖観世音菩薩（県重文）は、行基菩薩の作と伝え、「厄除觀音」として厚く信仰されている。また本堂天井に描かれている龍絵「招福鳴竜」は、藩主前田利保が藤原守胤に描かせたもので、富山藩における美術工芸の粹を今日に伝える。

### ⑧ 調査概要

① 経緯 宝篋印塔は、正源寺本堂参道の南側に所在する。参道に面する北面を正面とする。この宝篋印塔は、組合せ式の石造塔で、江戸後期における越中東部の宝篋印塔の模範様式を備えている。

② 全体構成 本体高さは 8 尺 3.35 寸（252.6cm）である。

石塔本体の構成は、上から相輪、笠、塔身（4 石 5 段）、基礎（2 段）、基壇（3 段）の 12 段構成である。その下に、2 段の割玉石基壇（高さ 28 寸）がある。この割玉石基壇は造立当初から存在したかどうか不明である。

塔前には長方体の花立が置かれる。本体は良好に遺存し、造立当初の姿をほぼ残す。

③ 相輪 上から宝珠・上部請花・九輪・下部請花・伏鉢となり、これらを 1 石で造る。

宝珠は、球形で、先端は短く突出するが、欠損している。

上部請花は、主弁が単弁 4 葉で、平滑で横長である。主弁間に稜を持つ三角形の間弁をもち、計葉である。

九輪は線刻により表現し、輪と輪の間隔は狭い。一輪目の径 4.3 寸（13.1cm）、九輪目の径 5 寸（15.2cm）で、下方が大きい。

下部請花は、上部請花と同型式である。主弁間がやや開く。

伏鉢は半球形である。

宝珠の先端を含めた復元高は 18.5 寸（56.1cm）である。

④ 笠 軒上 3 段、軒下 2 段である。軒上は三角形に突出する段が 1 段、その上に階段状の段が 2 段

表1 正源寺宝篋印塔規格

区分	部位	高さ		幅		石材	備考
		寸	cm	寸	cm		
本体	相輪	18.5	56.1	6.8	20.6	立山天狗山石	
	笠	8.45	25.6	18	54.5	安山岩	軒上段、軒下2段
	軸1	8	24.2	8	24.2	安山岩	1面並坐像陽刻、3面月輪内に梵字種子
		1.5	4.5	12.5	37.9		軸2と1石
	塔身	11.7	35.5	12.5	37.9	安山岩	正面願意、2面宝篋印陀羅尼梵字、裏面「宝篋印陀羅尼」・造立年
		4.5	13.6	15.2	46.1	安山岩	
	基礎	3.5	10.6	12.3	37.3	安山岩	
		2.5	7.6	16	48.5	安山岩	基礎と1石
	基礎	4	12.1	16	48.5		
基壇	基壇1	5.7	17.3	20.5	62.1	安山岩	礎石縫投入口1か所、2石
	基壇2	10	30.3	25	75.8	安山岩	4石
	基壇3	5	15.2	30.5	92.4	安山岩	5石or6石
	計	83.35	252.6				

ある。

隅飾突起は外側へ広がり、内側は弧状である。下端はややカーブし、下半は  $42^\circ$  、上半は  $32^\circ$  、平均  $40^\circ$  の外傾角である。突起外面は平滑で文様はない。突起下半は隣接する突起と連続する面をもつ。隅飾突起2つの先端の間隔は1尺8寸6分(56.4cm)である。

隅飾突起上端面は、笠上端よりも0.35寸程低い。

**⑤塔身** 4石5段で構成する。上から軸1、反花、軸2、請花、餞頭形となる。

**A 軸1** 方形石である。北側正面は、浮彫像2体と、その上中央に梵字「アク」の陰刻がある。アクは、密教でいう金剛界の不空成就如来である。

浮彫像は、左右ともほぼ同形で、頭部は螺髪、腹前で禪定印を結び、蓮華座に坐す。この2像は、釈迦如来と多宝如來の並坐像とみられ、この2仏を本尊とする「一塔兩尊」を示すものと考えられる。並坐像は法華経の見宝塔品第十一の説話に基づいており、日蓮宗・法華宗で造像に採用されるが、その他宗派でも採用される例がある(注1)。

蓮華座の蓮弁は、弁縁を丸く縁取る。

残る3面には、月輪と蓮華座を陽刻し、月輪の中央に梵字種子を葉研影で陰刻する。3つの梵字種子は、金剛界四仏のうち、不空成就如来(アク)を除いた3仏である。

宝篋印塔本体は主尊である大日如来を意味するとされている。四仏は通常定まった方位に配置される。東面は阿闍梨如来(梵字種子:ウーン)、南面は宝生如来(梵字種子:タラーク)、西面は阿弥陀如来(梵字種子:キリーク)、北面は不空成就如来(梵字種子:アク)となる。本塔では、北側が2尊+アクが示され、他は元来の位置を示している。

**B 反花** 軸2と1石で作る。主弁は8葉で、間に間弁を置き、計16弁である。主弁はやや薄く、先端は尖って反る。辺中央の弁先端に縦溝がある。間弁は先端が三角形となり、稜はシャープである。

**C 軸2** 方形石で、上の反花と1石で作る。

正面となる北面には、中央に「妙法蓮華経一部石書」とあり、その左右に経文の一部から引用した経文を刻む。

右の3行37字は、宝篋印陀羅尼経と通称する「一切如来心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼経」(大正T.1022B)から引用した経文である。19.0713b19~19.0713b21からの引用が主であるが、一部変更

している。

原文では「若有情能於此塔／一香一華礼拝供養／八十億劫生死重罪一時消滅／生免災殃死生仏家」であるが、刻銘では「若有情能於此塔／一香一華礼拝供養／八十億劫間贖重罪一／並各寂現生災殃死仏家生」（：原文から削除された文字、下線：原文になく挿入された文字）と異なる。（注 1）

左の 2 行は、「妙法蓮華經」（大正 T.0262）から引用した経文である。「願以此功德／普及於一切／我等與衆生／皆共成仏道」は 0024C21～0024C22 からの引用である。（注 1）

これらの刻銘は、この塔の意義と願意を示す。すなわち、法華經を記した礫石經を納めた一石一字塔としての性格を持つものである。

左面となる東面及び西面は連続した梵字文である。東面は 11 字×2 行 + 12 字×9 行 (130 文字) で、宝篋印陀羅尼經文である。西面は 15 字×11 行で、15 字×9 行 (135 文字) は東面から続く宝篋印陀羅尼經文となる。これに引き続き、光明真言梵字 23 文字、さらに不明梵字 5 文字が続く。

経文部分は、宝篋印陀羅尼經と通称する「一切如來心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼經」（大正 T.1022A）の 19.0712a18～19.0712b07（経文末尾の梵字部分）からの引用である。この部分は、原文では 14 字 × 18 行 + 10 字 の計 262 文字からなる。原文と比較すると、10 字欠落、誤字 4 字を認める。（注 1）

文末の不明 5 文字は、「ハッタソワカ 終止符」と読み、聖なる語・吉祥句の意味をもつ末尾聖語と理解される。

裏面となる南面は、右に「宝篋印陀羅尼」、その左側に「天明五巳年／六月二十五日」とある。「宝篋印陀羅尼」は、東西 2 面に刻銘された梵字の内容を指すものである。天明 5 年は西暦 1785 年で、本塔を造立した期日を示す。

D 謹花 主弁は、単弁 8 葉の二重形式で、主弁間に単弁 8 葉の間弁を置き計 24 葉である。主弁は横長で、角丸である。先端は厚く尖って反る。間弁は薄く中央に明瞭な稜がある。

E 館頭形（敷茄子） 平面四角形で、側面は半円形である。文様はない。

⑥基礎 1 石 2 段である。上から反花、方形石となる。反花と方形石を 1 石で作る。

A 反花 主弁は 8 葉単弁で、間に間弁を置き、計 16 葉である。請花と形態が類似するが、主弁先端に縦溝がない、間弁の稜が高いという違いがある。

B 方形石 側面は 4 面ともに無文である。上の反花と 1 石で造る。

⑦基壇 3 段の板石組基壇である。全体が階段状の方形壇となる。

1 段目は 2 石、2 段目は 4 石、3 段目は 5 石の計 11 石で構成する。

表2 基壇板石規格

段	番号	位置	長		高		厚		備考
			寸	cm	寸	cm	寸	cm	
1段目	1	北面	20.5	62.1	11.1	33.6	5.7	17.3	
	2	南面	20.5	62.1	9.3	28.2	5.7	17.3	東寄りに穴。蓋石
2段目	3	北面	17.3	52.4	10	30.3	8.9	27.0	
	4	東面	15.5	47.0	10	30.3	6.2	18.8	
	5	南面	18.5	56.1	10	30.3	4.8	14.5	
	6	西面	19	57.6	10	30.3	7.6	23.0	
	7	北面	22.1	67.0	5	15.2	7.1	21.5	
	8	東面	10.6	32.1	5	15.2	計測不能	-	
3段目	9	南面	16	48.5	5	15.2	12	36.4	
	10	南面	14	42.4	5	15.2	6.7	20.3	
	11	西面	23.2	70.3	5	15.2	8	24.2	青石
		平均	17.9	54.3			7.3	22.0	

方形蓋石（縦横 4 寸、厚さ 2 寸）を組み込む。この方形穴は礫石経投入口と考えられ、奥に縦 2 寸横 4 寸の穴が通る。

3 段目は正面に蠟燭立ての加工石（後補品）が置かれており、北側列について確認できない。

板石単体の長さは、最小 1 尺 6 分 (32.1cm) から最大 2 尺 3 寸 2 分 (70.3cm) で、平均は 1 尺 7 寸 9 分 54.3cm である。

小口面は幅 4.8~8.9 寸で、平均は 7.3 寸 (22.0cm) である。

なお、礫石経投入口から確認した内部には、数十センチ大の円礫（片麻岩・安山岩）が表面にあり、その下には土の堆積が見える。土の中屋表面には数センチの小石が複数見られ、その中には漢字墨書きしきものが見えるものがあり、礫石経と考えられる。

⑧石積基壇 本体下に、片麻岩・花崗岩・安山岩を主とした割玉石積基壇がある。2 段築造で、幅・奥行 3 尺 7 寸 (112.1cm) 高さ 2 尺 8 寸 (84.8cm) である。造立当初のものかどうかは不明であるが、明治以降築造されたものと推定される。

#### (9) 住職墓地の概要調査

本堂西側に 50m 離れて住職墓地が所在する。宝篋印塔の造立の背景を探るために、概要調査を行った。詳細については未調査である。

墓域は南北に長い長方形で、中央付近に中興～八代及びその他住職の墓石がある。

中興以後の住職墓石には位号等がなく、「中興塔」「○世塔」と忌日が記載されるのみである。

これらの周囲には、中世の板碑・五輪塔・宝篋印塔、江戸期の僧職者墓石型式である無縫塔（卵塔）が並べられ、墓域外とを画している。

墓石刻銘から作成した住職に関する情報をまとめると表 3 のようになる。

なお、同寺における過去帳等史料の確認調査は行っていないため、今後はこれらの史料を調査し、寺史を充実していくことが必要となろう。

表3 正源寺歴代住職

代数	名	位号	忌年		墓石	過去帳
			和暦	西暦		
開基						
2世						
3世						
4世						
5世						
6世						
7世						
8世	南嶺樵道	首座	寛延2	1749	●	
9世						
前任10世	勤■薰明		安永4	1775	●	
	宝篋印塔造立		天明5	1785		
中興			文化6	1809	●	
2世						
3世						
4世			嘉永6	1853	●	
5世			文久2	1862	●	
6世			明治28	1895	●	
7世						
8世						

## (10) 考察

### ①宝篋印塔造立の背景について

本宝篋印塔は、天明 5 年（1785 年）造立された。塔の刻銘からは、具体的な造立者・造立理由は読み取れない。それらの記載がないことからみて、本石塔は正源寺が造立者であることが推定される。

正源寺の歴代住職について墓石による情報を加味すると、宝篋印塔造立時における住職は、「中興」住職であり、造立後 24 年経過した文化 6 年に死去した人物である。

この住職は中興であることから、前任 10 世渡（安永 4 年）後、この寺は一度途切れ、再興されたことがわかる。宝篋印塔はその間に造立されたことから、本堂再興を記念して宝篋印塔が造立されたと推定しておきたい。

よって中興された年代は、宝篋印塔が造立された天明 5 年であることが推定される。

なお、欠落した情報は、今後過去帳の調査により明らかにできる可能性がある。

### ②宝篋印塔製作石工の推定

本宝篋印塔には石工名がない。

天明年間頃は、宝篋印塔造立が開始された後、富山町石工が石工名を刻銘しはじめる頃である。この時期、常願寺川石工はまだ石工名の刻銘は行っていない。

富山町石工銘のある最も古い宝篋印塔は、天明 6 年真言宗芹谷山千光寺宝篋印塔で、石工は佐伯伝右衛門勝行である。

佐伯伝右衛門は「勝行」と「吉忠」の 2 人がいる。伝右衛門の刻銘のある宝篋印塔は計 4 基があり、ほかに寛政 3 年（1791）真言宗法界山常楽寺、寛政 7 年真言宗立本山刀尾寺、文化 13 年（1816）真言宗稻荷山海禅寺宝篋印塔〔富山市教委編 2014〕がある。

本塔をこれらとを比較すると、

- A 筏の軒上の段数が少ない。
- B 筏の隅飾突起の下辺が湾曲する。（文化年間以後に伝右衛門例に見える）
- C 筏の隅飾突起に渦文の浮彫がない。（富山町・常願寺川とともに浮彫がある）
- D 軸 1 に並坐像の浮彫がある。（富山町石工には見えない。常願寺川石工では像形は額を彫り込んだ中に浮彫する）
- E 相輪の下部請花は単弁形である（富山町石工にはない型式、常願寺川石工にはある）

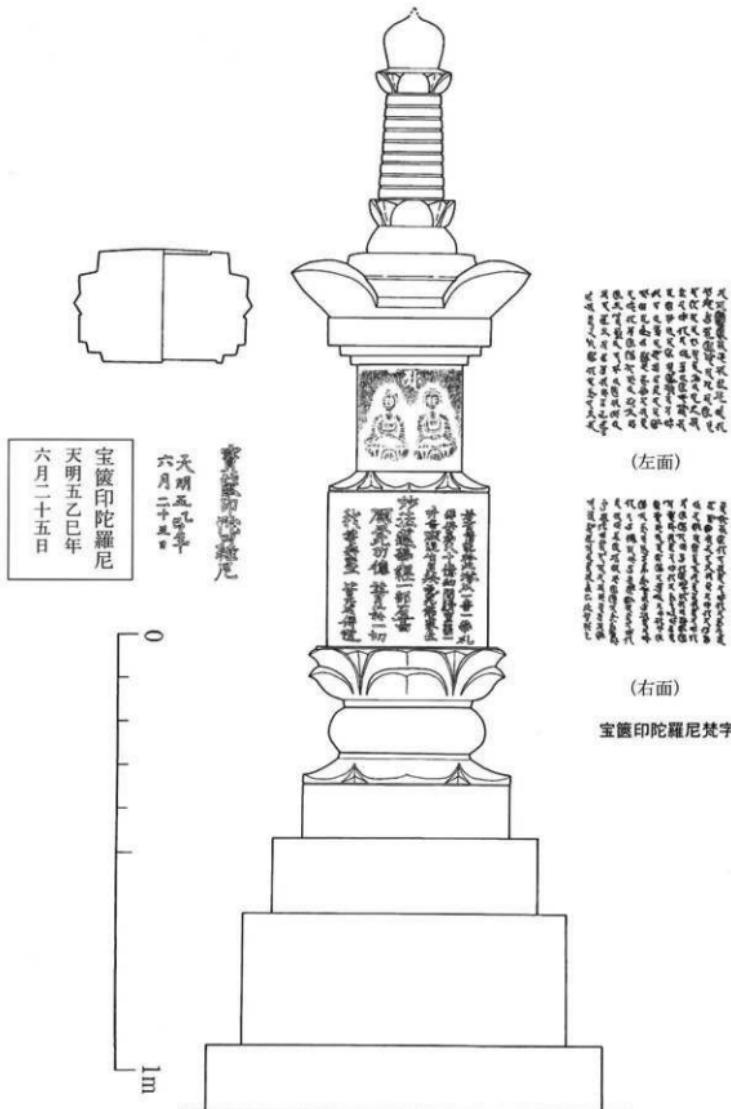
以上のような諸点において、これまで知られた富山町石工の製作様式と異なる。

ここでは、上記富山町石工のうちまだ名前が知られていない石工の作、あるいは常願寺川石工のうちまだ名前が知られていない初期の石工のいざれかと考えておく。

石工の解明は、類例の増加を待って検討することとし、今後の課題としておきたい。

## 注

1 SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース（大藏經テキストデータベース委員会）による



正源寺宝篋印塔実測図



軸 1 正面 並坐像浮彫 拓影(1/4)



軸 1 西面 梵字ウン 拓影(1/4)



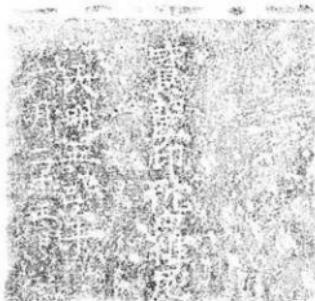
同左 実測図(1/4)



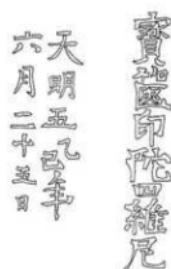
軸 2 正面刻銘 拓影(1/6)

普賢菩薩說法一卷一華九  
母子八十佛說法一  
妙法蓮華經一部五書  
而說功德普濟於一切  
我等願盡諸苦之報道

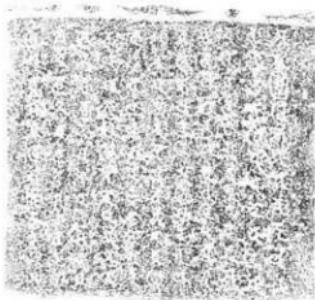
同左 実測図(1/6)



軸2 裏面刻銘 拓影(1/6)



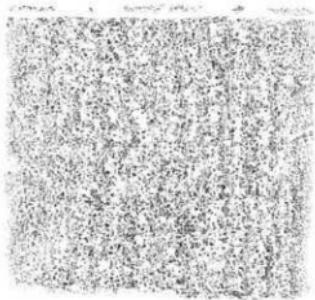
同左 寒測図(1/6)



軸2 左面刻銘 拓影(1/6)



同左 實測図(1/6)



軸2 右面刻銘 拓影(1/6)



同左 実測図(1/6)



正源寺山門（矢印下方に塔）



相輪・笠



宝篋印塔 全景（北東から）



笠 上部



笠 隅節突起



笠・軸 1



軸 1 正面 浮彫像



軸 1 左像 蓮台細部表現



軸 1 正面 浮彫像



軸1 上部 梵字ア 細部



軸1 西面 梵字キリーク



軸1 東面 (梵字ウン)



軸1 南面 梵字タラーク 細部



軸2 南面 「宝篋印塔」・年号



軸1 蓮台浮彫 細部表現



軸2 正面 経文



軸2 東面 宝篋印陀羅尼真言梵字



講花・鎧頭形・基礎



基壇 碟石経投入口（南面）



基礎・基壇（南西から）



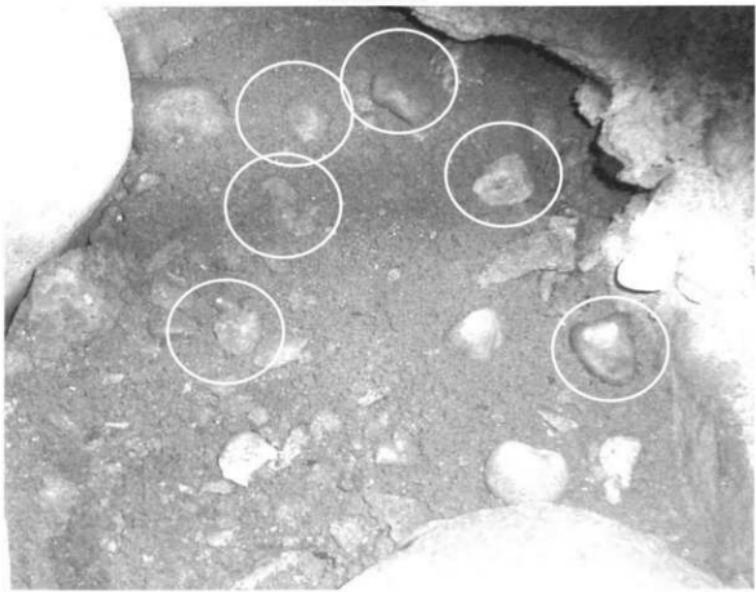
基壇 碟石経投入口 蓋石



基壇 碟石経投入口



基壇内部状況



基壇内部の状況 白丸は経文の墨書がある礎石経と予想される石

## II 燈籠

### 1 金城山宝寿院門前燈籠

- (1)調査の目的 石造燈籠の記録調査  
(2)調査日 平成 26 年 (2014) 6~7 月  
(3)調査者 古川知明 (埋蔵文化財センター所長)  
(4)所在地 富山市文珠寺 金城山宝寿院門前  
(5)種別 燈籠  
(6)年代 享保 17 年 (1732)  
(7)調査概要

①経緯 山門の外側左右に、四角型燈籠一対が置かれている。同形同大で、竿の刻銘も共通している。全体として遺存状況は良好である。

#### ②全体構成 (表 1)

竿が四角柱形となる、通称「お間形（おあいがた）」に分類される型式のものである〔京田 1970〕。

全体高さ 6 尺 8 寸 3 分 (206.9cm) である。

石塔の構成は、上から宝珠、笠、火袋、中台、竿、基礎の 6 石構成である。

現在基礎の下部はコンクリートに埋められている。基礎はもう少し高さがあり、また、基礎下に基壇石 1 石が存在した可能性があるが、現在それにあたる石材が確認できない。本堂前の踏み石が基壇石である可能性もある。

石材は安山岩である。

③宝珠 上から宝珠・請花・欠首の順となる。これらは 1 石で造る。

宝珠はややつぶれた球形で、上端は突出して尖る。

請花は無文で横断面は円形である。

欠首は長く、横断面は円形である。

④笠 平面四角形の向くり屋根形で、軒下は 2 段である。軒反りはない。軒端は直立する。

屋根高は高い。

⑤火袋 やや縦長の方形石である。

縦長方形の火口は対面する 2 面にある。2 段に彫る。現状では火口は正面側を向く。他の 2 面は、円窓・三日月窓である。いずれも 2 段に彫り込む。円窓の貫通穴之直径は 4.8 寸 (14.5cm) である。三日月窓の内辺は弧状である。火袋内部は筋ノミ跡が顕著である。

表1 宝寿院門前燈籠規格

部分	高さ		幅		備考
	寸	cm	寸	cm	
宝珠	12.8	38.8	7.4	22.4	
笠	8	24.2	19	57.6	
火袋	9.5	28.8	9	27.3	火口方形、円窓・三日月窓
中台	5.5	16.7	13.5	40.9	
竿	25.5	77.3	7	21.2	4面に刻銘
基礎	7	21.2	14.5	43.9	下部がコンクリートに埋まる
計	68.3	206.9			

⑥中台 無文方形部の下に、請花を浮彫する。主弁は4弁×2段で、隅角部に配する。主弁の間、各辺中央には大型の間弁があり計12葉である。主弁は先端が尖って小さく反る。弁厚は薄い。間弁は中央に緩やかな稜があり、先端は小さく尖る。

⑨竿 方柱形である。4面に楷書陰刻の刻銘がある。

正面は「(梵字) パーンク奉寄進石燈籠施主金山秀政」とある。

梵字パーンクは、金剛界大日如来の梵字種子である。

本燈籠の寄進者は金山秀政である。金山秀政は、天正寺村金山氏の5代十右衛門(重右衛門)秀政のことである。天正寺村金山家は代々加賀藩十村役を勤めた。本寺有力檀家であったとみられる。

右面「時享保十七壬子之天」、左面「十一月吉祥日」は、造立年である。享保17年は西暦1732年である。

裏面は「金城山文殊寺現住光遍代」とあり、この燈籠が本寺10世光遍住職の在任期間に造立され、光遍住職が引導して設置を終えたことがわかる。なお、光遍住職は享保6年から明和9年(1772)年没まで45年を在任した。

⑩基礎 上部反花、下部無文方形部となる。

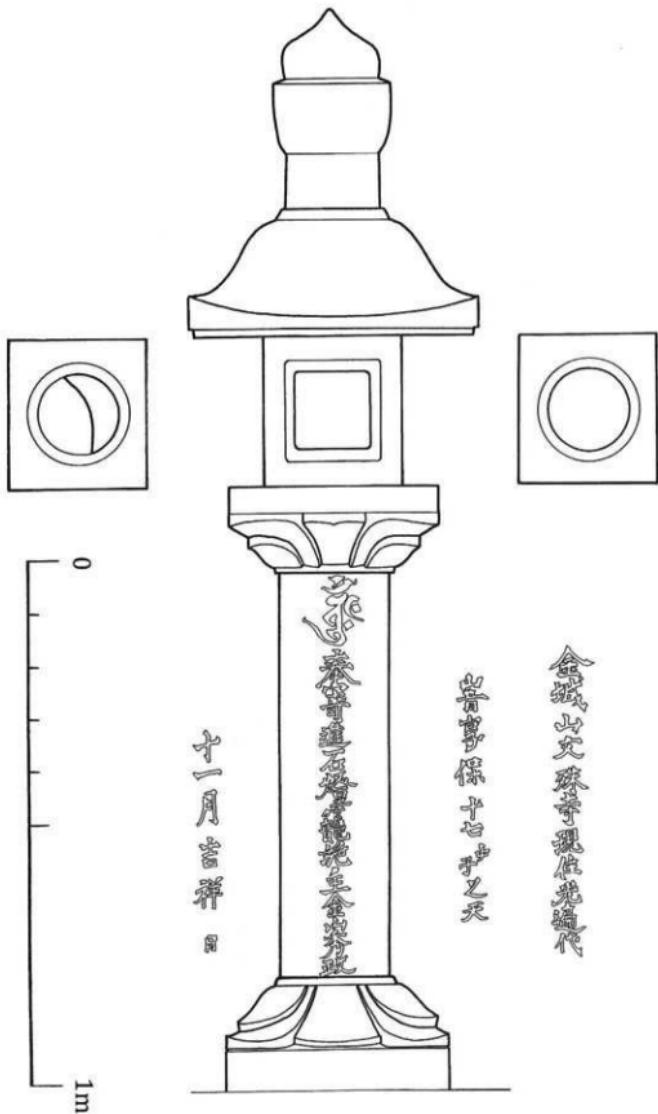
反花は、中台請花とほぼ同型式である。間弁が中台より横幅が広く、中央に稜をもたず扁平である。

#### (8)小結

この門前燈籠は、10世光遍住職の在任期間に、有力檀家とみられる金山秀政により寄進されたものである。金山秀政は、『大山町史』及び本寺作成の金岡家系図によれば、金岡家初代与兵衛一法の兄金山又兵衛吉秀の孫重右衛門秀政であり、天正寺村金山氏の5代当主である。

享保17年の燈籠寄進は、本寺における大きな行事に伴って行われたとみられる。

昭和10年「金城山宝寿院由緒」によれば、10世光遍住職代に「中坪」の地から現在地に移転したとされる。また、「東葉寺過去帳」では文殊寺を中興したとする。享保17年には、本堂再建または山門建築が行われ、それに伴い、最有力檀家である十村金山氏によって燈籠一対が寄進されたと推測できる。



門前燈籠実測図

金城山文殊寺現住光遍代



竿 正面刻銘拓影  
(1/6)

同 実測図

泰和通石燈籠施主金家政

同 実測図



竿 左面刻銘拓影  
(1/6)

嘗享保十七年之天



同 実測図

同 実測図

竿 右面刻銘 拓影(1/6)

竿 左面刻銘拓影(1/6)



門前燈籠 全景（右側燈籠）



宝珠



竿 正面刻銘（寄進者）



竿 右面刻銘（造立年）



竿 左面刻銘（住職名）



火袋（三日月窓）



基礎

## 2 親鸞聖人分骨堂燈籠

- (1)調査の目的 常願寺川石工石造燈籠及び関連石造物の記録調査  
(2)調査日 平成 25 年（2013）8 月～平成 26 年 10 月  
(3)調査者 古川知明（埋蔵文化財センター所長）  
(4)所在地 立山町柄津 親鸞聖人分骨堂  
(5)種別 燈籠・花立  
(6)年代 文化 2 年（1805）  
(7)親鸞聖人分骨堂の概要

親鸞聖人分骨堂は、立山町柄津に所在する。富山市清水町に所在する新井山願海寺の草創の地であり、願海坊信性の開基による。親鸞聖人の孫にあたる二代清寿が、聖人の死後分骨を受け、六角廟所を築造した〔『五百石地方郷土史要』〕。

現在の六角廟所の堂舎の建築年代は不明であるが、基壇の亀甲積石垣には、「天保三辰年」「上白岩村／石工 源治良」とあり、天保 3 年（1832）上白岩村の石工石破源治郎が亀甲積石垣基壇を築造したことがわかる。

### （8）調査概要

#### I 燈籠

①経緯 六角廟所前に置かれた 2 基一対の燈籠は雪等で部材が落下したままであった。この燈籠は、親鸞聖人分骨所と呼ばれる靈廟に所在する。靈廟は、御堂と呼ばれる拝殿と、その奥の六角廟所と通称される御分骨靈廟からなり、かつては御堂の手前左側（南東側）に庫裡が存在した。

燈籠は六角廟所正面の左右に置かれ、同形のもの 2 基一対である。主な部材が平面六角形となる六角型燈籠に分類される〔京田 1970〕。

概ね完全な形で遺存するが、積雪期に落下等が生じるため、一部はモルタルにより固定等がなされている。このため、各部材の天地・方位等は造立当初と異なるものがある。

なお、この燈籠は、造立当初から六角廟所前の現在地に置かれていたものかどうかは不明である。

#### ②全体構成（表 1）

本燈籠は、宝珠・笠・火袋・中台・竿・基礎 2 段・基壇で構成される。

本体高さは 5 尺 5 寸 5 分（168cm）、各部材の規格寸法は、表 1 に示した。2 基ともに同寸同型式である。石材は、すべて常願寺川産立山天狗山石（各閃石安山岩）である。

③宝珠 宝珠は半球形で丸みをもち、先端は突出して尖る。請花は主弁 6 弁、間弁 6 弁の 12 弁構成である。各弁は弁脈を表現する。主弁には 8 本の弁脈を刻み、やや立体的である。先端は尖る。

下面中央には

表1 燈籠本体の規格

部位	高さ		一辺・径		備考
	寸	cm	寸	cm	
宝珠	9.7	29.4	7.6	23.0	下面にホゾ 0.3 寸
笠	7.2	21.8	9.6	29.1	
火袋	7.2	21.8	5.2	15.8	
中台	4	12.1	7	21.2	天地逆に置かれる
竿	17.9	54.2	8.8	26.7	左燈籠に造立年・石工名刻銘
基礎1段目	5	15.2	7.5	22.7	
基礎2段目	4.5	13.6	9.5	28.8	
計	55.5	168.2			

かな丸みを帯びた向くり屋根である。頂上は六角台形に彫り出し、中央に宝珠下面のホゾを受ける径2.7寸(8.2cm)深さ0.8寸(2.4cm)の穴がある。

軒口は0.8寸(2.4cm)と薄く、軒下端は内側に向かい斜めに切る。軒反りではなく笠底面全体が平らである。角部は、頂部からの下り棟が帶状に隆起して表現され、上面には2条の沈線が下垂する。下り棟先は丸く巻き込み、蕨手となる。この蕨手両側面には、沈線で満巻を描く。蕨手は、左燈籠では1個、右燈籠では4個が現存する。

#### ⑤火袋

配列・文様は、左右燈とともに同構成である(表2)。

横断面六角形で、上下が細くなり棗形(なつめがた)である。上

端一辺3.5寸(10.6cm)、下端同寸、中央幅5.2寸(15.8cm)である。側面各面の角は丸い。

6面の構成は、火口2面、円窓2面、貫通しない面2面で、各面は中心に対し相対している。

火口は2段に彫った縦長方形で、内側が貫通する。内寸は長辺3.7寸(11.2cm)短辺2.7寸(8.2cm)である。

円窓面は、火口右側に位置し、2段に彫った円形で、外寸径3.6寸(10.9cm)、内寸径2.8寸(8.5cm)で貫通窓である。円窓の下には、祥雲文が4個まとまって上に尾を出す。

円窓に相対する三日月窓は、1.2寸幅の三日月形の貫通窓である。三日月窓の下にも祥雲文が4個まとまって上に尾を出す。

窓がない2面には、額を彫り込み、中央に5弁の花文を浮彫りする。花弁は、中央に小さい丸い花芯があり、花弁は丸くふくらみ先端が尖る。一面の花弁は縁取りして内側を一段彫り下げ、もう一面は写実的に彫成する。この花文様は桔梗あるいは竜胆(リンドウ)を表したものか。花の上下には4個ずつの満巻が一列に配置されており、唐草を表したものか。

火袋内面は粗い整形である。

#### ⑥中台

左右の燈籠とともに、天地を逆にして置かれている。

上段の火袋受座は、6面ともに額内に祥雲文浮彫文様を施す。各面の祥雲文の文様構成は、左右の

表3 右燈籠中台における祥雲文の構成

面(東面を基準とする)	ブロック数	ブロックごとの祥雲数			ブロックごとの祥雲の尾の方向		
		左	中	右	左	中	右
東面(基準)	3	1	1	1	右	なし	なし
左1	2	1	なし	1	左右	なし	左
左2	3	3		2	右		右
裏面	3	1	1	1	右	左	右
右2	4		4			なし	
右1	2	3	:	2	右	:	右

表4 左燈籠中台における祥雲文の構成

面(東面を基準)	ブロック数	ブロックごとの祥雲数			ブロックごとの祥雲の尾の方向		
		左	右	左	右		
東面(基準)	2	2	2	右	右		
左1	2	1	2		連続		
左2	2	2	3	なし	右		
裏面	2	2	2		連続		
右2	2	3	3	右	右		
右1	2	2	2		連続		

燈籠においても 6 面全て異なっており、祥雲のまとまり数・まとまり毎の個数・尾の方向によって区分してみると、表 3・4 のようになる。

下段は請花で、主弁 6 弁・間弁 6 弁の 12 弁構成である。弁先端は尖って反り、弁端部には浅い縦溝をもつ。弁脈は 10 本で、やや立体的である。間弁は大形で、主弁と同じ造形である。

⑦竿 断面円形で、中央に断面が丸い節を廻し、上下端にも節がある。中央から上下端に向かって径が太くなり、上端径 8.8 寸 (26.7cm)、最小径 7 寸 (21.2cm)、中節径 7.6 寸 (23cm) である。

左右両燈に刻銘がある。

左燈籠の刻銘は、上段に「文化二丑九月立」と造立年を記し、下段に「願主／当村／文三郎／彦五良」と願主 2 人の名前を示す。文化 2 年は西暦 1805 年である。当村は柄津村をさすとみられる。この刻銘は、正面(東)を向いて刻まれていたと考えられる。

下段裏面(西面)には「石工／馬瀬口村／甚右衛門」とあり、製作者は常願寺川左岸中流の馬瀬口村石工中川甚右衛門である。

右燈籠の刻銘は、上段に「富山／町同行中／寄進」とあり、富山城下町に在住する願海寺信徒あるいは親鸞聖人信奉者としての浄土真宗信徒らが、淨財を寄進して発注したことがわかる。

⑧基礎 六角柱形で、2 段構成である。一石で作る。

上段は反花である。蓮弁の特徴は、中台下段の請花の様式・特徴と同じである。

下段は側面に波濤文を浮彫りする。波・波頭・飛沫で構成され、各面の文様構成や表現方法は、左右の燈籠においても 6 面全て異なる(表 5・6)。

波は、波数は凸形の部分を数えている。2~4 重に表現され、左燈では 2~3 重、右燈火では 3~4 重である。左燈では波が細く波長が長いのに対し、右燈では波が太く、波長が短いという違いがある。

波頭は、左燈では 1~3 つに分かれ、先端を丸く巻き込む。右燈は、波先が分かれずにそのまま巻き込むものと、波間から短く左

右に分かれる 2 種類の表現が認められる。

飛沫は、中央に小穴があるものとないものがある。

右燈裏面には弧形の表現が見られ、波間の月の表現と思われる。

⑨墓壇 六角柱形である。周囲を縁取り平滑加工し、内側はハツリ痕を残して意匠とする。

下端面の状況は、土に埋まり不明である。

表5 右燈籠基礎における波濤文の構成

面(東面を正面)	波	波頭	飛沫(円文)	備考
正面	5	なし	3	
左1	4	2	3	
左2	4	1	3	
裏面	6	1	6	波2段、月?
右2	9	1	なし	波2段
右1	10	2	3	波2段

表6 左燈籠基礎における波濤文の構成

面(東面を正面)	波	波頭	飛沫(円文)	備考
正面	4	1	7	
左1	(2)	1	(3)	左2面と左右対称
左2	2	1	3	左1面と左右対称
裏面	6	4	6	波2段
右2	1	2	6	
右1	2	2	7	

( )内は推定数

## II 花立

### ①経緯

平成 26 年 6 月 4 日の立山町文化財保護審議委員会視察時に、六角廟所南側に花立 1 基が破損して廃棄されているのが上野幸夫委員により発見された。

六角廟所の左手の山際において、土中に埋もれた状態で一部が露出していたため、掘り起したと

ころ、3破片が出土した。

後日、再度清掃・復元し、記録作業を行った。

## ②概要

この花立は、本体と台座の2つで構成される。

本体は、中央下部に球形の水溜部を持ち、口縁・底部ともにラッパ状に広がる形態である。供養具としての金属製花瓶のうち「亜字形花瓶」に分類される花瓶〔岡崎監修 1982〕を模倣したものとみられる。

本体高さ18寸(54.5cm)、口径8.3寸(25.1cm)、水溜径6.6寸(20cm)、底径7.5寸(22.7cm)。口縁内側は、真ん中に向かって緩やかに深くなり、深さ1.5寸(4.5cm)で中央がさらに深くなる。上面からの最深部は6寸(18.2cm)である。

台座は円盤状で、高さ4.5寸(13.6cm)、上端径7.5寸(22.7cm)、底径10.8寸(32.7cm)。

全体高は22.5寸(68.2cm)である。

石材は、すべて立山天狗山石(角閃石安山岩)である。

燈籠と同様、2基一対であったと推定される。

## ③小結

この花立の形態は、燈籠の竿部分と極めて似ている。花立に刻銘はないが、燈籠を製作した馬瀬口村石工中川甚右衛門がこの花立も製作したものとみられる。

のことから、花立は前記燈籠と一式で製作・奉納されたものと考えられる。

本型式の石造花立の類例は、ほとんど見られない。

## (9) 考察

### ①類例について

本燈籠の型式である六角型燈籠は、平安時代以来最も多く作られた一般的な形態とされているが、常願寺川・神通川流域においては、自然石を使った山燈籠や、神前型に分類される四角型燈籠が主流であり、六角型燈籠は極めて少ない。この意味で、装飾性の高い本燈籠は特異な存在といえる。

このような六角型燈籠の類似品は、富山市中布目曹洞宗西光寺境内に所在するもの2基一対がある〔富山市教委編 2012〕。西光寺は、文明18年(1468)開基の曹洞宗大安寺の後進である。大安寺は、越後最勝寺4世貫翁龍珠の弟子雪天存康が開山し、明治3年(1870)合寺令により曹洞宗春日山光嚴寺と合併した。明治6年大安寺信徒の要望により、有峰西光寺を招致し、現在地に再興した〔高瀬編 1994〕。

西光寺の燈籠は、大安寺時代のものである。高さ6尺3寸(190.9cm)で、本燈籠より7寸5分(22.7cm)大きい。比率にすると1.14倍である。各部材の大きさについては、一様に大きいわけではなく、部材により増減が生じている(表7)。

表7 栄津と西光寺の寸法比較

部位	栄津	西光寺	比較増減	率分
宝珠	9.7	10	0.3	1.03
笠	7.2	7	▲0.2	0.97
火袋	7.2	10	2.8	1.39
中台	4	5.3	1.3	1.33
竿	17.9	17.7	▲0.2	0.99
基礎1段目	5	7.1	2.1	1.42
基礎2段目	4.5	5.9	1.4	1.31
計	55.5	63	7.5	1.14

### ②製作石工について

竿の刻銘から、本燈籠は、常願寺川石工の人、馬瀬口村石工中川甚右衛門が製作した〔古川 2011b〕。

甚右衛門は、文化6年(1809)舟形石仏の光背に初めて祥雲文浮彫文様を用い、木造・金銅仏への写実性を強めた。また文政5年(1822)初めて笠付円盤形石仏を作製した。

以後これらの型式の石仏が常願寺川石工内で多く作られるようになり、一つの伝統を築いた。祥雲文

舟形石仏は、多くの石工が初期に模倣した痕跡から、石工修業の完成に際し習作されたものとみられ、甚右衛門工房の伝統継承者であることを示したものか。これらの様式を備える石仏を甚右衛門様式と定義する。甚右衛門は多くの種類の石造物を製作し、宝篋印塔・狛犬・燈籠に独自性を發揮した。特に宝篋印塔を多く製作し、大型寺院塔で力量を示した。

甚右衛門の用いた浮彫文様は、富山町石工佐伯伝右衛門の宝篋印塔浮彫文様のうち祥雲文・波涛文がルーツとみられ、それを昇華させた。また、色彩的な工夫も取り入れた。

甚右衛門は常願寺川石工の伝統基盤を築いたバイオニアであったといえる。

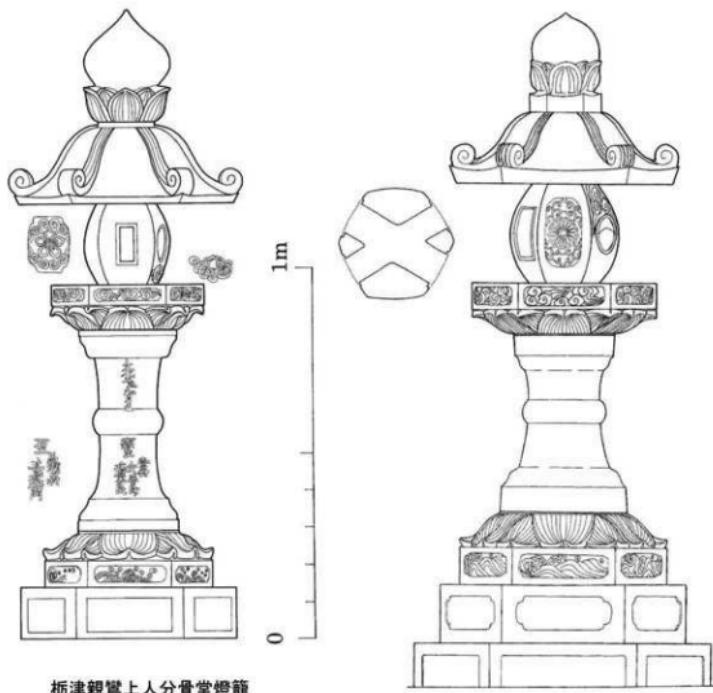
甚右衛門は4代以上にわたると推測でき、各代の石仏像容は異なる。

本燈籠中台に見られる祥雲文浮彫は、甚右衛門が石仏に祥雲文を採用した最初期と同時期であるといえる。

### ③造立の経緯

燈籠の造立は、年代からみて、願海寺23代量得院巧誓代（文化11年（1814）4月朔日寂）に行われたとみられる（『新井山願海寺史稿』）。

竿の刻銘から、文化2年、柄津村の信徒である「文三郎・彦五郎」が発願し、富山城下町に在住す



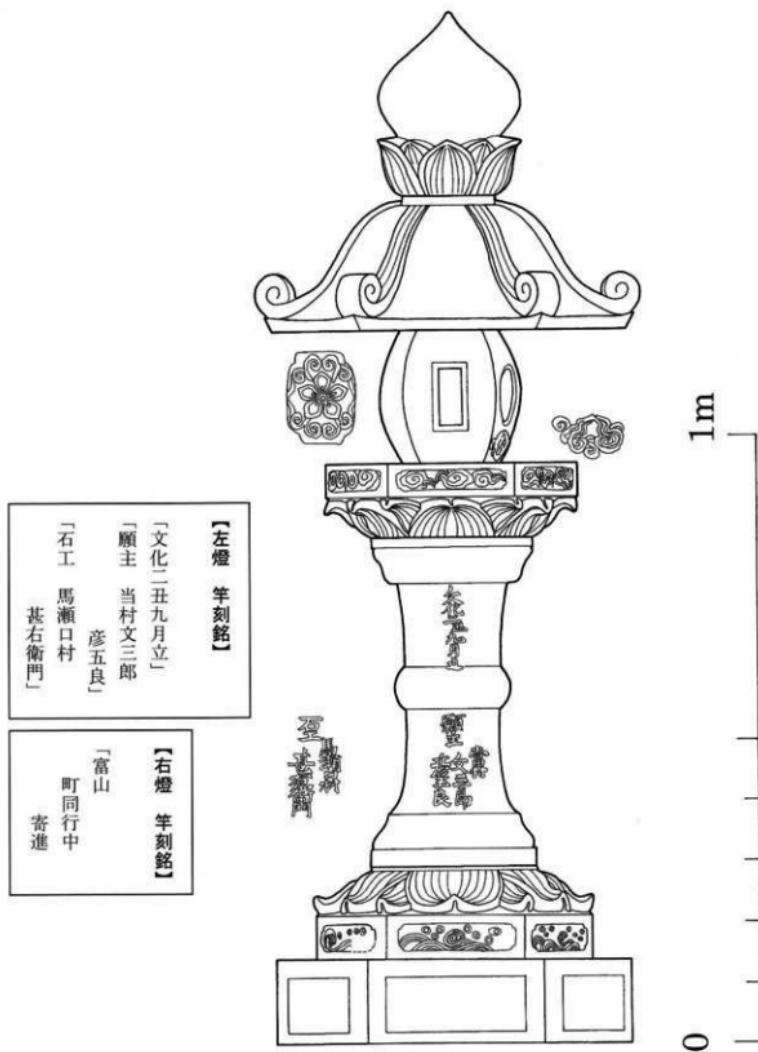
2 燈籠の比較

(基礎1段目下端までの長さを同じにして比較)

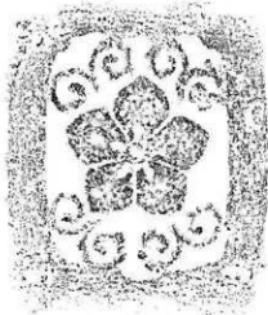
る願海寺信徒あるいは親鸞聖人信奉者としての浄土真宗信徒らに寄進を募って造立したことがわかる。文三郎・彦五郎の詳細は不明である。

#### ④評価

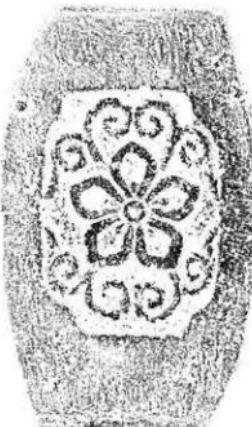
本燈籠は、社寺に奉納された江戸後期の六角型燈籠としては、装飾性が高い優品である。石塔・石仏など、常願寺川石工の伝統文化の基礎を築いたと高く評価されている常願寺川石工中川甚右衛門が製作したもので、同型式の燈籠はほかに富山市西光寺燈籠が存在するだけであり、貴重であるといえる。



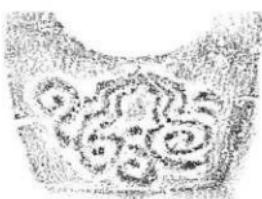
栃津親鸞上人分骨堂前燈籠（左燈）実測図（1/8）



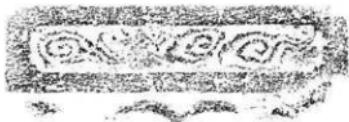
左燈 火袋側面浮彫



右燈 火袋内窓面下側面浮彫



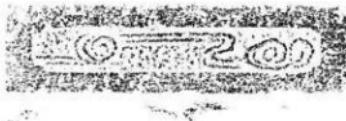
右燈 三日月窓面下側面浮彫



左燈 中台祥雲文浮彫（正面）



右燈 中台祥雲文浮彫（正面）



左燈 中台祥雲文浮彫（左1面）



右燈 中台祥雲文浮彫（左1面）



左燈 中台祥雲文浮彫（左 2面）



右燈 中台祥雲文浮彫（左 2面）



左燈 中台祥雲文浮彫（裏面）



右燈 中台祥雲文浮彫（裏面）



左燈 中台祥雲文浮彫（右 2面）



右燈 中台祥雲文浮彫（右 2面）



左燈 中台祥雲文浮彫（右 1面）



右燈 中台祥雲文浮彫（右 1面）

頤  
主  
嘗  
鑿  
文  
宣  
良  
即

左燈 竿下段 刻銘  
(願主名)



拓影・実測図（1/3）

九  
月  
廿  
五

左燈 竿上段  
刻銘(造立年)

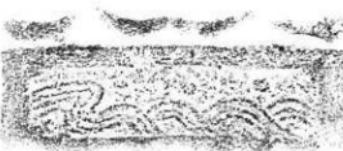




右燈 竿上段 刻銘  
(寄進者名)

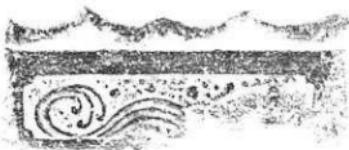


左燈 竿下段 裏面刻銘  
(石工名)



左燈 基礎波濤文浮影 (正面)

右燈 基礎波濤文浮影 (正面)



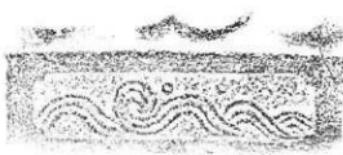
左燈 基礎波濤文浮彫（左1面）



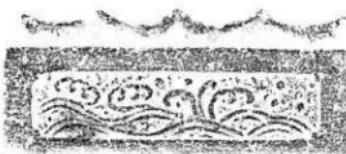
右燈 基礎波濤文浮彫（左1面）



左燈 基礎波濤文浮彫（左2面）



右燈 基礎波濤文浮彫（左2面）



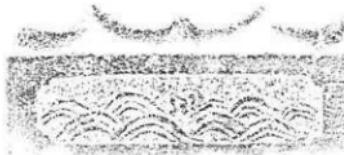
左燈 基礎波濤文浮彫（裏面）



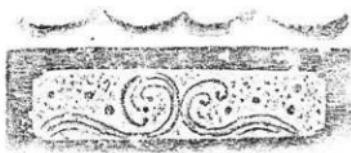
右燈 基礎波濤文浮彫（裏面）



左燈 基礎波濤文浮彫（右2面）



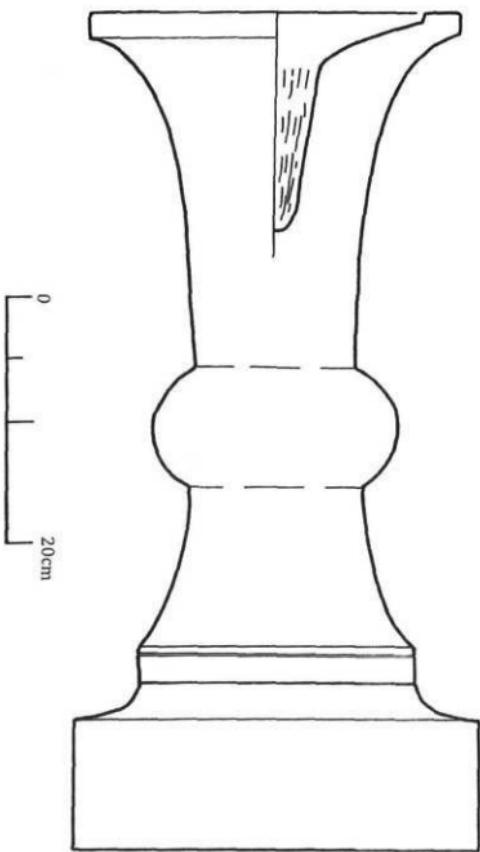
右燈 基礎波濤文浮彫（右2面）



左燈 基礎波濤文浮彫（右1面）



右燈 基礎波濤文浮彫（右1面）



花立 実測図 (1/4)



栃津親鸞上人分骨堂前六角型燈籠



宝珠底面ホゾ



笠 頂部のホゾ穴



笠 棟先の蕨手



火袋浮彫文様



火袋 三日月窓



火袋 底面の整形



火袋内部の整形



中台侧面浮彫文様（祥雲文）

本来は天地逆



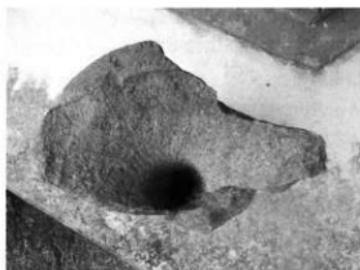
基礎格狭間浮彫文様（波涛文）



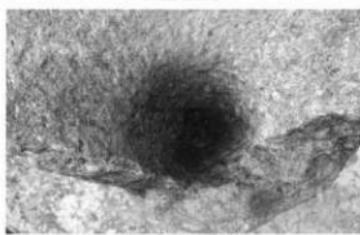
竿



竿 石工名刻銘



上面から



花入れ部 拡大



花立 全体



西光寺境内六角型燈籠



基礎 上面

### III 考察

#### 1 最勝寺宝篋印塔の類型について

はじめに

曹洞宗瑞龍山最勝寺宝篋印塔（p42）と天養山高徳寺宝篋印塔（p53）とは、形態がきわめて類似しており、同一石工による製作と考えられる。

また、これらは、過去の調査において確認した宝篋印塔を製作した富山町石工のどの石工の形態とも異なる。

ここでは、この2塔の共通性・異質性について比較検討し、石工の特徴を明らかにする。

#### 1 2塔の比較

最勝寺塔と高徳寺塔は、上から相輪・笠・塔身（5段）・基礎・基壇（2段）の構成で、最勝寺塔は基礎3段、高徳寺塔は基礎2段となり、最勝寺塔の基礎が1段多い。

最勝寺塔と高徳寺塔の比較は、各部材の高さの比較増減を行い、また、各部材の様相について特徴を抽出した。

最勝寺塔との共通した様相については、表1の「様相」項に示したとおり、多くの諸点において一致する。また、規格においては、基壇の高さの違いが大きく、これを除いた規格については多少の増減があるがほぼ一致している。

一方、異なる点としては、まず石材の違いがある。最勝寺塔は安山岩、高徳寺塔は細粒の花崗岩である。ただし、最勝寺塔は焼損が激しく石材判定も難しい。これには褐色粒・角閃石・石英を含み、高徳寺塔の石質とよく似ている。最勝寺塔は焼損したため変質したもので、高徳寺塔と同じ花崗岩の可能性もある。

細部における違いは、まず軸1における月輪の彫出方法と、月輪内梵字種子の有無である。高徳寺塔では月輪・蓮台を陰刻（線刻）で彫出するのに対し、最勝寺塔ではそれを陽刻で表現している。また月輪内には、高徳寺塔では金剛界五仏のうち4仏の梵字種子を彫込むが、最勝寺塔では無文または円の彫込みがある、といった相違が認められる。

表1 高徳寺塔と最勝寺塔の比較

区分	最勝寺塔	高徳寺塔	比較増減	率分	様相	
相輪					九輪が上がる	
笠		8.5			*高徳寺は隅脚突起が外反	
塔身	軸1 反花 餽頭形 軸2 請花	8.6 2.8 1 9.3 6.6	6.6 3.2 1.6 9.7 6	2.0 ▲ 0.4 ▲ 0.6 ▲ 0.4 0.6	0.8 1.1 1.6 1.0 0.9	*最勝寺は月輪内凸 縁が盛り上がる 無文で薄い 4面に額 2重の主弁
基礎	反花 方形石 方形石2	3.1 4.1 4.5	3 3.3 0.8	0.1 0.8 0.8	1.0 無文 *最勝寺は刻銘	
基壇		16.25	29.4	▲ 13.2	1.8	
平均				▲ 1.4	1.1	

率分は、最勝寺塔を1としたときの比率

次に軸 2 では、最勝寺塔では額を彫込み、その中に「宝篋印塔」の各文字を 1 字ずつ陰刻するが、高徳寺塔のでは刻銘を彫らず無文である。元来最勝寺塔のように文字や何らかの装飾が行われるべきとみるが、それがされていない。この理由は不明である。

また、高徳寺塔では基礎 2 段目の方形石がない。最勝寺塔ではここに年代等刻銘がなされており、高徳寺塔でも刻銘を行った 2 段目の方形石が存在していた可能性が高い。この方形石がないことで、高徳寺塔において造立年代や経緯目的が不明となっている。

なお、高徳寺塔の造立年代は、最勝寺塔と同じ型式といえることから、最勝寺塔で推定した造立年代と同じ幕末・弘化 4 年頃と推定しておく。

## 2 製作石工の推定

2 塔は、石材が異なるものの型式がほぼ同じであることから、同一の石工が製作したものと考えられる。最勝寺塔の刻銘には石工名等の情報を示す文字が見えないため、具体的な石工名は不明である。

幕末期頃における宝篋印塔製作石工は、富山町石工・常願寺川石工にそれぞれ確認されている。

富山町石工には見上兵右衛門〔古川 2014a〕、常願寺川石工には中川甚右衛門〔古川 2012〕・北野甚蔵〔古川 2013〕がいる。

これらの石工が製作した宝篋印塔の型式と比較したところ、どの石工の製作品にも類似したものは見当たらない。このため細部の型式から石工を特定することは困難である。

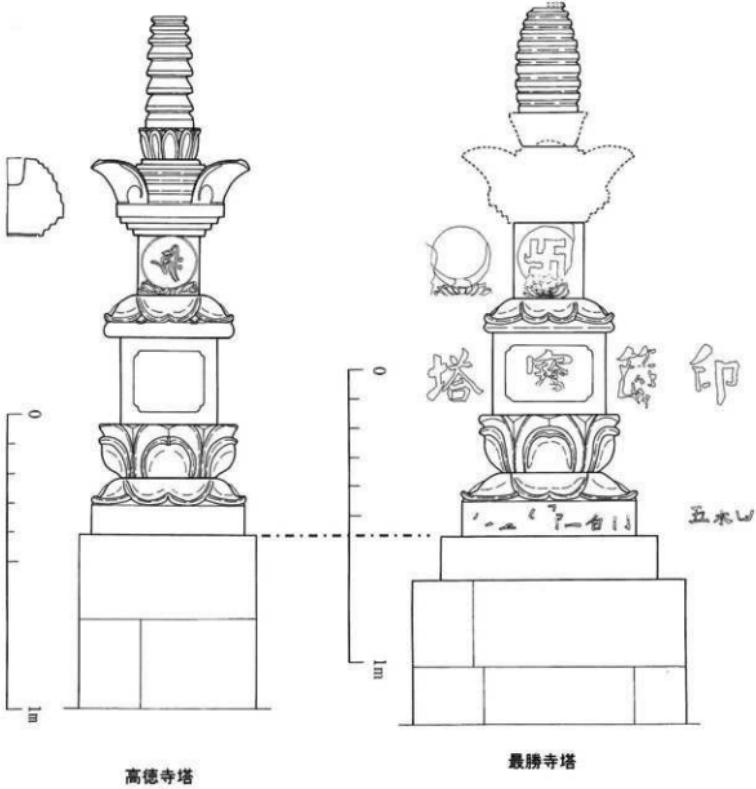
使用石材から見た場合、花崗岩を使用する石工は富山町石工が主であり、常願寺川石工では明治以降に花崗岩を採用する。このことから、本塔は富山町石工が製作した可能性が高い。ただし、新湊周辺など富山以西の石工においても花崗岩を使用する石工が存在するため、今後資料を蓄積した上で結論づける必要があろう。

次に、基壇における石材の合端合わせに方法について考察する。

基壇には通常切石が用いられ、合端は直線である。本塔においては、先述のとおり鉤曲りのような段状の加工、及び直線ではあるが垂直ではなく、やや斜め（84~85 度）となるという、他に例のない合端合わせ手法が見られる。このような手法は、一般に木材加工において継手仕口の種類に見られる手法である。鉤曲りとなるような仕口は「腰掛継ぎ」「段継ぎ」と呼ばれ、土台・基礎の材に用いる。斜めの仕口は「殺ぎ継ぎ」と呼ばれ、土台や垂木で用いられる。

このように、本塔では、石大工では通常見られない木大工の技術が採用されていると理解される。基壇が階段状でなく方柱状になる宝篋印塔は、砺波市千光寺（天明 6 年 1768）〔富山市埋蔵文化財センター 2014〕、富山市円城院（寛延 2 年 1749）など 18 世紀中葉の真言宗寺院塔に少数見られるが、両塔とも本塔のような特殊な仕口は認められない。

2 塔は、同じ曹洞宗寺院であるため、何らかの関係性において同じ石工により造立したものであるが、基壇部分については木大工の知識・技術が用いられた、特殊な塔であるといえる。その理由は、装飾性を意図したものか、後年における取り替えに由來するものか、不明である。



同一石工とみられる類似塔における比較

(基礎 1 石目底面を同じ高さにして、同寸で比較)

## 2 金岡氏の造塔について

### はじめに

富山藩士金岡氏が寄進した宝篋印塔は、これまで4基を確認し、その分析を行った〔富山市埋文センター編 2014〕。

今回宝寿院宝篋印塔の調査により、金岡氏造立石塔の資料が増加した。この調査では、以下報告する同寺所蔵寺位牌の調査も併せて行ったことで、金岡氏に関する資料が蓄積されたため、ここで改めて金岡氏の造塔行為の歴史的背景について検討したい。

### 1 金岡氏の系譜

金岡氏の祖は、戦国期飛騨出身の金山氏である。金山氏ははじめ文珠寺村（現富山市文珠寺）を本拠とした。文珠寺の真言宗金城山宝寿院は、金山氏の菩提寺である。

その後天正寺村に移転し、加賀藩十村役となった。

金岡氏の初代は、金山与兵衛一法で、天正寺村金山本家二代又兵衛吉秀の兄弟である。寛文16年に没し、戒名院号は「現証院」である（宝寿院資料による）。

二代庄右衛門は小杉村（現富山市小杉）に在住した。

三代庄三郎は、小杉村から富山町へ移転し、小杉屋を名乗った。

その後、七代彦三郎勝厚は富山藩士として取り立てられ、金岡氏を名乗ったとみられる。

九代彦一郎勝任は中条流剣術師範となり、明治を迎えて氏族直衛となつた〔高瀬編 1987〕。その末裔が、砂町在住の金岡忠商事金岡氏である。

金岡家墓所は、宝寿院南東の丘陵中腹に所在している。

### 2 宝寿院藏金岡家寺位牌について

金岡家は、宝寿院境内に宝篋印塔を造立したり、当寺の裏山に大規模な墓所を構え、その一部に当寺住職墓を有するなどの事実から、かつては当寺の有力檀家であったことが推定される。

このため、金岡家の由緒等を把握し、宝篋印塔造立の背景を明らかにする目的で、ご住職に過去帳・位牌等の金岡家資料の提供を申し入れたところ、寺位牌の存在が明らかとなつた。

今回、位牌に記載された内容（戒名・没年・夫婦関係・その他の由緒）を調査し、金岡家における家系と年代等の確認を行うとともに、周辺資料等における情報を加味して関係者情報を整理し、表1に示した。

本寺に所蔵されていた寺位牌は、8基がある。いずれも板札の周囲を装飾で飾った板位牌で、黒漆塗の塗位牌である。正面は板札も含めすべて金箔張りで、文字は彫り込みである。

板札には、夫婦の戒名を並べたものが7基、子ら5人をまとめて記下したもの1基がある。夫

表1 金岡家寺位牌一覧

番号	札板記載者	表書		裏書		全体高さ(cm)	最大幅(cm)	備考
		戒名	忌日	忌日	俗名			
1	初代・室	●	●		●	●	75.7	28 9代勝任誌
2	二代・室	●			●	●	66.8	22
3	三代・室	●	●	●	●	●	68	22.5
4	四代・室	●		●	●		53.6	29.3
5	五代・室	●		●	●		77.4	22.4
6	六代・子4人	●		●	●	●	66.8	19.2 9代勝任誌
7	七代・室	●		●	●	●	97.2	29.7 9代勝任誌
8	八代・室	●		●	●	●	97.4	29 9代勝任誌

婦の戒名を並べたものには、戒名のみのもの 6 基、忌日を記したもの 2 基がある。

位牌裏面には、黒漆地の上に朱漆で、戒名者の情報と記載する。忌日や俗名のほか、当主の実績由緒等を細かに記載するものもある。

7 代金岡勝厚、8 代金岡勝久について、詳細な由緒等の朱漆裏書がある。いずれも富山藩士である 9 代金岡彦一郎勝任が記したものである。下記に示す。

「真徳院・心鏡院」金岡家七代位牌裏書

金岡七世 真徳院殿

心鏡院殿 嘉永三庚戌年四月一日

祖母通称波津五世庄三郎四子之長也母福田屋伝右衛門弟称庄之助維六世登世茲弱歲テ執事然後以押川村栗山三郎兵衛之二男為婿維七世称彦三郎勝厚有一男称彦四郎勝久維八世先終家矣/祖母性敏手テ有駕敬尚儉素濟人之窮常訓導兒孫等機織縫暨自教聖經學琴書秉老益以金穀/供養三宝不止年七十二病卒焉不啻大五十有余歲浮沈之勞乎嗟令余烈永家兒孫幾多矣哉

金岡勝任謹誌

「円明院・貞信院」金岡家八代位牌裏書

恭惟謹号円明院一室勝久居士テ

鼻祖金山与兵衛八世孫称彦四郎諱勝久改姓金岡始任於藩受禄百石乃我之先考也天保四已十月十七日卒年三十八葬於文殊寺極寶寿院内先塋之側云

孝子彦一郎勝任〔泣+血〕敬識

為円明院殿等菩提為永代祠堂多金寺納其以利潤每年

十月十七日前後二夜三日土砂会執行無懈怠可有之事

先師貞信院法深妙喜大師者栗山氏之長女名茂登昔時文化十一戌九月

嫁テ設二男〔彦一郎勝任

茂勝亮一女〔石黒政善之室〕矣嘉永五壬子四月

二十七日受壽五十三歲理

円明院殿俱於宝篋印塔石牌也

併導師現住大阿闍梨法印宣範

茂勝亮

追慕慈德テ

勝任幡拂恐敬再誌

二十七日受壽五十三歲理

追慕慈德テ

勝任幡拂恐敬再誌

これらの寺位牌は、金岡家初代から八代まで連続した金岡家寺位牌である。大きさや文様意匠は異なるが、共通した様式であり、8 基のうち初代を含む 4 基において、9 代勝任が裏書を記している。このことから、これらの寺位牌はすべて、9 代勝任が作成・奉納したものとみられる。

なお、7 代勝厚と 8 代勝久の裏書の書式が異なっていることから、前者は嘉永 3 年 4 月以降、後者は嘉永 5 年 4 月以降に作成されたものと考えられる。その他の寺位牌はいずれかの時期に一括して製作した可能性が高い。

なお、『大山町史』及び当寺作成の金岡家家系図には、金岡家初代以前の金山氏の系図等の情報が記載されており、家系情報が把握できる。

以上の寺位牌の調査により、金岡家の家系や由緒がかなり明らかになった。その情報をまとめたものが表 2 である。

### 3 金岡氏の宝篋印塔造立状況

金岡氏は、菩提寺宝寿院宝篋印塔をはじめ、天明から嘉永年間に計 8 塔を造立した。なかでも九代勝任は 4 塔もの造立に関わっている。ここでは富山藩士金岡氏が造立した宝篋印塔 8 基を年代順に概観する（表 3・図 1）。

(1) 宝寿院宝篋印塔 (p25 参照)

小杉屋彦三郎（金岡家4代庄三郎勝良）が願主となり、天明7（1786）年、父母（利福院・訣妙誓）の2人の供養のため造立したものである。本体高101.7寸（308.2cm）、13段構成である。安山岩製で、石工は富山町石工佐伯伝右衛門である。

## （2）富山寺宝篋印塔旧塔

富山市古鍛冶町の真言宗藤居山富山寺境内に所在する。弘化5年（1848）造立宝篋印塔の基壇

表2 金岡氏供養者等情報一覧

番号	該当者情報		忌日	個人情報	寺位牌	金岡家墓所
	表記	戒名・法名				
1 現證院	徳田一法居士	寛文11	1671.12.3	金山与兵衛一法、(金岡家初代)	●	●
2 常楽院	法岸秀意大姉	元禄2	1694.6.4	金山与兵衛妻	●	●
3 理徳院	法金道山居士	享保13	1728.10.12	富山小杉村 金山庄右衛門(金岡家二代)	●	●
4 林照院	理法妙全大姉	享保12	1727.5.10	富山小杉村 金山庄右衛門妻	●	●
5 理福院	悦山道安居士	延享5	1748.1.8	小杉屋庄三郎(金岡家三代)、元在小杉村、初テ富山住、家系図では庄三郎勝安	●	●
6 計尼妙誓	(位号 梵尼)			庄三郎妻、富山寺町正覚寺蔵。太郎丸屋庄治良血縁？ 家系図では片掛円童寺娘	●	
7 密窓院	真山道法居士	寛政3	1791.4.3	売業商人？小杉屋彦三郎(金岡家四代)、家系図では庄三郎勝良、宝篋印塔造立願主	●	●
8 法岸院	清光妙泉大姉	寛政3	1791.7.11	彦三郎妻、	●	●
9 理教院	弧峯良仙居士	寛政3	1791.2.9	小杉屋庄三郎(金岡家五代)家系図では彦三郎庄治郎	●	●
10 梅雲院	高岸義明大姉	寛政10	1798.10.22	庄三郎妻、	●	●
11 源法院	密印淨山童子	寛政5	1793.12.24	小杉屋庄之助(金岡家六代)、彦三郎勝政	●	
12 真徳院	訣然勝厚居士	嘉永5	1852.9.14	富山藩士金岡彦三郎勝厚(金岡家七代)	●	
13 心鏡院	照空妙安大姉	嘉永3	1850.4.11	金岡勝厚妻おはつ	●	
14 円明院	一實勝久居士	天保4	1833.10.17	富山藩士 金岡彦四郎勝久(金岡家八代)	●	●
15 貞信院	法深妙喜大姉	嘉永5	1852.4.27	金岡勝久妻おもと	●	●
16 鶴林院	仁仙勝任居士	明治27	1894.7.2	富山藩士金岡彦一郎勝任(金岡家九代)	●	
17 法信院	円月妙照大姉			金岡勝任妻	●	
18 光林院	真覺宗清居士	文化元	1803.12.16	太郎丸屋庄次郎		
19		天保元	1829.12.17	太郎丸屋庄次郎妻？		
20 帰寒童女		天明6	1786.11.23	五代庄三郎二女	●	
21 計尼妙誓	信女	文化8	1811.2.3	六代庄之助妹	●	
22 実相童子		寛政5	1793.7.4	九代金岡勝任子、胎死。位牌の忌日は天保9(1840).9.11	●	●
23 秋音童子		弘化4	1847.7.29	九代金岡勝任二男富次郎2歳	●	●
24 道教信士						
25 理貞法尼						
26 計慶芳						
27 計尼巌淨						
28 室淨院	秋覚勝光童子	嘉永5	1852.8.28	金岡勝任長男愛太郎18歳	●	
29 直入孝順童女		明治元	1868.11.4	金岡勝任六女おさの7歳	●	
30 清涼院	英応勝忠居士	明治10	1877.11.13	分家金岡勝任六男勝忠	●	
31 直静院	本覚勝保童子	明治16	1883.8.20		●	
32 花岳院	静室妙暉大姉	明治23	1890.12.6	金岡湊妻	●	
33 良性院	紅顔妙貞大姉	明治25	1892.12.25	勝貞長女	●	
34 阿覚院	明照勝岩童子				●	
35 静心院	寛月妙蓮大姉				●	
36 金剛院殿	歡喜勝貞居士				●	
37 密巖院	智空妙円童女	明治26	1893.11.19	金岡湊娘	●	

表3 金岡氏造立宝篋印塔一覧

番号	所在地	和暦	年	供養者数	内金岡氏数	願主	石工
1	富山市文殊寺	宝寿院境内	天明7	1787	2	2 四代小杉屋彦三郎勝良	佐伯伝右衛門
2	富山市古鍛冶町	富山寺初期塔	寛政5	1793	1	1 六代金岡彦三郎勝政	
3	富山市開発	龍高寺境内	寛政9	1797	75	9 七代金岡彦三郎勝厚 太郎丸屋庄次郎	初兵衛・太兵衛・ 中川甚右衛門・ 伊三郎
4	富山市四方	海禪寺境内	文化13	1816	255	2 七代金岡彦三郎勝厚	佐伯伝右衛門・ 善六・善右衛門・ 小沢七兵衛・清藏
5	富山市梅沢町	真興寺境内	天保4	1833	26	26 八代金岡彦四郎勝久	
6	富山市文殊寺	金岡家墓所	天保5	1834	7	7 九代金岡彦三郎勝任	
7	富山市古鍛冶町	富山寺再建塔	弘化5	1848	23	23 九代金岡彦三郎勝任	見上兵右衛門
8	富山市本郷町	福寿寺境内	嘉永2	1849	15	15 九代金岡彦三郎勝任	
9	富山市八町	吉祥寺境内	嘉永5	1852	20	20 九代金岡彦三郎勝任	

内部に納められた旧塔軸により、旧塔は、「密窓院」が遺言により、寛政5年（1793）本寺を再興したことを記念して造塔されたことが判明した。旧塔は、天保2年（1831）本堂が焼失とともに焼損した。造立時の富山寺住職は32世栄道もしくはその前代と推定される〔富山市教委2013〕。

その後の調査により、密窓院は4代金岡彦三郎勝良であることが判明した。

#### (3) 龍高寺宝篋印塔

富山市開発の真言宗五穀山龍高寺境内に所在する。龍高寺 60世堯教が願主となり、寛政9年造立したものである。本体高157寸（475.7cm）、16段構成の大型塔である。基壇3段に四国遍路88ヶ寺本尊を刻む特殊な塔である。石工は初兵衛・太兵衛・甚右衛門・伊三良の4人の共作である。このうち甚右衛門は、馬瀬口村石工中川甚右衛門であり、この4人はともに常願寺川石工とみられる。造立の直接的な契機は本堂移転再建と思われる。造立にあたり、有力檀家・信徒からの寄進を受けており、その名と供養者の戒名等が基壇に刻銘されている。その一人に小杉屋彦三郎がおり、戒名院号「密窓院」ら7人以上の戒名が示される。供養者数は最も多い〔古川・蓮沼2009〕。

その後の調査により、刻銘者7人はいずれも金岡家一族で、また、金岡家と血縁関係にある太郎丸屋庄次郎が金岡家の2人を供養者としていることがわかった。これにより、金岡家関係者は9人が供養者となっていることになる。

本塔は金山氏が主たる造立者ではないが、寄進額の多くを担ったことを示す。

#### (4) 海禪寺宝篋印塔

富山市四方西岩瀬の真言宗稻荷山海禪寺境内に所在する。海禪寺 39世快円が願主となり、文化13年（1816）造立した。本体高124.3寸（376.6cm）、14段構成である。安山岩製で、石工は富山町石工佐伯伝右衛門ほか4人の共作である。基壇4段分に供養者255人の位号・戒名等がある。その中に、金岡家4代勝良彦三郎の戒名と、金岡家の家系と思われる太郎丸屋庄次郎の戒名の2人が見える〔富山市教委2014〕。

本塔は金山氏が主たる造立者ではないが、寄進額の一部を担ったことを示す。

#### (5) 真興寺宝篋印塔（p3 参照）

8代勝久が願主となり、天保4年造立した。本体高99.45寸（301.3cm）、15段構成である。基壇に供養者25人の戒名がある。饅頭形の4面には「角取り角形内のニツ巴」紋の浮彫文様がある。安山岩製で、石工は不明であるが、富山町石工見上兵右衛門の可能性がある。造立時の住

職は29世(位号不明)もしくは30世覺円と推定される。造立した年は勝久が死去した年である。勝久が発願し、子の勝任が引き継いで、勝久の菩提を弔ったと推定される。

#### (6) 金岡家墓所宝篋印塔

富山市文珠寺の宝寿院裏に金岡家墓所があり、墳墓形の主墓前に置かれた墓石群に含まれる2基の宝篋印塔のうちの1基である。天保6年造立て、軸2より上は欠失する。基壇には7人の戒名(正面)と忌日(裏面)が彫られるが、そこには明治元年死去者が示されているため、この基壇刻銘は明治以後の追刻あるいは別の基壇石が転用されたものである。本塔を金岡氏造立とした理由は、金岡家墓所に存在すること、軸2の刻銘内容が宝寿院境内宝篋印塔の軸2とほぼ同じであること、饅頭形の1面には家紋とみられる「角取り角形内の二ツ巴」の浮彫文様があることにによる。

#### (7) 富山寺宝篋印塔再建塔

金岡彦一郎勝任が願主となり、弘化5年造立て。本体高111.7寸(338.5cm)、14段構成である。基壇に供養者23人の戒名があり、本堂が天保2年焼失したため再建したことを記念して造塔したという経緯を刻む。饅頭形の4面には家紋とみられる「角取り角形内の二ツ巴」の浮彫文様がある。安山岩製で、石工は富山町石工見上兵右衛門である。造立時の富山寺住職は34世照海である〔富山市教委2013〕。

その後の調査により、密窓院は4代勝良、願主の金岡勝伍は判読間違いで、9代金岡勝任であることが判明した。これにより、刻銘者も金岡家一族であることがわかり、欠字等を補うことが可能となった。以下の分析はそれを修正したデータに基づいている。

#### (8) 福寿寺宝篋印塔

富山市本郷町の曹洞宗福寿寺境内に所在する。9代勝任が願主となり、嘉永2年(1849)造立て。本体高121.3寸(367.5cm)、12段構成である。基礎に供養者15人の戒名がある。供養者はいすれも金岡家一族である。

饅頭形の正面には「角取り角形内の二ツ巴」紋の浮彫文様がある。安山岩製で、石工は不明であるが、富山町石工見上兵右衛門の可能性がある。

#### (9) 吉祥寺宝篋印塔

富山市八町の真言宗十二王山吉祥寺門前に所在する。9代勝任が願主となって、嘉永5年造立て。相輪が欠失する。本体復元高93.7寸(283.9cm)、14段構成である。基礎に供養者20人の戒名がある。供養者はいすれも金岡家一族である。

饅頭形の正面には「角取り角形内の二ツ巴」紋の浮彫文様がある。安山岩製で、石工は不明であるが、富山町石工見上兵右衛門の可能性がある。

### 4 金岡家各代における宝篋印塔造立の背景

金岡家では、このように宝篋印塔造立を盛んに行った状況が判明したが、各代一样に造立を行ったわけではなかった。特に4代彦三郎勝良と9代彦一郎勝任に関係した造塔が多い。

次に、宝篋印塔を造立した当主の由緒等を明らかにする。

#### (1) 4代彦三郎勝良

勝良は当初3代庄三郎勝安の名跡を継ぎ、庄三郎勝良と名乗った(宝寿院資料)。その後彦三郎に改名したとみられ、宝寿院塔を造立した天明7年には彦三郎と刻銘がある。

勝良の戒名院号は、「密窓院」で、寛政3年4月に死去した。

勝良は、天明7年初めて宝寿院に宝篋印塔の造立を行ったが、それは両親の菩提供養を目的と

した。しかし造立年は、両親のいずれの年忌とも合致しないため、その造立の動機は、勝良本人の記念的理由、あるいは寄進先である宝寿院の記念事業に伴うと推定される。

次に造立した富山寺旧宝鏡印塔は、勝良の遺言によって死後造立したものである。軸2のみ残され、戒名等情報が存在したはずの基壇は失われているため、造立理由は不明である。

彦三郎は、小杉屋彦三郎が金岡姓に改めたとされる〔館盛 1990〕。彦三郎は、長慶寺五百羅漢寄進者の一人で、第二百五番・第二百十一番の2体を寄進している。台座に彫られた供養者4人は、いずれも戒名者であり〔館盛 1990〕、表1のNo.7~10の4人と一致する。彦三郎は、寛政6・7年伯耆国懸場売買〔『富山売薬業史史料集』〕に名前が見えることから、売薬業を営んでいたこと、1794・95年段階での存在が確認できる。これは、上記勝良の没年以後であることから、5代彦三郎のことであることがわかる。なお、宝寿院資料によれば、5代庄次郎から7代勝厚まで彦三郎を名乗った。

#### (2) 7代彦三郎勝厚

勝厚は、6代勝政の子で、富山藩士であったとされるが、現存する藩士名簿には名が見えない。戒名院号は「真徳院」で、嘉永5年9月に死去した。室は俗名波津で、戒名院号は「心鏡院」である（宝寿院寺位牌裏書）。

寛政9年龍高寺塔、文化13年海禅寺塔は、寺住職が発願し信徒多数の寄進により造立した塔であり、信徒の一人として寄進した。特に龍高寺塔は7人の戒名刻銘をして供養している。この数は刻銘信徒（俗名記載者）中最も多く、多額の寄進を行ったことが推測される。勝厚は単独で造塔することはなかった。

#### (3) 8代彦四郎勝久

勝久は、7代彦三郎勝厚の子、勝任の父で、富山藩士であったとされるが、現存する藩士名簿には名が見えない。翁久允は、「金岡彦一郎に関する古文書」入手し、勝久は天保初め頃自殺し、土分を取上げられたとした〔翁 1938〕。

文政7年（1824）30俵士分、天保4年100石となり、のち御郡頭取となった。

宝寿院寺位牌によれば、勝久の戒名院号は「圓明院」で、天保4年10月に死去した。齡三十八歳であることから、寛政7年生まれである。室は「貞信院法深妙喜大姉」俗名おもとで、勝久死去19年後の嘉永5年53歳で死去した。勝久の墓石は金岡家墓所内にある。

天保4年秋造立の刻銘がある真興寺塔は、死去前後の造立であり、先述のように勝久の願意があったにしろ、実際に造立を担ったのは、実質的に子の勝任であったと推定されるだろう。

#### (4) 9代彦一郎勝任

彦一郎が初めて藩史に登場するのは、天保5年10月、藩財政が逼迫したことによる改革のため、家老瀬江監物をはじめ22名が処分された。その一人が金岡彦一郎で、元御郡頭取金岡彦四郎の子として、御郡頭取を世襲していたものか。若干17歳であったが、「知行召放」の処分を受けた〔『富山県史 通史編 近世1』〕。

弘化4年、富山藩が招聘した高島流砲術家松下健作のもとに、田上兵助らと入門した。このとき彦一郎は30歳である。その後安政7（1860）年の藩士名簿『富山御家中分限帳』では、御先手廻組に属し、「六拾石 金岡彦一郎 四十三」とあり、「中条流剣術・民弥流居合差引役」の付記がある〔高瀬編 1987〕。これにより、勝任氏は、文化14年生まれであることがわかる。差引役という役職が付与されているが、これは藩校広徳館の師範であったと推定される。

明治2（1869）年『士族分限帳』の「一等士族直衛」に、「五拾三俵毫斗八升八合 金岡彦一

郎 勝任 五十三」とある〔高瀬編 1987〕。

勝任は、戒名院号は「鶴林院」で、明治 27 年 7 月に死去した。室は、戒名院号は「法信院」で忌日は不明である。勝任には 6 男 6 女がいた。勝任・室・子 4 人の墓石は金岡家墓所内にある。

勝任による最初の造塔は、天保 5 年金岡家墓所内塔であり、これは父 8 代勝久死去 1 年後のことであるから、1 周忌の年忌供養として造立したものとみられる。次の富山寺塔の造立は弘化 5 年 32 歳の時であり、松下健作のもとに入門した 1 年後である。福寿寺塔はその翌年、吉祥寺塔はその 3 年後の嘉永 5 年 36 歳の時で、高島流砲術を習得した後であり、中条流剣術・民弥流居合差引役に就任する以前、あるいは就任した時のことと思われる。つまり勝任は、5 年間という短期間にうちに 4 基も造立しているのである。このような頻繁な造塔行為は、他に例がない特異な状況といえる。

## 5 金岡家における先祖供養の形態

供養者の刻銘が明らかである事例について、供養者の取り上げ方を検討する。

先に表 2 において系譜が判明した供養者について、各塔での推移を明らかにしたもののが表 4 である。造立者と供養者の関係性を中心見てみたい。

最初期の天明 7 年には、4 代勝良は、両親供養のため造塔した。ただし、年忌供養が目的ではなく、勝良自身あるいは宝寿院の記念行事が契機になったと推定される。3 代は小杉村から富山町に移転した当主であるが、菩提寺が宝寿院であったため、そこに造立したと思われる。

7 代勝厚は、他の信徒と共に龍高寺の造塔に参加した。龍高寺では本堂再建を主な契機として造塔したと推定される〔古川・蓮沼 2009〕。供養者は 2 代から 6 代の当主・室であるが、3 代のみ太郎丸屋庄次郎が代わって供養者として 2 人をあげている。これは 3 代勝安か室が庄次郎と血縁関係にあったためとみられる。室は神通峠片掛円竜寺娘と宝寿院資料にあることから、勝安

表4 金岡氏刻銘供養者一覧

番号	表記	該当者情報 和歴：西歴	忌日	系譜	1787	1797	1833	1848	1849	1852	1853	金岡家墓地
					宝寿院塔	龍高寺塔	真興寺塔	富山寺再建塔	福寿寺塔	吉祥寺塔		
1	現正院	慈田一法居士	寛政 11：1671	初代			●		●	●	●	
2	常樂院	法岸秀意大輔	元禄 2：1694	初代室			●		●	●	●	
3	理德院	法金道山居士	享保 13：1728			●			●	●	●	
4	林照院	理法妙全大輔	享保 12：1727	2代室		●	●		●	●	●	
5	理福院	悅山道安居士	延享 5：1748	3代	●	▲	●		●	●	●	
6	貌尼妙雲	：	：	3代室	●	▲	●		●	●	●	
7	密歡院	真山道法居士	寛政 3：1791	4代		●	●		●	●	●	
8	法岸院	清光妙泉大輔	寛政 3：1791	4代室		●	●		●	●	●	
9	理教院	延峯良仙居士	寛政 3：1791	5代		●	●		●	●	●	
10	梅雲院	高岸義明大輔	寛政 10：1798	5代室		●	●		●	●	●	
11	圓法院	照印淨山童子	寛政 5：1793	6代		●	●		●	●	●	
12	真徳院	貽然勝居居士	嘉永 5：1852	7代		●	●		●	●	●	
13	心鏡院	照空妙安大輔	嘉永 3：1850	7代室		●	●		●	●	●	
14	円明院	一實勝久居士	天保 4：1833	8代		●	●		●	●	●	
15	光林院	真覚宗清居士	文化 1：1803	太郎丸屋庄次郎		●	●		●	●	●	
16	直信院	法源妙高大輔	嘉永 5：1852	8代室		●	●		●	●	●	
17	帰寧童女	天明 6：1786	5代二女		●	●	○		●	●	●	
18	貌尼妙尊	文化 8：1811	6代妹		●	●	●		●	●	●	
19	美相童子	寛政 5：1793	9代子		●	●	●		●	●	●	
20	秋音童子	弘化 4：1847	9代二男		●	●	●		●	●	●	
21	道教信士	：	：		○							
22	理貞法尼	：	：		2	9	18	16	14	20	5	
23	貌 美芳	：	：		4代勝良	7代勝厚	8代勝久	9代勝任	9代勝任	9代勝任	9代勝任	
24	貌尼嚴淨	：	：		●	●	●					
25	幻空童子	：	：		●							
	計	：	：									
		：	：		4代勝良	7代勝厚	8代勝久	9代勝任	9代勝任	9代勝任	9代勝任	

の兄弟等が想定される。

なお、富山寺旧塔は、5代・6代ともに相次ぎ死去しているため、5代が段取りを進め、最終的には7代勝厚が担ったと思われる。

8代勝久は、死去直前に真興寺に造塔を行った。刻銘に2書体があることから、造立は勝久死去後のことで、子の勝任が繼承して造立したと推定した。真興寺塔では、金岡家初代からを供養している。次に勝任が単独で造塔した富山寺再建塔においては、勝任は3代からの供養であり異なることからも、勝久との相違を見い出すことができ、上記推定を裏付ける。最終的には勝久の菩提供養のためとなった。

4塔を連續して造塔した9代勝任は、最初の富山寺再建塔では3代から、次の福寿寺塔・吉祥寺塔は、勝久と同じ初代からの供養である。

それぞれの造塔の直接的理由についてみると、富山寺では、中興に尽力した4代勝良の末裔として、新たな本堂の再建を記念して造塔した。

嘉永2年福寿寺では、年代からみて、勝任の二男富次郎（2歳）の3回忌にあたることから、年忌供養として造塔したと解される。

嘉永5年吉祥寺では、年代からみて、母茂登（もと、戒名院号貞信院）の死去に対し菩提を弔うことが契機と推定される。

以上のことから、金岡家においては、当初4代勝良が両親供養のため造塔を開始し、7代勝厚は5代前まで、8代勝久以降は初代まで遡って供養するため造塔した。ただし、造塔はそれぞれにおける直接的動機があり、それに伴う形で上記の先祖供養をも行ったと理解される。

## 6 造塔における製作上の推移

金岡氏が造立した宝篋印塔において、形態や文様など型式的特徴と製作石工との関係について検証する。

### （1）形態・文様の特徴と変化

金岡氏が造立した宝篋印塔は、階段状の基壇をもち、近世における基本的構成に基づく宝篋印塔型式である。以後の変遷を検討する上でメルクマールとなる特徴を取り上げ、その変化について述べる。

相輪の下部請花の形態は、変化する。宝寿院塔・福寿寺塔は3段の花頭形、真興寺塔・富山寺塔は単弁である。

笠の隅脚突起は、最初期の宝寿院塔は下辺の縁取りがなく、以後は縁取りがある。

軸1の四仏の梵字種子は共通するが、額・月輪・蓮台の表現は多様である。

軸2の正面刻銘は、最初期の宝寿院塔は宝篋印陀羅尼経文であるが、それ以後は宝篋印陀羅尼経を意味する梵字種子「シッチリア」である。他の面は、宝篋印陀羅尼経文、年号等縦縫の刻銘もあるが、全ての塔において光明真言梵字がみられる。その面位置は、宝寿院塔・富山寺塔は裏面、それ以外では右面である。富山寺では光明真言梵字の前後に淨土真言梵字・破地獄真言梵字が加えられている。

幔頭形は、最初期の宝寿院塔を除き、平面方形のものが基礎の上に存在する。宝寿院塔では、他の天明頃の宝篋印塔と同様、軸2の上に厚みが薄い幔頭形が乗る。真興寺塔以降は全て幔頭形の正面には、六角形の中に二つ巴の浮彫文様が陽刻されている。これは、家紋分類では「角取り角に二ツ巴」紋に該当する。これは金岡家の家紋と理解するのが妥当とみられる。現在、宝寿院寺位牌の家紋部分、金岡家墓所や墓石の一部に見られる家紋は全て「角取り角に二ツ巴」紋で

あり、金岡家家紋と同定することができる。よって、真興寺塔以降では、家紋を饅頭形の表示したことで共通性が認められる。

基礎は、当初額内に浮彫文様があるが、福寿寺塔以後は文様がなくなる。浮彫文様は、最初期の宝寿院塔では波涛文・祥雲文、次の真興寺塔は額のみ、次の富山寺塔は波涛文のみ、と多様である。

基壇は、最上段に供養者戒名を刻銘する。基壇段数は5段で推移し、小型の福寿寺塔のみ3段である。

以上を概観すると、金岡氏の造塔は、天明7年から嘉永5年の65年間にわたり、8代の天保4年以降の19年間に4基が集中する。それについて型式的な共通性をみると、軸2に梵字種子シッチリア+光明真言24文字の刻銘、饅頭形に金岡家家紋「角取り角に二ツ巴」の陽刻、基壇最上段に金岡家先祖の戒名刻銘という3点が挙げられる。一方、各部材の細部の文様特徴は、各石塔によって異なっており、多様といえる。これは製作した石工の違いが反映していると考えられる。

次に製作石工の視点から、石塔の相違や変化について検証する。

## (2) 製作石工による多様性の理解

これらの塔には、製作した石工名を刻銘するものがある。

初期の宝寿院塔は、富山町石工佐伯伝右衛門による。伝右衛門の詳細については次項で検討する。伝右衛門は、このほか文化13年海禅寺塔を共作している。

弘化5年富山寺再建塔は、富山町石工見上兵右衛門による。兵右衛門は、文政元年から嘉永5年まで宝篋印塔・題目塔・狛犬・石碑を製作した。刻銘品5基のほか推定品4基があり、福寿寺塔・吉祥寺塔は推定品に含まれる。波涛文等の意匠は、兵右衛門に先行する伝右衛門の影響を受けたと推定される〔古川2014a〕。兵右衛門の宝篋印塔は、意匠に富んだ浮彫文様得意とし、他の宝篋印塔とは異なる華美な印象を受ける。天保4年真興寺塔は、兵右衛門の製作期間内にあり、また饅頭形の浮彫文様のデザイン性の高さは、兵右衛門の製作を思わせるところである。

以上のことから、初期の宝寿院塔は佐伯伝右衛門、それ以後は見上兵右衛門が製作した可能性が高い。いずれも富山町石工であり、製作本拠地内に含まれている常願寺川石工の関与は、今のところ認められない。宝寿院塔の天明年間は、まだ常願寺川石工による宝篋印塔製作が着手されていないとみられることから、宝篋印塔の製作は専ら富山町石工が担当した。寛政9年以降は常願寺川石工も宝篋印塔製作に着手しているが、この時点ではすでに金岡氏は富山町に移転しており、富山町石工への製作注文は、最も身近であったと考えられる。

## (3) 金岡氏の石造物奉納について

これまで金岡氏における宝篋印塔造塔についてみてきたが、金岡氏は宝篋印塔以外にも燈籠等を寄進している（表5）。まだ網羅していないため、全体の動向は不明である。

燈籠は本体石塔や墓石・墓地等に付随する性格のものが多いため、燈籠単独のものについては、本体を確認する必要がある。

今後資料を蓄積していく必要がある。



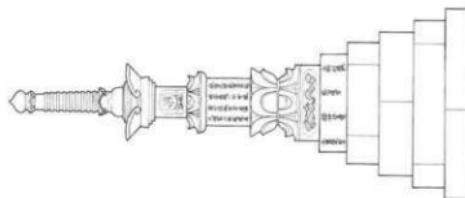
吉祥寺塔饅頭形の浮彫文様

表5 金岡氏石造物奉納歴

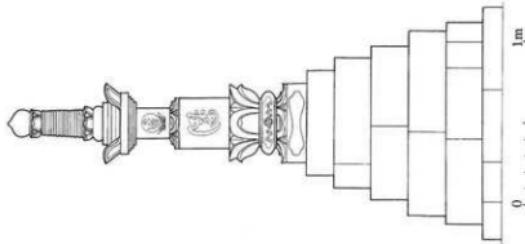
各代における数字は年齢を示す

年号	5代 庄治節	6代 勝政	7代 勝厚	8代 勝久	9代 勝任	宝篋印塔	機種	場所
1785			5					
1786			6					
1787			7			宝寿院境内		
1788			8					
1789			9					
1790			10					
1791			11					金岡家墓所
1792			12					
1793			13			富山寺境内初期塔		
1794			14					
1795			15	0				
1796			16	1				
1797			17	2		龍高寺境内		
1798			18	3				
1799			19	4				
1800			20	5				
1801			21	6				
1802			22	7				
1803			23	8				
1804			24	9				
1805			25	10				
1806			26	11				
1807			27	12				
1808			28	13				
1809			29	14				
1810			30	15				
1811			31	16				
1812			32	17				
1813			33	18				
1814			34	19				
1815			35	20				
1816			36	21		海津寺境内		
1817			37	22	0			
1818			38	23	1			
1819			39	24	2			
1820			40	25	3			
1821			41	26	4			
1822			42	27	5			
1823			43	28	6	金岡家墓所塔1		
1824			44	29	7			
1825			45	30	8			
1826			46	31	9			
1827			47	32	10			
1828			48	33	11			
1829			49	34	12			
1830			50	35	13			
1831			51	36	14			
1832			52	37	15	金岡家墓所2		
1833			53	38	16	真興寺境内		金岡家墓所
1834			54		17			
1835			55		18			
1836			56		19			
1837			57		20			
1838			58		21			
1839			59		22			
1840			60		23			
1841			61		24			
1842			62		25			
1843			63		26			
1844			64		27			
1845			65		28			
1846			66		29			
1847			67		30			
1848			68		31	富山寺再建塔		
1849			69		32	福寿寺境内		
1850			70		33			
1851			71		34			
1852			72		35	吉祥寺門前		
1853					36			
1854					37			
1855					38			
1856					39			

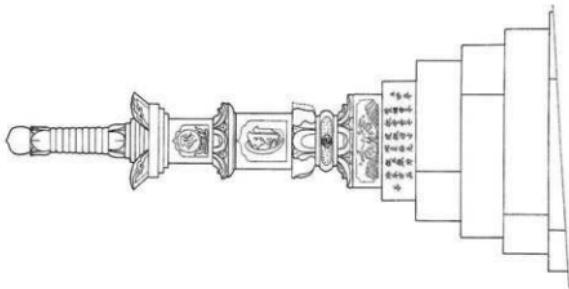
金岡氏造立の宝篋印塔



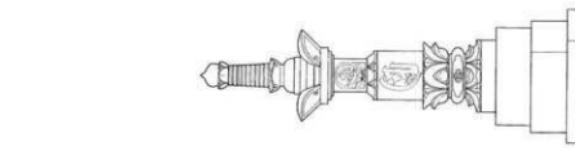
宝寿院  
天明 7  
(1787)  
4代金岡勝良  
石工：佐伯伝右衛門



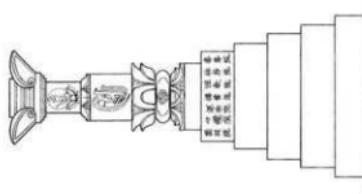
真興寺  
天保 4  
(1833)  
8代金岡勝久



福壽寺  
嘉永 2  
(1849)  
9代金岡勝任



吉祥寺  
嘉永 5  
(1852)  
9代金岡勝任



吉祥寺  
嘉永 5  
(1852)  
9代金岡勝任

### 3 富山町石工佐伯伝右衛門について（続）

はじめに

今回調査した宝寿院境内宝篋印塔には、基礎に「富城住人／石工・佐伯伝右衛門」と刻銘があり、製作石工が富山町在住の佐伯伝右衛門であることがわかる。

富山町石工佐伯伝右衛門については、筆者が集成調査を行い、推定品も含め4基の宝篋印塔の製作を確認した〔古川 2013〕。その後、富山市四方真言宗海禪寺宝篋印塔が伝右衛門らの製作であることが判明した〔富山市埋文センター2014〕。また今回の宝寿院宝篋印塔の成果を追加すると、計6基の製作品が確認されたことになる。

本稿では、前項を補追する形で、伝右衛門の特徴を整理し直すものである。

#### 1 これまでの伝右衛門の評価

前稿〔古川 2013〕までに明らかになった伝右衛門の評価について概括する。

伝右衛門は、現在知られている富山町石工名のうち、最も古い石工の一人である。

伝右衛門の製作品は、すべて宝篋印塔であり、年代は天明6年から文化13年（1816）まで31年にわたる。刻銘により、伝右衛門は勝行と吉忠の2人がいた。勝行は最も古い天明6年千光寺塔を作成し、吉忠はその5年後に常楽寺塔を作成した。2塔ともに他の宝篋印塔にない独自の形態・装飾を行っている点で共通する。その後の宝篋印塔には勝行・吉忠の名ではなく、伝右衛門とだけ記されており、いずれの製作品かの判断が難しいが、若干の違いがある。石工名刻銘において、勝行は、「石」に点を付し、「工」は通常形、吉忠は、「石」に点を付さず、「工」はユ形とする。年代的に先行する勝行を初代伝右衛門、吉忠を2代伝右衛門とする。

伝右衛門の特徴は、天明6年千光寺塔において初めて基礎四脚化+支え石という立体化を行い、また基礎文様に初めて浮彫文様を採用した。千光寺宝篋印塔における浮彫文様が吉祥文を採用した最古の事例であり、その後吉祥文の付けられる位置が変化した。

伝右衛門は2代にわたるが、ある時点をもって代替りしたのではなく、2人の伝右衛門がそれぞれ伝右衛門を名乗る重複期間があったとみられることから、それぞれにおいて特徴等の変化を見る必要がある。

#### 2 追加資料における課題

今回増加した2基は、いずれも伝右衛門の石工名刻銘があるが、勝行・吉忠の名ではなく、いずれの作であるかの判断は、検討を要する。

宝寿院塔は、初代勝行が最初に製作した天明6年千光寺塔の翌年であり、2番目に古い。

海禪寺塔は、文化13年で最も新しく、初期塔の製作からは30年後である。伝右衛門を入れて計5人の石工による共作であり、伝右衛門が棟梁となって他の4人と共に製作したものと推定される。共作はこの最後の1塔のみである。

これまでの検討では、2つの文字形状の違いの組合せにより、勝行と吉忠は区別されうるとしていた。この識別方法に基づくと、文化13年の海禪寺塔は、石に点なし、工はユ形であることから、吉忠の作とみることができる。一方、宝寿院塔においては、石に点がなく、工は通常形であり、前者は吉忠の基準、後者は勝行の基準である。よってどちらともいえないことになるが、石工名表記方法について見ると、「富城住人／石工」の表現は、次の寛政3年常楽寺塔と全く同じである。このことから、宝寿

表1 佐伯伝右衛門作宝篋印塔一覧

在銘年号 和暦 西暦	所在地	寺院情報	石工名表記	石材	浮彫文様の種類	判断基準		備考	
						「石」字 「工」字	結果		
1 天明6 1786	砺波市芹谷	真言宗芹谷山千光寺	越中富山住人 大石 工 佐伯伝右衛門勝 行	安山岩・ 凝灰岩	祥雲文・波涛文・ 牡丹文・獅子狛 犬文・前文	点あり	通常形	勝行	勝行銘
2 天明7 1787	富山市文珠寺	真言宗金城山宝寿院	富城住人/石工/佐 伯伝右衛門	安山岩	祥雲文・波涛文	点なし	通常形	吉忠?	
3 宽政3 1791	富山市婦中町千里	真言宗法界山常楽寺	富城住人/石工/佐 伯伝右衛門/吉忠	安山岩	祥雲文・波涛文 (基礎)/龍文・ 祥雲文・波涛文 (支え石)	点なし	ニ形	吉忠	吉忠銘
4 宽政7 1795	富山市太田南町	真言宗立本山刀尾寺	富山/伯佐/石工/ 伝右衛門	安山岩	なし	点あり	通常形	勝行	
5 文化2 1805	富山市八尾町深谷	真言宗深谷山紙樹寺	—	安山岩	龍文・祥雲文・波 兔文(舞頭形)			吉忠?	
6 文化13 1816	富山市四方西岩瀬	真言宗福荷山海禅寺	石工富山/伝右衛門 /同 善六/同 善右 衛門/同 小沢七兵 衛/同 清蔵	安山岩	なし	点なし	ニ形	吉忠	5人共作

院塔は吉忠の可能性が高いことになる。よって文字形状においては、「石」字に点の有無により判断が可能になると考えられる。

### 3 伝右衛門についての分析

#### (1) 共作者

これまでの知見では、伝右衛門はずっと単独作であったが、最終作例となった文化13年海禅寺塔では、初めて、善六・善右衛門・小沢七兵衛・清蔵の4人の石工と共作を行っている。

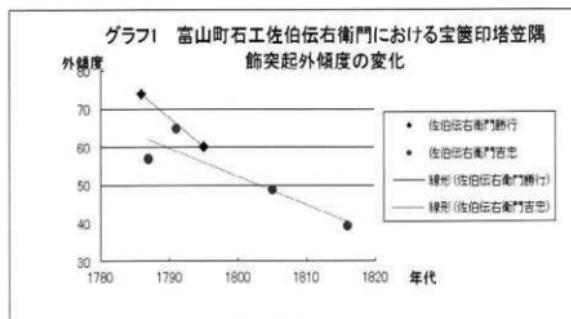
これらの石工は、いずれもこれ以後の石造物に名が見えないため、その出自等は不明である。伝右衛門が筆頭に書かれ、それ以後に4人の名が書かれていることから、伝右衛門が棟梁身分で、それ以外は伝右衛門の工房に属する石工達と推定される。

なお、富山町石工刻銘石造物中には、小沢姓の石工が1人確認されている。富山市五福の石碑基礎部材に「富山住人/石工/小沢吉兵」とあり、年代・工房地ともに不明である〔古川 2012a〕。「富山住人/石工」の表記は、伝右衛門勝行の天明6年千光寺塔に類似する。

#### (2) 伝右衛門の特徴と推移

伝右衛門は2代にわたり、基礎側面における牡丹+獅子狛犬の消滅と支え石における祥雲文の加飾が2人の相違として捉えられることは、前稿で指摘したとおりである。また共通した特徴として、笠の隅飾突起の外傾度があることも指摘した。今回の資料追加と2人の区別が明らかになりつつあることから、ここでは隅飾突起の外傾度について確認する。

前稿においては、2人を一体として捉えた結果、外傾度は年代の経過とともに小さくなっていく、すなわち、次第に起きあがっていく



るという傾向を把握できた。今回は、2人を別々に分析し、グラフ1に示した。

これによれば、初代勝行と2代吉忠は、いずれも外傾度が年代の経過とともに小さくなっていくことは共通するが、勝行においては吉忠よりその変化が急激であるといえる。なおこの外傾度は、寛政後期以降製作を開始した常願寺川石工においては、年代の経過とともに次第に大きくなる、すなわち外向きに広がって行くという、全く反対の傾向を示していることから〔富山市教委埋文センター編2012〕、隅飾突起の外傾の選択、石工個人あるいは石工の属する工房単位において決定されていくものと推定される。

### (3)伝右衛門の分布(図1)

伝右衛門作例の分布範囲は、前稿においては、工房のある富山町内ではなく、1里以内に1基(25%)、3~4里以上に3基(75%)が存在した。今回の増を受けた結果、1里以内に1基(17%)、3里以内に4基(67%)、残る1基は4里以上の遠距離である。よって、伝右衛門は、工房からやや離れた2~4里地域の寺院に主に供給していたといえる。

分布範囲を地形的にみると、北は富山湾岸、南は神通峠手前、西は庄川右岸、東は常願寺川左岸の範囲であり、富山藩領域とそれから近い加賀藩域に及ぶ。散布は散漫であり、富山町以南において広い分布を示すといえる。

富山町内に工房をもつても関わらず、富山町内及び町近接地に少ない理由は不明である。

### 4 伝右衛門の識別基準の検討

佐伯伝右衛門は、宝篋印塔製作において最も早く石工名を刻銘した富山町石工である。また、石造物に石工名を刻銘した最も早い石工の人でもある。

伝右衛門は、勝行から吉忠に襲名された。その移行は漸次的であり、吉忠が襲名した後も勝行は伝右衛門名の刻銘を行い、製作を継続した。

勝行は、初期の千光寺塔で、特異な基礎支え石と緻密な吉祥文様浮彫技法を完成させた。吉忠はこれを常樂寺塔で模倣し、技術の伝承を証明した。吉忠は、おそらくここにおいて伝右衛門を襲名したと考えられる。吉祥文様としての唐獅子牡丹は、勝行だけでとどまつたが、祥雲文・波涛文は以後継続してメイン文様として使用された。その端緒は伝右衛門にあったと思われる。この祥雲文・波涛文について詳細にみると、勝行は1基しかないが陰刻、吉忠は陽刻しており、区別は可能である。この祥雲文・波涛文は、後に常願寺川石工の製作した宝篋印塔にも採用されていき、やがて石仏の光背文様・基礎文様にも拡大していく。その役割を担ったのが、馬瀬村中川甚右衛門である。

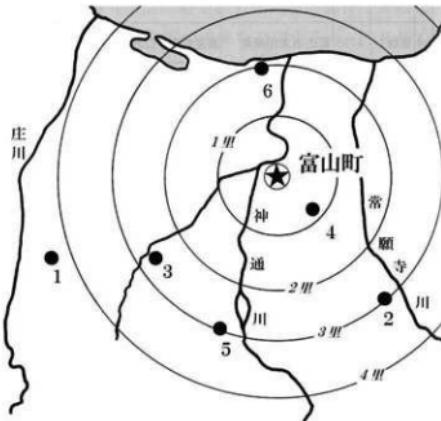


図1 佐伯伝右衛門作石塔の分布

1:千光寺、2:宝寿院、3:常樂寺、  
4:刀尾寺、5:紙樹寺、6:海禅寺

## 5 吉祥文浮彫の変遷

浮彫文様には、祥雲文・波涛文をメインとし、草花文、龍文、唐獅子牡丹、四足動物の鹿や兎、鳥を配置し、波涛や水流と組み合わせている。

龍や獅子狛犬の神獸は吉獸である。波間の兎はいわゆる波兎と呼ばれ、月の精としての兎に子孫繁榮・豊穣等を与える瑞獸として扱われており、また火防・火除けの守りともされている。

これらは総じて吉祥をあらわす吉祥文と理解され、これを付すことによって。石塔自体に吉祥性を持たせることと、外観の装飾性を高めて視覚的効果を狙ったものと考えられる。

宝篋印塔における吉祥文の変化について、年代別の変遷を追ったものが第2図である。これには常願寺川石工・神通川石工も含めた。

祥雲文は、1700年代においては、陰刻を主体としていたが、立体的な陽刻に移行し、これが主流になる。個々の祥雲の配置や方向は比較的自由であり、19世紀中ば以降渦に近い形状になる。

波涛文は最も多用される文様で、バラエティも多い。波涛文も祥雲文同様当初は陰刻を主体としていたが、立体的な陽刻に移行する。石工により、波頭や飛沫の構成・數・表現方法が異なっており、その特徴は個人に帰する。波の上に兎2羽が跳ねる構図は、波兎と呼称されている。2羽の鳥が波間に飛翔する構図も、吉祥を表すか。

蓮華や草花を表した文様は、初期には菊花+波涛の組み合わせ、熨斗に挿した菖蒲（アヤメあるいはショウブ）・カキツバタの構図となる。その後流水+蓮花、流水+菊花の組み合わせとなり、幕末には菖蒲や菊花が単独で描かれるようになる。

龍文は、当初丸い基礎支え石に描かれ、天に祥雲、地に波涛が描かれ、曾於の間をうねるように龍が描かれている。19世紀初頭には祥雲+龍、波涛+鹿、幕末には波涛+龍、波兎となり、祥雲が少なくなる傾向にある。

なお龍文は、幕末頃常願寺川石工北野甚蔵が採用し、石仏基礎などに描いた〔古川2013b〕。

以上のように、吉祥文浮彫は幕末まで宝篋印塔に多く採用されていった。しかし、伝右衛門においては寛政7年以降造立の宝篋印塔には浮彫を行わなくなっており、積極的に採用し始めた常願寺川石工とは反対の傾向を示している。この理由は不明である。

## 6 佐伯伝右衛門の再評価

佐伯伝右衛門勝行は、吉祥文浮彫を宝篋印塔に採用した最初の石工である。これは吉忠へ引き継がれ、さらには見上兵右衛門など幕末期の富山町石工へ移行した。また、常願寺川石工においては積極的に採用し、波涛文・祥雲文は常願寺川石工中川甚右衛門が文化6年頃が石仏や宝篋印塔に取り入れ〔古川2011〕、龍文は唯一北野甚蔵〔古川2013b〕が弘化2年以降取り入れた。以上により、伝右衛門が採用を開始した吉祥文は、富山町石工から常願寺川石工への継承がなされたが、それと同時に富山町石工の中では次第に消滅していった。常願寺川石工における吉祥文の隆盛は、個々の石工において選択・変容がみられる。

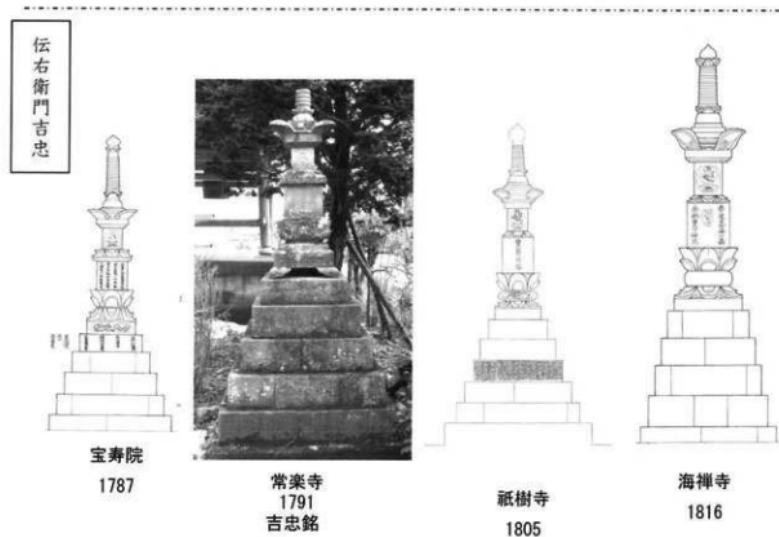
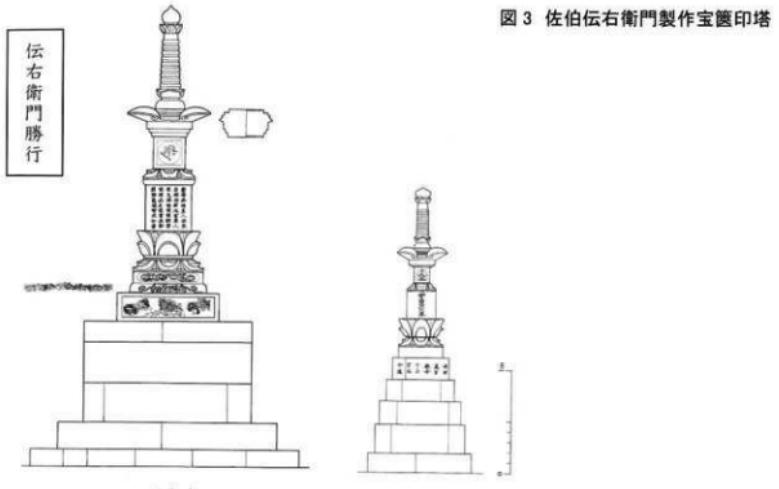
なお、勝行と吉忠の同定は、今後の調査の進展によって、変更される可能性がある。

図2 吉祥文浮彫文様の変遷（富山町石工・常願寺川石工・神通川石工）

	祥雲文	波涛文
1786	千光寺（佐伯伝右衛門勝行）	千光寺（佐伯伝右衛門勝行）
1787	宝寿院（佐伯伝右衛門）	宝寿院（佐伯伝右衛門）
1803		田嶋鶏塚（親成）
1805		紙樹寺
1820	下番中川家墓地	下番中川家墓地
1821	日石寺（中川甚右衛門）	日石寺（中川甚右衛門）
1848		富山寺（見上兵右衛門）
1858	帝龍寺（石屋浅吉）	帝龍寺（石屋浅吉）

	蓮華文・草花文	その他文
1786		 唐獅子牡丹文
1797	 菊花+波涛  菖蒲 龍高寺(中川基右衛門ほか)	 千光寺(佐伯伝右衛門勝行) 龍文
1805		 龍文  鹿文 紙樹寺
1820	 下番中川家墓地 蓮華+流水	1845 芦嶺寺 (北野甚蔵) 
1858	 菊花+流水  菖蒲  菊花 帝龍寺(石屋浅吉)	 龍文  波兎 帝龍寺(石屋浅吉) 1859 月岡新 (北野甚蔵) 

図3 佐伯伝右衛門製作宝篋印塔



## 4 岩石帶磁率による近世地域石材の分類（予察）

### (1) 地域石材の同定について

考古学における石材同定は、これまで各時代の利器等としての石器の素材選択の問題として取り扱われてきた。中世においては石器が減少し、代わって信仰的側面の強い石造物が増加し、中世末以降建築物・土木構造物にも利用されていった。

このような中で、富山県内における中世石造物の石材は、高岡・氷見海岸部の石灰質砂岩・凝灰岩類と常願寺川流域に多出する角閃石安山岩の2大石材が主流を占め、その他分布域が狭い地域石材がいくつか把握されていた。また、近世においては新たに、越前笏谷石の搬入、庄川金屋石の出現により、多様化した。特に金屋石は、金沢に多く供給され、辰巳用水の石管に使用されたことは著名である。

2013年富山で開催された日本石造物研究会大会では、この中・近世石造物に用いられる地域石材について分類整理し、石材名称を統一して、今後の石材同定の研究における共通理解を図る試みを行い〔西井ほか2013〕、基礎情報を整理した。

筆者は、近世石造物調査研究において、安山岩や砂岩等多用される地域石材について、石造物研究会の成果以外にも近世には多数の地域石材が存在すること、肉眼観察だけでは判別不可能な石材が存在することが次第に明らかになってきたため、改めて石材を整理分類する必要性を痛感した。本稿では整理分類を行うとともに、その際同定の指標として岩石帶磁率を使用できる可能性について検討することを目的とする。

帶磁率（Magnetic Susceptibility）は、磁化の強さと磁場の強さの比のことであり、磁化率ともいう。岩石では、磁鉄鉱など磁性鉱物の含有の程度により値が変化する。これを岩石の識別や風化・変質の指標として使用できる場合がある。花崗岩などの火山岩では、風化・変質により磁鉄鉱が赤鉄鉱や褐鉄鉱に変化すると帶磁率は小さくなるという磁化特性が認められている。

### (2) 研究史

岩石帶磁率による石材同定については、花崗岩・安山岩について有効性が実証されている。岩石中の強磁性鉱物は、磁鉄鉱（マグнетাইト）に代表される鉄の酸化物、鉄の硫化物、水酸化物などであり、この量比により識別が可能となっている。特に花崗岩においては、帶磁率の違いをもとに磁鉄鉱系列とチタン鉄鉱系列に分けられている〔石原1980、石原2005、石渡ほか2011〕。この違いは花崗岩マグマの生成に関与した物質の性質を反映しているとされる。

花崗岩類の帶磁率計測については、朽津信明らによる石燈籠・鳥居等大型石造物の調査成果が報告されている。松江藩（鳥取）では、18世紀前半以降磁鉄鉱系列からチタン鉄鉱系列に変化し、藩外品使用から藩内産出品使用への転化と推測した〔朽津他2012a〕。また福岡藩においては、藩内産出品は室町期から使用が開始され、寛永期（17世紀前半）藩主奉納石燈籠等一部の特殊な藩外産出品を除き、その使用が継続し、1902年以降藩外品の使用が一般的となったことを示した〔朽津他2012b〕。

石川県金沢城調査研究所では、金沢城石垣の石切丁場である戸室山周辺の戸室石の帶磁率計測を行い、0~10、10~20、 $20\times 10^{-5}$ SIの3区分が可能で、それぞれの分布域に偏りがあることを指摘した〔西田2008〕。

高岡市教育委員会が行った史跡前田利長墓所及び瑞龍寺・八丁道閻連の石造物の調査では、墓所本体をはじめ、敷石・燈籠・手水鉢・墓石等各所に戸室石が多用されている状況が示された〔高岡市教

委 2008]。墓所本体では、上段が赤戸室石、蓮華レリーフのある下段では青戸室石と区別されている〔栗山 2008〕ほか、各所の石造物で赤戸室石・青戸室石が部材別に使用されていること、他の各種石材も意図的に使い分けられていることが示された〔西井 2008〕。帯磁率調査も行われたが、戸室石・坪野石・花崗岩・安山岩の識別に留まつた〔菅頭他 2008〕。

長秋雄は、戸室石と供給先である金沢城石垣の帯磁率測定を行った。その結果、戸室石の帯磁率は、 $(1\sim20) \times 10^{-3}$ SI であること、帯磁率は石の色調と相関し、いわゆる赤戸室石は  $8 \times 10^{-3}$ SI 以下であること、石垣切石では帯磁率の特徴的な頻度分布を認め、青・赤の色調を意識した意匠性の高い石垣としたことが指摘された〔長 2013〕。

中村由克は、長野市善光寺の大型石造物について石材名称のある石材の同定を行い、安山岩(郷路石)と凝灰岩(磐石)の帯磁率計測値が異なり識別可能であることを示した〔中村 2012〕。

これらの研究により、花崗岩・安山岩・凝灰岩の識別に岩石帯磁率が有効である見通しが立ったといえる。

2012 年石造物研究会富山大会において、中・近世石造物の富山県内地石材の名称を整理した。その結果 17 種の石材名称を確認した〔西井・久々・古川 2012〕。本稿ではこれらの名称表現を踏襲して分析する。

### (3) 地域石材の概要

前述のとおり県内全域を対象とした地域石材の抽出数は 17 に及んだが、これは中世期を基準としたものであって、近世期には需要の多様化と数量の増加により、産出箇所が増えた。

本稿で扱う地域石材の範囲は、富山県中央部、地理的には西を庄川右岸、東を早月川までの範囲とした。このほか、この地域に搬入されている上記以外の県内外の地域からの搬入石材も比較対象として記載に含めた。

その結果、表 1 に掲げる地域石材・搬入石材を抽出した。

石材には、大別して、堆積岩・火成岩がある。堆積岩には凝灰岩・砂岩があり、火成岩には安山岩・

表1 地域石材・搬入石材一覧

区分	名称	岩質	原産地・獲得地	原石獲得形態	石造物種類	備考
堆積岩	金屋石	緑色凝灰岩	砺波市庄川町	岩盤採掘	寺社石造物・源水管・井戸枠・石仏・墓石・建築物資材等	石造物研究会○
	笏谷石	緑色凝灰岩	福井県福井市	岩盤採掘	寺社石造物・井戸枠・石仏・墓石・建築物資材等	
	滝ヶ原石	緑色凝灰岩	石川県小松市	岩盤採掘	寺社石造物・建築物資材等	
	猪谷石	中・細粒	神通峠	山中転石・河川転石	寺社石造物・石仏・墓石・石垣等	石造物研究会○
	太田石・岩崎石	石灰質・粗~中粒	高岡市海岸部	岩盤採掘	古墳石室・石仏・墓石・寺社石造物・石塔・城郭石垣等	石造物研究会○
	轟田石	石灰質・細粒	永見市海岸部	岩盤採掘	寺社石造物・石仏・墓石・城郭石垣・石垣等	石造物研究会○
火成岩	立山天狗山石	角閃石安山岩	常願寺川	河川転石	寺社石造物・石仏・墓石・城郭石垣・石垣等	石造物研究会○
	爐谷川石		常願寺川支流 爐谷川	河川転石	石仏等	石造物研究会○
	八川石	安山岩・ディサイト	常願寺川	河川転石	寺社石造物・石仏・墓石・城郭石垣・石垣等	石造物研究会○
	神通川石	安山岩・ディサイト	神通川	河川転石	石塔・石垣等	石造物研究会○
	戸室石	安山岩・ディサイト	戸室山周辺	山中鍛	寺社石造物・石仏・墓石・城郭石垣・石垣等	
	早月石		早月川	河川転石	城郭石垣	石造物研究会○
花崗岩	伏木石		神通峠	山中転石	石垣石材〔神社石垣〕	近代か?

花崗岩がある。片麻岩等変成岩については除外した。

凝灰岩は、富山県内には庄川上流産金屋石（別称庄川金屋石）が産出し、近世に呉西地域において多用された。近年まで切出しが続いている。笏谷石に近似し、金沢城・城下町内でも辰巳用水導水管（樋石）として多量に消費されたという。滝ヶ原石の搬入も一部認められる。

砂岩は、中世以来、高岡水見海岸部に分布する石灰質砂岩が主流で、射水・高岡・氷見から能登方面に分布が濃密である。海岸沿いを中心に県東部にも広く分布しており〔西井他 2012、西井 2015〕、運搬に舟運が利用されたことを示唆する。

安山岩は、常願寺川産のものが主体である。角閃石を多量に含む立山天狗山石は、柔らかく風化しにくい性質から、この地域において最も優良な石材として大量消費され、また中世石造物にもきわめて多く使用されている。原産地である天狗山は常願寺川上流に所在し、常願寺川河川敷において転石状態で大量に獲得が可能である。搬入石材としては金沢城石切丁場である戸室山の戸室石がある。神通川産の神通川石は、斜長石を多く含む。石垣・石積が主な利用形態のため今回は対象外とした。

花崗岩は、県内山岳・山間部に広く分布するとともに、そこから流失して大小の河川敷で転石採取が可能である。地質的には共通した飛騨帯にあることから類似した性質を示すが、河川によりある程度特徴が異なるため、河川の同定が可能となる場合がある。県内では早月川上流が花崗岩産地として知られ、近世期には富山城・高岡城の城郭石垣に多用され、また昭和後期まで小型石垣石材が調達されており、その石切跡も残っている。

なお、富山城石垣及び早月川をはじめとする県東部の河川産花崗岩類の帶磁率計測は、長秋雄が実施中であり、後日報告が行われる予定であるため、本稿では取り扱わないこととした。

#### (4) 帯磁率測定の方法

本稿における岩石帶磁率の測定は、簡易携帯型帶磁率計 WSL-C を使用し、非破壊で行った。計器説明書によれば誤差範囲は±2%以内である。

計測においては、平坦部分を選定して極力 6 点以上を計測し、明らかな異常値と思われるもの及び最大最小値を除外したすべての計測値を有効値として採用した。したがって計測値には幅がある。

帯磁率は、誘導磁化  $J$  と磁場  $H$  の比例関係から、 $J = KH$  [K : 帶磁率 (SI unit)] と表現する。

オーダーは、帶磁率の高い火成岩は、近年における花崗岩帶磁率研究において  $10^{-3}$  SI を統一的に使用しているが、本稿では、磁性鉱物が僅少であり数値の小さな堆積岩も合わせて掲載しており、容易に比較できるようにするために、 $10^{-3}$  SI とした。

これまでの花崗岩等を主体とした先行研究においては、4 点～6 点平均方式をとるが、今回計測では、石造物における石材選択、例えば岩質が緻密な部分を選択的に利用するといった意図により、同一岩内における計測値の偏向性が予測されることから、上記計測方法としたものである。

本稿では、製作年代が判明する近世石造物及び一部原産地における測定を行い、比較を行った。

#### (5) 個別分析結果

##### ① 凝灰岩

###### A 金屋石

庄川中～上流部山塊の金屋石がある。金屋石は近世以降切り出された石材で、現在金屋地内の右岸岸壁に採掘坑口が見える。かつてはこの上流のダム湖内に別の坑口が存在した可能性があるとされる（尾田武雄氏のご教示）。

金屋石は、金沢辰巳用水や越中十二貫野用水の導水管（樋石）に使用されたことはよく知られる。金沢城内や兼六園、尾山神社境内に残る導水管は、庄川金屋から切り出された金屋石とされている。また県西部に分布する凝灰岩製石仏や石塔台座の多くは、この金屋石である。

金屋石は、天保年間（1830～1844）頃より採掘が開始されたと推定されており、当初は金沢城関係の「樋石」、以後建築用材のほか、社寺の狛犬・燈籠等装飾用にも用いられた〔庄川町史編さん委員会編 1975〕。

肉眼観察では、緑色・灰色小ブロックを含み、特に褐色化した鉄分ブロックを点状に含むことが大きな特徴である。

帯磁率計測は、19 件 34 石について行った。県内事例は 17 件 29 石、金沢城関係 2 件 5 石である。

全範囲計測値は、 $10 \sim 85 \times 10^{-6}$ SI であり、約 90% が  $15 \sim 45 \times 10^{-6}$ SI に集中する。このほか一部のみであるが  $55 \sim 75 \times 10^{-6}$ SI がある。極少のサンプルであるため、金屋石以外の可能性も考慮する必要があるが、今のところ金屋石のバラエティと捉えておき、今後の課題としたい。

#### B 筍谷石

福井市足羽山（旧石谷山）周辺から産出するもので、古墳時代以降北陸に広く流通した。なかでも中世において石塔に多用され、近世には加賀地域の建物基壇・石垣石材に多用された〔福井県立博物館編 1989、福井市編 2008〕。



滑川市櫻原神社狛犬  
(文化 2 越前石工)

富山県内においては、寺社石造物として越前石工の刻銘がある狛犬〔酒井 2012〕をはじめ、戦国末の石製狛犬〔福井県立博物館編 1989〕、廟所〔高岡市教委 2008〕等搬入品が存在しており、基準資料となる。今回は県外資料で笏谷石とされるものも含めて計測した。

色調は、緑色を主とするが、他に淡緑色・淡赤色等多様である。肉眼観察では、良質で褐色ブロックを含まない金屋石とは判別し難い。今回原産地での計測は行っていない。

帯磁率計測は、富山・石川に搬入された 16 件 64 石を行った。



庄川右岸金屋石採掘坑口

(左岸側から 矢印は坑口位置)



金沢尾山神社境内展示導水管



滑川市内展示十二貫野用水導水管

石工名刻銘があり、越前から搬入されたことが確実な 2 件 4 石の計測値は、 $680\sim1050\times10^{-5}$ SI である。

県内に分布する搬入品は、12 件 48 石を行った。

全範囲計測値は、 $300\sim1,130\times10^{-5}$ SI であり、うち  $600\sim1,050\times10^{-5}$ SI に分布が集中する。この集中する範囲は、石工名刻銘のある搬入品の計測値と一致する。

このほか、 $300\sim500\times10^{-5}$ SI に複数の計測値が認められる。この計測値は、主たる計測地の石材と共存しているものが多いことから、笏谷石である可能性が高い。しかしながら原産地周辺や他の確実な笏谷石と同定できる資料での計測値の蓄積を行っていないことから、確実ではない。ここでは候補の一つとして把握しておくこととする。

次に、石川県内例として金沢尾山神社境内展示の石管（樋石）と大型寺庭園石垣 2 件 12 石である。

全範囲計測値は、 $620\sim1190\times10^{-5}$ SI であり、上記の計測範囲に一致する。

#### C 滝ヶ原石

石川県小松市滝ヶ原町から産出する石英粗面岩質凝灰岩である。石英粒を少量含む。藩政後期から切り出しが始まったとされ、石切場は滝谷口大滝丁場、西山丁場、本山丁場の 3 か所が確認されている。うち本山丁場は現在も稼働中である。建築や墓石、寺社石造物を多産した。隆盛は昭和 20~30 年代とされる。各石切場における帯磁率測定を行った結果は次のとおりである。

- ・本山石切場（現在稼働中）  $3\times10^{-3}$  SI 、  $6\sim8\times10^{-3}$  SI

滝ヶ原石西山石切場 遠景



肉眼観察では、母材は淡灰色で、暗緑色～暗灰色粒（凝灰岩質）・黒色粒（一部雲母）の混入物を密に含む。

- ・西山石切場（閉鎖）  $0.8\sim1\times10^{-3}$  SI（立入禁止のため周辺礫による計測）

肉眼観察では、母材は淡緑色で、淡緑色～緑色粒（凝灰岩質）・黒色粒を含む。石切場の規模が大きく、大型品を切出している。

- ・大滝石切場（閉鎖）  $1\times10^{-3}$  SI（立入禁止のため周辺礫による計測）

肉眼観察では、母材は淡灰色で、暗緑色～灰色粒（凝灰岩質）の混入物を含む。  
この他、石切場周辺に所在する寺社石造物に異なる値・特徴のものがある。

- ・滝ヶ原八幡社大鳥居（昭和 19 年）  $2\sim2.5\times10^{-3}$  SI

肉眼観察では、母材は、淡灰色を主とし、黄色～淡桃色に縞状に変化する。緑色・灰色・灰色・淡桃色・淡紫色粒を多く含む。

以上の計測の結果、周知の滝ヶ原石石切場 3 か所の帯磁率は、 $0.8\sim1\times10^{-3}$  SI と  $6\sim8\times10^{-3}$  SI の範囲に分布する。後者では  $3\times10^{-3}$  SI もわずかに含まれたことから、岩脈等により複数のデータの存在が推定される。また、石切場周囲の石造物には、計測値・肉眼観察の特徴が合致しない  $2\sim2.5\times10^{-3}$  SI のものがある。これはいずれかの石切場における別岩脈、あるいは未確認の石切場の石材の可能性がある。

よって滝ヶ原石の帶磁率は、全範囲計測値は、 $0.8 \sim 8 \times 10^{-6}$  SIであり、うち $0.8 \sim 1 \times 10^{-3}$  SI、 $2 \sim 3 \times 10^{-3}$  SI、 $6 \sim 8 \times 10^{-3}$  SIに分布が集中する。

## ②砂岩

### A 猪谷石

神通川上流の神通峡において山中礫として産出する細～中粒砂岩で、2012年に初めて猪谷石と命名した。石材の粒状は均質ではなく、細粒をベースとし、中粒の塊が部分的に嵌入している。石造物の多くは細粒部を使用している。大型品の場合中粒部分が認められるものが多い。富山市猪谷から飛驒市横山一帯に山中礫として存在する。また、神通川中流域においても河川礫として比較的大型の石材が獲得可能である。本石材の分布範囲は、神通峡沿いの地域を主体とし、その下流の神通川扇状地においては、富山城下町周辺以南に散在する。

中世から多層塔・板碑で使用が始まり、近世では石仏・石碑を主に製作する。原産地においては、燈籠・狛犬・社標・手水鉢等寺石造物のほか、石垣・階段に多用されることが大きな特徴である。

帶磁率計測は、産地近傍地 17 件 25 石、周辺地 15 件 19 石の計 32 件 44 石を行った。

帶磁率の全範囲計測値は、 $4 \sim 35 \times 10^{-5}$  SIであり、うち $5 \sim 20 \times 10^{-5}$  SIに分布が最も集中する。

分布域をみると（図 1）、産地である神通川上流神通峡に集中し、下流側においては、神通川から 3km 以内の直近に分布し、原産地から 7 里下流まで及ぶ。これは河口から約 7km 上流である。また、少數であるが、西方向に 11km の下条川流域、東方向に 18km の上市大岩山までも及んでいる。

### B 立山芦嶺寺～白岩・上市川上流域の砂岩

細粒～中粒の岩質である。風化度はやや小さい。黄色味が強い。宝篋印塔・石仏・墓石に使用された。



神通峡の山中礫

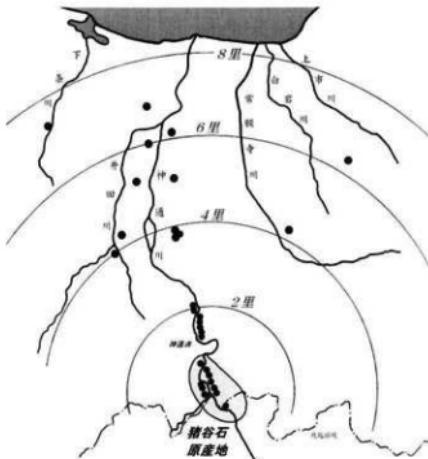


図 1 猪谷石の分布域

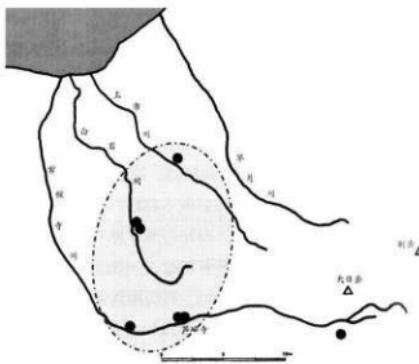


図 2 立山・上市の砂岩分布

帯磁率計測は、5件8石を行った。帯磁率の全範囲計測値は、 $2 \sim 10 \times 10^{-5}$ SIであり、うち $4 \sim 20 \times 10^{-5}$ SIに集中する。

分布範囲は、南北15km、東西8kmである(図2)。立山参詣道に所在する大日岳付近の三十三ヶ所観音石仮は、下から運び上げられたものである。

#### C 庄川流域の砂岩

細粒～中粒の岩質で、灰色～緑色を呈する。やや軟質であり、風化により小さい剥離及び粒状化する。寺社石造物・石仏・石碑塔に使用された。特に狛犬が多い。

帯磁率計測は、28件64石を行った。

帯磁率の全範囲計測値は、 $7 \sim 1,800 \times 10^{-5}$ SIと広い。このうち $10 \sim 45 \times 10^{-5}$ SIに最も集中し、約8割に及ぶ。

このほか、 $175 \sim 260 \times 10^{-5}$ SI(2件4石)と $1,100 \sim 1,700 \times 10^{-5}$ SI(4件8石)の2つの範囲に計測値がある。よって、この一括した砂岩原産地は3か所に分かれる可能性がある。

$10 \sim 45 \times 10^{-5}$ SIの範囲とそれより高い数値を示す石材の分布を示したものが図3である。

$10 \sim 45 \times 10^{-5}$ の分布は、庄川上流左岸から神通川下流右岸まで、神通川河口富山湾岸から八尾町まで、東西22km南北22kmの範囲である。高い数値を示すものは、前者の範囲の中に散漫に分布し、海岸部にやや集中することと、庄川右岸～神通川左岸に留まることが異なっている。

以上を踏まえると、庄川上～中流から神通川下流にかけて分布するこの一群は、このエリアの近傍地にある複数の砂岩原産地唐の供給を受けていると思われる。その最有力候補地は、庄川右岸上流地域である。この地域は、緑色凝灰岩金屋石の原産地でもあり、最も多い $10 \sim 45 \times 10^{-5}$ SIの計測値は、金屋石の計測値とほぼ一致する。砂岩としたものには緑色のものが

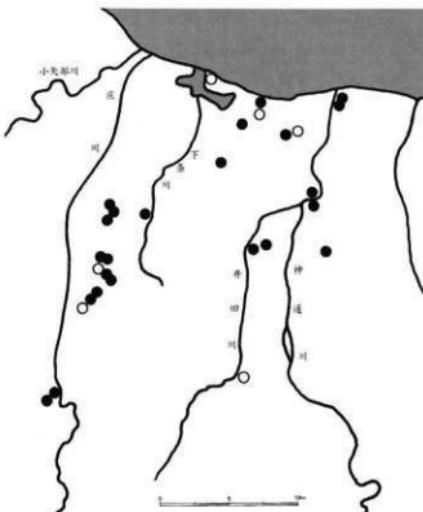


図3 庄川流域における砂岩分布

凡例: ●  $10 \sim 45 \times 10^{-5}$ SI

○  $175 \times 10^{-5}$ SIより高いもの



庄川流域砂岩における風化状況(剥落・粒状化)

(砺波市千光寺入口三十三ヶ所観音第三十三番)

あることから、金屋石産地の隣接地あるいは金屋石の岩脈中に層として貫入している可能性も想定しておきたい。

#### D 太田石・岩崎石

高岡・氷見海岸部に所在する粗粒砂岩で、主要産地が高岡市太田に所在するためこの名がある。太田の東にある伏木台地岩崎地区にも同種砂岩が産出し、岩崎石とも呼ばれる。この砂岩は縞状堆積による表情を示し、また海浜部に岩塊で所在するため、穿孔貝による孔の存在が顕著である。最大の特徴は石灰成分を含むことであり、酸により発泡現象を生じる。中世においては、富山西部地域を中心に、石仏・板碑・五輪塔・宝篋印塔の石材として多く使用された。近世においては、富山城・高岡城の石垣石材として使用されたほか、引続き石仏・墓石等に使用された。中・近世におけるおおよその分布範囲として図4が示されている〔西井ほか2012〕。

帯磁率計測は、原産地の一つである高岡市太田の雨晴岩周辺13地点、及び石造物6件11石の計7件24石を行った。

原産地における全範囲計測値は $15\sim42\times10^{-5}$ SI、石造物においては、原産地付近のもの $15\sim18\times10^{-5}$ SI、それ以外のもの $29\sim65\times10^{-5}$ SIであり、原産地の計測値と若干のずれがある。これは原産地が複数地点にわたるため、未検出の計測値が存在するか、風化等外的要因によるデータ変化のためと考えられる。なお、原産地における計測値では、粗粒のものは $15\sim35\times10^{-5}$ SI、中粒のものは $35\sim45\times10^{-5}$ SIと異なる傾向にある。

以上から、太田石・岩崎石の計測値は、 $15\sim60\times10^{-5}$ SIと捉えておく。

#### E 蔡田石

高岡・氷見海岸部に所在する細粒砂岩で、シルト岩とも呼ばれる。太田石・岩崎石同様石灰質であり、石材利用も同傾向を示す。

今回帶磁率計測は行っていない。

#### ③安山岩



高岡市雨晴岩石切丁場

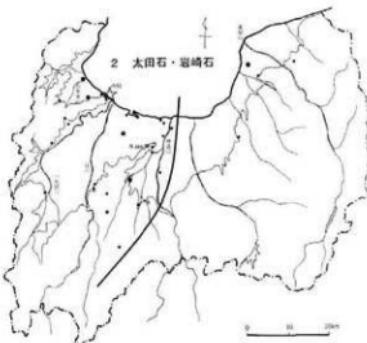


図4 太田石・岩崎石の分布（中世～近世初）



図5 蔡田石の分布（中世～近世初）

〔西井ほか2012〕より引用

### A 立山天狗山石

常願寺川上流産で、常願寺川河川敷において玉石形状の転石で獲得できる。角閃石を多量に含む特徴を持ち、青灰色、灰色、紫色～淡赤色を呈する。

帶磁率計測は、40 件 128 石を行った。

全範囲計測値は、 $650\sim3,970\times10^{-5}$ SI である。このうち値の低いのは 1 石のみであり、汚濁のため後述する赤色系安山岩石材の可能性がある、これを除去した場合、全範囲計測値は、 $1,470\sim3,970\times10^{-5}$ SI である。

このうち  $2,000\sim3,500\times10^{-5}$ SI に分布が最も集中し、93.7%を占める。次にその前後  $200\times10^{-5}$ SI の範囲では 97.6% である。

### B 八川石

八川石の定義は明確ではないが、本稿では、肉眼でも明瞭に判別できる角閃石の多い立山天狗山石を除く全ての常願寺川産安山岩とする。これには少量の角閃石を含むもの、斜長石を多く含むもの、混入物が少ないもの等多様である。この種の安山岩は、少量であるが神通川河川敷においても獲得可能であり、常願寺川産に限らず他の河川敷で獲得できる安山岩も含めて検討することとする。なお今回は、常願寺川・神通川河川の調査を行った結果を示す。色調は立山天狗山石と同じ青灰色、灰色、紫色～淡赤色を呈する。

帶磁率計測は、石造物 30 件 125 石、原産地 2 件 19 石について行った。

石造物における全範囲計測値は、 $1,180\sim4,430\times10^{-5}$ SI である。

原産地は、安山岩が多い常願寺川と、少量の神通川について行った。

常願寺川における全範囲計測値は、 $2,580\sim4,420\times10^{-5}$ SI、神通川における全範囲計測値は、 $1,220\sim2,350\times10^{-5}$ SI で、明瞭に分かれる。ただし両方とも計測数が少ないため、産出する安山岩全体の値を示すとは限らないものの、計測結果によれば、石造物の全体は、常願寺川と神通川でほぼすべての値をカバーしていることになる。

石造物においては、 $2,100\sim4,100\times10^{-5}$ SI に分布が最も集中し、93.6%を占める。次にその前後  $200\times10^{-5}$ SI の範囲では 98.4% である。低い方では  $1,500\sim1,600\times10^{-5}$ SI にも若干の集中があり、これを含めると 99.2% である。

なお、立山天狗山石・八川石ともに赤色系石材については別途後述する。

### C 嬦谷川石

常願寺川上流の立山町芦嶺寺地内を流れる支流媼谷川から産出する。混入物をほとんど含まない灰色安山岩である。

帶磁率計測は、2 件 2 石について行った。

全範囲計測値は、 $1,680\sim2,880\times10^{-5}$ SI で、重複はない。計測値が少ないため、評価不能であるが、産地である媼谷川が常願寺川支流であることを裏付けるように、類似する八川石の計測範囲に含まれている。



常願寺川河川敷の安山岩転石状況

#### D 赤色系安山岩（立山天狗山石・八川石）

立山天狗山石・八川石においては、青～灰色系の石材と、赤色系の石材で、計測値が異なる。これは、戸室石においてすでに報告されているように、青戸室石と赤戸室石という色彩による区別が、帯磁率においても異なる値を示すこと〔長 2013〕と共に通しているといえる。

赤色系石材（赤石）は、石造物 13 件 28 石について行った。

全範囲計測値は、 $250\sim2,990\times10^{-6}$ SI であるが、分布範囲は 2 つがある。 $250\sim1,880\times10^{-6}$ SI は主たる範囲で、次に  $2,680\sim2,990\times10^{-6}$ SI にわずかに認められる。

このうち  $250\sim1,880\times10^{-6}$ SI の範囲では、 $500\sim1,400\times10^{-6}$ SI に最も分布が集中し、その前後  $150\times10^{-6}$ SI の範囲に及ぶ。 $2,680\sim2,990\times10^{-6}$ SI の範囲では、 $2,700\sim2,900\times10^{-6}$ SI 範囲が重複する。

青・灰色系石材（青石）のである立山天狗山石・八川石の集中範囲は  $2,000\sim3,500\times10^{-6}$ SI、 $2,100\sim4,100\times10^{-6}$ SI であり、これと比較すると赤石の  $500\sim1,400\times10^{-6}$ SI は明らかに小さい値を示す。

いずれも計測数が少ないため、今後データ蓄積が必要である。

#### E 戸室石

すでに報告〔西田 2008、長 2013〕があるが、別に金沢城内（石垣及び解体石材展示場）・兼六園・尾山神社境内等各所の戸室石石材の帯磁率計測を行ったので提示する。

青灰色の青戸室石、赤色の赤戸室石がある。

帯磁率計測は、青戸室石 10 石、赤戸室石 10 石の計 20 石を行った。

青戸室石計測値は、 $1,500\sim2,900\times10^{-6}$ SI、赤戸室石計測値は、 $200\sim1,150\times10^{-6}$ SI であった。またこの中間値を示す石材も存在したが、これは赤・青両方の色調が 1 石内で見られるもの、色が混ざる中間色を示すものなど層境界の石材が示す値と理解する。

長秋雄氏による金沢城石垣計測結果によれば、概略的に、青戸室石は  $1,200\times10^{-6}$ SI 以上、赤戸室石は  $800\times10^{-6}$ SI 以下とされた〔長 2013〕。この結果と今回計測結果とは概ね符号する。

一方、西田郁乃氏による戸室石切丁場における帯磁率計測結果によれば、赤戸室石においても  $800\times10^{-6}$ SI を大幅に超え青戸室石領域とほぼ一致する結果が示されており〔西田 2008〕、今回計測結果とは整合しない。

#### ④花崗岩

##### A 早月石

魚津市上市町境を流れる早月川上流部に石切場がある。大型石造物は岩塊から切り出された可能性があるが、現在確認できるのは、旧河川敷に存在する巨大な転石からの割取りを行った矢穴痕跡である。なおこの矢穴は小型で明治以降のものである。1970 年大阪万博時にもここから石垣石材が搬出されたと伝えており、昭和後期まで機能していたとみられる。

富山城石垣石材のうち鏡石と呼ばれる巨石の一部や、石垣石材のうち花崗岩のほとんどはこの石材とみられている〔富山市教委 2007、古川 2011a〕。慶長 10 (1605) 年加賀藩 2 代藩主前田利長が隠居城として富山城を築城したとき、近江坂本出身の穴生又助が穴生役として石垣築造を担当したとみられる。このとき約 20km 離れた早月川河川敷の河川礫を現地で割り、城まで運んだとみられる。

また、慶長 14 年に築城された高岡城石垣石材にも使用されていることが報告されている〔高岡市教委 2013〕。

帶磁率計測は、現在長氏により行われており、近日中に成果が提示される予定である。これ待つて論じたい。

ここでは、長氏が行っていない石垣石材及び踏み石等一部の調査成果を報告し、後日の成果に反映できるようにしておきたい。

富山城本丸内構形虎口に存在する鉄門石垣通路面には、5石の巨石が組み込まれている。このうち、過去に解体修理を行った西面の縦長の1石は、 $880 \times 960 \times 10^{-5}$ SI、その対面にある同一石材と思われる1石も $790 \times 960 \times 10^{-5}$ SIを示し、同一石材であることを裏付ける。この値は、概ね早月川の中粒・粗粒花崗の最多集団に含まれる。

また、刻印が発見された方形巨石1石は、鉄分の溶出したいわゆるサビ御影の状況を示す粗粒花崗岩で、計測値は $250 \sim 370 \times 10^{-5}$ SIと小さい。この値は早月川ではまだ未見であり、かつ県内河川においても同定可能な計測値は検出していない。この石材は、前田利長が富山城を築城した慶長10年

(1605)に調達されたと理解できるものであり、加賀・能登・越中三か国領内全城から築城資材が調達されたことが判明している〔古川2014d〕。このため、石川・富山全城を調達候補地として産地同定を試みる必要があるほか、その他の地域からの搬入についても考慮する必要がある。

この花崗岩搬入については、以下の事例も検討を要する。

本丸御殿跡付近から出土した踏み石と推定される自然石細粒花崗岩は、 $20 \sim 24 \times 10^{-5}$ SIと極端に小さい。また詳細は後に委ねるが、富山藩主前田家墓所長岡御廟所の8代藩主前田利謙墓の墓石もこれと近似値を示す。この数値はチタン鉄鉱系と磁鉄鉱系の境界とされる $100 \times 10^{-5}$ SIよりも明らかに小さく、チタン鉄鉱系花崗岩と理解される。研究史でも述べたように、北陸地域は磁鉄鉱系花崗岩の産出地域とされるが、神通川上流域では $100 \times 10^{-5}$ SI以下の花崗岩の存在も報告されており〔石原2005〕、西日本等藩外他地域からの搬入品と即断できない状況と理解される。

なお、神通川上流地域における山塊露出花崗岩の帶磁率については、計測値として、右岸吉野地域 $330 \sim 670 \times 10^{-5}$ SI等の計測値が得られており、 $100 \times 10^{-5}$ SI以下の花崗岩は現在のところ未見である。

このように、富山城内あるいは富山城石垣における花崗岩は多様性をもつ。今後における資料の蓄積により、更なる理解を深めたい。

## (6) 岩石帶磁率測定結果の総括

以上の情報について整理したものが表2である。

表2 石材別帶磁率分布

区分	石材名	色調区分等	産地	帶磁率( $\times 10^{-5}$ SI unit)			計測資料
堆積岩	凝灰岩 金屋石	鉛・鉄分溶出 緑～白	庄川上流 庄川上流	15-45	45-51	70-85	鉄析出あり
	荔谷石	緑	越前産	300-600	600-1050	1050-1190	岩崎寺鉢大等
	滝ヶ原石	緑・白・赤	小笠山滝ヶ原	80-100	200-250	300	600-800 右切場・製作品
	猪谷石		神通川上流	5-20	20-35		神通川辺石臼・石塔・石碑
	不明砂岩	中・細粒砂岩	常願寺川一上市川 周辺	4-10			芦崎寺・大岩・白岩
	不明砂岩	中・細粒砂岩	庄川右岸周辺	10-45	175-260	1100-1700	
火成岩	太田石	石灰質	高岡氷見海岸部	15-60			富山城石垣
	立山天狗山石	青・赤	常願寺川上流	1800-2000	2000-3500	3500-3700	富山城石垣・石仏
	八川石	青	常願寺川上流	1900-2100	2100-4100	4100-4300	石仏
	嬉谷川石	赤	常願寺川上流 嬉谷川	250-1880	2800-2990		燈籠等
	戸室石	赤	金沢戸室山	200-1150			金沢城石垣
		青	金沢戸室山	1500-2900			金沢城石垣・石切丁場
花崗岩	早月石	粗粒・斑状 粗粒・斑状	早月川上流(ほか) 早月川上流(ほか)	460-600 790-960	600-1000	1000-2200	富山城新築石垣
	不明産地	サビ御影	不明	250-370			富山城鏡石(解体)
	不明産地	細粒	不明	20-24			富山城踏み石(出土品)等

帯磁率の数字欄は、計測値である。網掛け部分は主たる範囲を示し、太字は最も多い計測値を示す。

詳細は前項で説明したとおりである。

#### (7) 帯磁率による原産地同定の成果と課題

前項までにおける計測結果に基づき、判明した成果と課題について検討する。

##### ① 凝灰岩

広く緑色凝灰岩（グリーンタフ）に含まれる金屋石・笏谷石・滻ヶ原石は、肉眼観察では類似しており識別が困難なものがあるが、識別できるメルクマールもある。金屋石は、褐色化した大きなブロックを含むが、その他は含まない。滻ヶ原石は緑色塊を含まないものが多い。一方、金屋石には褐色ブロックを含まない別の種類のものが存在し、笏谷石と肉眼で識別ができないものがある。これはおそらく採掘場所の違いによるものと推定される。しかしながら、金屋石の採掘地の詳細はまだ不明であり、今後の产地調査の進展が期待されるところである。

今回調査により、金屋石と笏谷石は、帯磁率の違いが明確となり、肉眼では識別困難な場合、帯磁率による同定が可能となった意義は大きい。

一連の調査において、金屋石の本拠地である砺波市庄川町金屋地区の社寺石造物の一部には、金屋石と異なる数値を示す金屋石類似凝灰岩の存在がいくつか認められた。石材産地において、競合する他地域の同質石材の搬入・使用は通常考え難いことから、当初これらは金屋石におけるパラエティと理解すべきとしていたが、数値レベル及び笏谷石との肉眼的類似性からみて、笏谷石と同定すべき殿結論に達した。ただし、石材は笏谷石としても、その製作石工が越前石工か金屋石工であるかの判定は未決であり、今後の課題としたい。

金屋石の用途については、県西部の石仏石材あるいは塔基壇としての利用が多いほか、建築材（基礎・敷石等）・井戸側（図6）〔富山市教委ほか編 2014〕等の製品も製作され、県東部にも搬入されていることが明らかになった。

前述のように、金沢城・兼六園等における辰巳用水等に用いられた導水管（樋石）として、金屋石が使用されたとするのがこれまでの理解であったが、金沢尾山神社境内に所在する導水管のうち3点

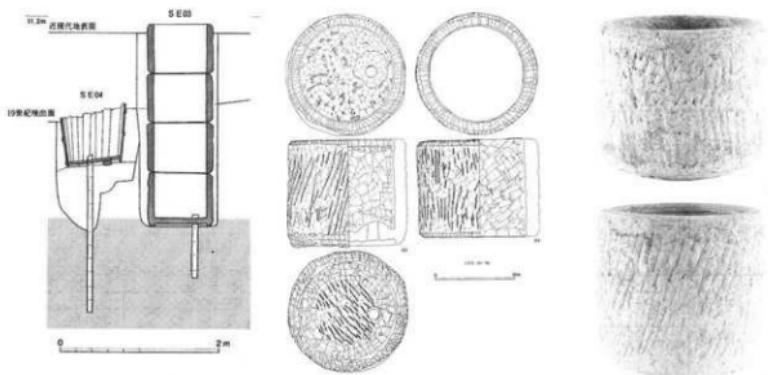


図6 富山城下町主要部から出土した金屋石製井戸側〔富山市教委ほか 2014〕



砺波市千光寺入口三十三ヶ所観音の各種石材  
(左から、笏谷石、片麻岩、庄川周辺砂岩、金屋石)

は、計測値からみて笏谷石である。よって金沢で用いられた導水管は、金屋石と笏谷石の両方が使用されたことがわかる。それらの供給状況や石材の違いによる製作技術の差なども、今後検討していく必要がある。

金屋石としたもののうち、鉄分を含まない少數の例では、風化・破壊において、細かい砂粒あるいは小破片の剥離が生じているものが見受けられる。同様な風化等は滝ヶ原石においても顕著に認められ、笏谷石でも加賀市大聖寺長流亭石垣でも同様である。この砂岩質の石材は、金屋石が著しく劣化したものと理解していたが、明らかにマトリックスは砂岩粒であり、凝灰岩である金屋石と区別するため庄川流域砂岩と呼称したものである。岩質は異なるものの、帶磁率計測値は金屋石とほぼ同じである。よって、先に述べたように、両石材は同一地域を産地とするとの仮説を提起したものであるが、この砂岩を今後金屋石に含めるかどうか、検討を要する。

笏谷石は、搬入石材としてかなり富山県内にも入っている。金屋石と極めて近い石材であるが、これまで県内における笏谷石と金屋石の利用形態の区分はあまり明確でなく、金屋石は県西部の石仏石材・、塔基壇・狛犬としての利用が主体、笏谷石は燈籠等に用いたなど、漠然としていた。

今回調査により、前述のように、金沢で用いられた導水管は金屋石と理解されていたが、笏谷石も使用されていたことが判明した。

笏谷石の新たな使用例として以下を確認した。富山藩主前田家墓所長岡御廟所の各藩主墓において、加賀藩同様地上部を墳墓型式としたうち、墳墓周囲の墳端を笏谷石板石で縁取し、接合に鉛製チキリを使用していた。また、各墳墓前面の拝所は笏谷石板石敷である。藩主墓における頻度の高い使用状況が判明した。

一方、年代と石材について近年議論になっているものがある。立山町岩崎寺雄山神社前立社壇の凝灰岩製狛犬は、元和年間（1615～1624）前田利長正室の玉泉院（永姫）が寄進したと伝承されるもので、町指定文化財になっている。この狛犬の年代を、石材形状や様式から江戸初期ではなく幕末頃とする説や、石材は金屋石・笏谷石・滝ヶ原石とする諸説がある。帶磁率計測値は $10\sim15\times10^{-6}$ SIであり、金屋石に同定される。笏谷石・滝ヶ原石の帶磁率とは異なる。ただし、滝ヶ原石と同定可能な石川県内の狛犬にこの計測値と一致するものがあることから注<sup>1</sup>、未検出の滝ヶ原石採掘地が存在するの

か、あるいは金屋石が搬入され製作されたのか、いずれとも判断しがたい。計測値のレンジからみると、後者の可能性が高いと考えられるため、雄山神社狛犬の石材は金屋石と判断しておくのが妥当とみられる。今後狛犬様式の検討や、滝ヶ原周辺の帯磁率計測の充実により解明していく課題の一例として提示しておきたい。

## ②砂岩

今回調査において、萩田石・太田石など氷見・高岡海岸部に所在する石灰質のものを除き、普遍的に存在する砂岩石材が、複数の領域に分けられることが明らかになった。

第一は、庄川流域砂岩としたもので、凝灰岩の金屋石と同一地域の産地が推定される一群である。詳細は前項で述べたとおりである。分布範囲はかなり広域にわたり、庄川より東の神通川河口一帯にも分布領域を認定するに至っている。しかし、これが庄川流域砂岩と認定できるか、あるいは同一数値を示す別産地の一群と認定すべきかについての有効な判断材料は、今回得られていない。今後さらに検討を行う必要がある。

第二に、常願寺川上流域から上市川中流域にかけて、現地産出と推定される砂岩を使用する領域の設定が明らかになった。この領域は猪谷石分布領域と重複しているが、この地域への猪谷石の搬入はごく少数であることから、特殊な背景が想定されうる。よってこの領域では現地砂岩が凌駕していると理解すべきであろう。これらの扱い手はこの地域の石工と推定され、大きな原石移動は生じていない。なお、猪谷石領域においては、産地周辺における集落の廃絶に伴う墓石等の移動が近代に発生しており、分布域を検証する上で留意が必要な事例が見受けられる。

## ③安山岩

立山天狗山石は、肉眼で容易に識別できるため、帯磁率による同定を要しない。

戸室石では、「青」と「赤」の色彩的識別が意図的になされており、それによる意図的な色彩効果を狙った部位別利用が行われていたことはすでに指摘がなされており〔栗山 2008、長 2013〕、青戸室石と赤戸室石では帯磁率が異なり、後者の数値が低い。

このような色彩による部材選別は、本地域の安山岩においても行われており、帯磁率計測値の傾向も戸室石と同じである。

立山町芦崎寺閻魔堂の文政 2 年 (1819) 阿弥陀三尊石仏では、3 体の蓮台・左右両尊の基礎・本尊の基壇に赤色の安山岩が用いられており、シンメトリー性も考慮している。また上市町大岩日石寺の文政 4 年宝篋印塔では、饅頭形と階段状基壇に使用



金沢尾山神社門にみる戸室石の視覚効果

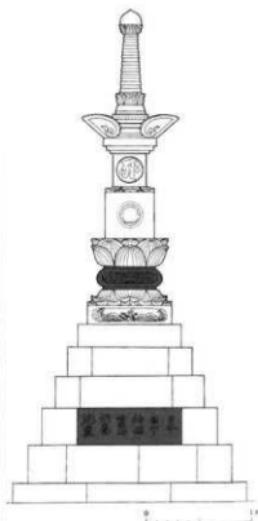


図 7 大岩日石寺宝篋印塔にみる赤石使用箇所 (網点)

されている切石のうち刻銘された石材のみ赤色の安山岩が用いられており（図7）、全体に占める赤色の割合は10%である例〔富山市教委2013〕等が認められる。

このような視覚効果が、いつから、どのような過程において採用されていったか、今後における研究課題として提起しておく。

#### （8）おわりに

近世における石造物製作は、河川転石や岩塊あるいは山中点在の巨石から割り取って石材を獲得し加工する在郷石工と、近傍地から石材を買い取って加工する町石工が存在した。

特に前者においては、石材獲得の利便性に基づき、工房は石材産地からほど近い集落に構えるものが多くた。このような石材産地ごとに共通した様式による石造物製作が行われ、これを一つの石工集団として捉えることが可能である。

最も有力な県東部在郷石工として、常願寺川石工があり、ほかに神通川石工、上市石工などがある。ただし、それは主体的石材に大きく制約される一方で、多種類の在地石材・搬入石材も同時並行して使用している。

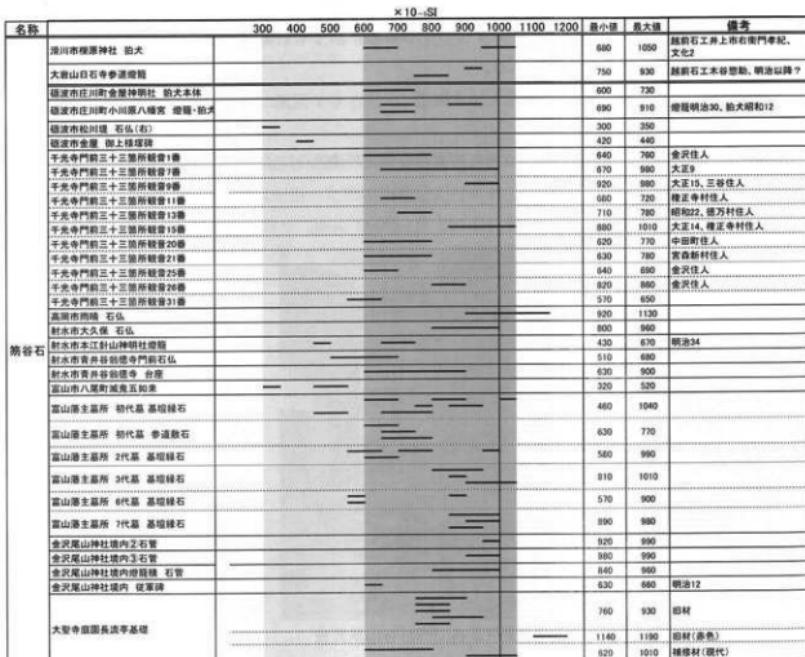
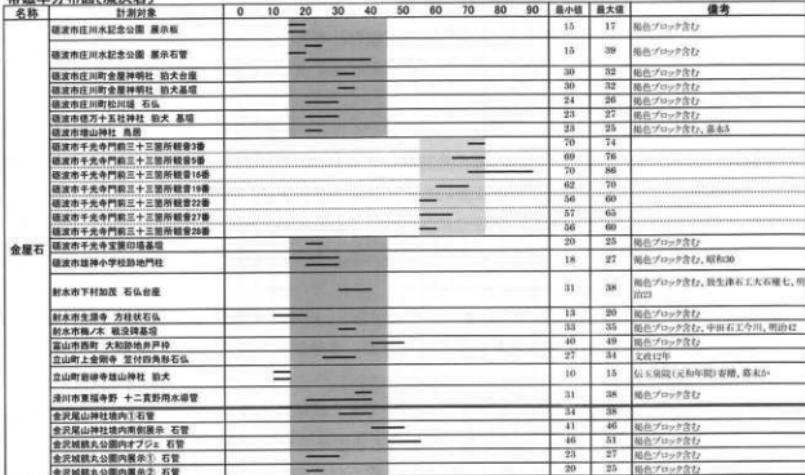
近世に最も発展した県西部庄川金屋の石工においても、質の良い笏谷石を搬入している状況が判明しつつある。

今回報告における岩石帶磁率測定の有効性は、一部石材においては有効であることが明らかになったといえるが、解明すべき課題も多く浮上した。今後資料を蓄積する中で、石造物製作の実態を解明する手がかりとして分析を進める一方で、石工自体の系譜や石材流通のあり方等からもアプローチが必要であることが認識されたといえる。

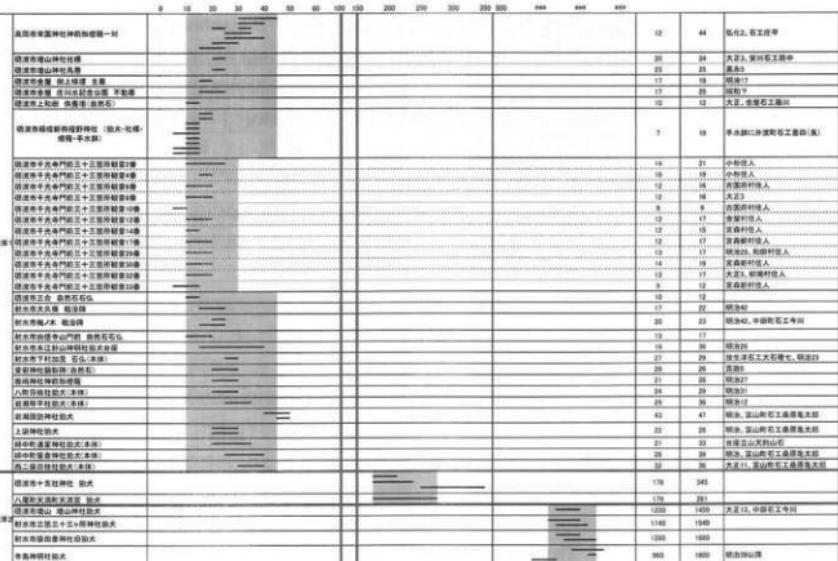
#### 注

1 富山県〔立山博物館〕加藤基樹氏、立山町教育委員会間野達氏による石川県内狛犬現地調査成果についてご教示をいただいた。

希磁率分布図(凝灰岩)



帶概率分布圖 [發送]



## 参考文献

- 石川県金沢城調査研究所編 2008 『金沢城史料叢書9 戸室石切丁場確認調査報告書I』
- 石川県金沢城調査研究所編 2013 『金沢城史料叢書18 戸室石切丁場確認調査報告書II』
- 石原舜三 1980 「花崗岩と流紋岩」『岩波講座 地球科学』15 日本の地質
- 石原舜三 2005 「中部地方,飛騨帶花崗岩類の起源物質の多様性」『地質調査研究報告』第56卷第3・4号
- 石原与作 1963 『大山史話』大山町役場
- 石渡明・佐藤勇輝・久保田将・濱木健成 2011 「磁鐵鉄系・チタン鉄鉄系花崗岩の帶磁率の境界値:鬼首カルデラ周辺の例」『日本地質学会News』第44卷第11号 日本地質学会
- 井上謙夫校訂 1974 『日本海文化叢書第1巻 加越能寺社由来 上巻』石川県立図書館協会
- 岩崎照榮 2002 『福岡町の中世・近世の文化』
- 太田郷土史編纂委員会編 1987 『太田郷土史』
- 大山町史編纂委員会編 1964 『大山町史』
- 岡崎謙治監修 1982 『仏具大事典』鎌倉新書
- 翁 久允 1939 「金剛家と中條流」『高志人』第4巻第8号 高志人社
- 金森久一 1937 「文殊寺山見学」『高志人』第2巻第1号 古志人社
- 上市町誌編纂委員会編 1970 『上市町誌』上市町
- 上市町教育委員会 2005 『富山県上市町黒川遺跡群発掘調査報告書』
- 菅頭明日香・酒井英男・泉吉紀・栗山雅夫 2008 「石造文化財の磁化特性による研究—前田利長墓所内石造物の帶磁率測定」『高岡市前田利長墓所調査報告』高岡市教育委員会
- 京田良志 1970 『石燈籠新入門』誠文堂新光社
- 楠瀬 勝監修 1986 『下村史』下村役場
- 朽津信明・西尾克己・稻田 信 2012a 「松江藩で利用された花崗岩類」『松江歴史館研究紀要』第2号
- 朽津信明・三木隆行・山村信榮 2012b 「福岡藩で利用された花崗岩類石材の帶磁率について」『日本文化財科学会第29回大会 研究発表要旨集』
- 栗山雅夫 2008 「前田利長「御廟」の構造について」『高岡市前田利長墓所調査報告』高岡市教育委員会
- 五百石区域小学校長会郷土史研究部編 1935 『五百石地方郷土史要』
- 坂井誠一・五十嵐精一・瀬川安信編 1956 『最勝寺誌』最勝寺文化財保存会
- 酒井靖春 2012 「富山県にある福井石工の狛犬」『北陸石仏の会々報』第41号 北陸石仏の会
- 庄川町史編さん委員会編 1975 『庄川町史 下巻』
- 石造物研究会編 2012 『北陸の石造物—研究の現状と課題—』
- 高岡市教育委員会編 2008 『高岡市前田利長墓所調査報告』
- 高瀬重雄監修 1994 『日本歴史地名大系第16巻 富山県の地名』平凡社
- 高瀬 保編 1987 『富山藩侍帳 越中資料集成1』桂書房
- 長 秋雄 2013 「戸室石の帶磁率測定」『金沢城史料叢書18 戸室石切丁場確認調査報告書II』石川県金沢城調査研究所
- とやま歴史的環境づくり研究会編 1998 『鯉川館跡調査報告書』
- 富山県編 1982 『富山県史 通史編 近世上』
- 富山県立山博物館編 1993 『立山中宮寺跡石造物分布調査報告書』
- 富山市史編さん委員会編 1987 『富山市史 通史〈下巻〉』富山市

- 富山市教育委員会編 2007 『富山城跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会埋蔵文化財センター編 2012 『富山市内石造物等調査報告書』
- 富山市教育委員会埋蔵文化財センター編 2013 『富山市内石造物等調査報告書Ⅱ』
- 富山市教育委員会埋蔵文化財センター編 2014 『富山市内石造物等調査報告書Ⅲ』
- 富山市教育委員会・西町南地区市街地再開発組合編 2014 『富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書』
- 富山市郷土博物館編 2005 『富山市郷土博物館常設展示図録 富山城ものがたり』
- 中村由克 2012 「長野市善光寺にみられる石材」『地学团体研究会第66回総会(長野)講演要旨集』
- 西井龍儀 2008 「前田利長墓所及び関連石造物の特徴」『高岡市前田利長墓所調査報告』高岡市教育委員会
- 西井龍儀 2015 「富山市中世石造物の石材利用」『富山市考古資料館紀要』第34号 富山市考古資料館
- 西井龍儀・久々忠義・古川知明 2012 「越中における中・近世地域石材」『北陸の石造物—研究の現状と課題ー』石造物研究会
- 西田都乃 2008 「戸室石帶磁率調査報告」『金沢城史料叢書9 戸室石切丁場確認調査報告書Ⅰ』石川県金沢城調査研究所
- 平井一雄 2003 「富山市越川最勝寺境内の石造物」『北陸石仏の会研究紀要』第6号
- 広瀬良弘 1988 『禪宗地方展開史の研究』吉川弘文館
- 福井県立博物館編 1989 『石をめぐる歴史と文化—笏谷石とその周辺—』
- 福井市編 2008 『福井市史 通史編2 近世』
- 古川知明 2011a 「富山城本丸石垣における鏡石について」『大境』第29号 富山考古学会
- 古川知明 2011b 「常願寺川石工甚右衛門について」『富山史壇』第164号 越中史壇会
- 古川知明 2011c 「神通川石工とその周辺—近世石工と在地石材ー」『大境』第30号 富山考古学会
- 古川知明 2011d 「常願寺川石工製作石仏研究の課題と展望」『北陸石仏の会研究紀要』10
- 古川知明 2012a 「近世富山町石工について」『富山市の遺跡物語』第13号 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
- 古川知明 2012b 「富山県東部における近世石造物研究—主に石工研究からー」『北陸の石造物—研究の現状と課題ー』石造物研究会
- 古川知明 2012c 「常願寺川石工牧喜右衛門について」『富山市考古資料館紀要』第31号
- 古川知明 2012d 「常願寺川石工中嶋栄藏について」『富山史壇』第168号 越中史壇会
- 古川知明 2013a 「富山町石工佐伯伝右衛門について」『富山市の遺跡物語』第14号 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
- 古川知明 2013b 「常願寺川石工北野甚蔵について」『大境』第32号 富山考古学会
- 古川知明 2014a 「富山町石工見上兵右衛門について」『富山市内石造物等調査報告書Ⅲ』富山市教育委員会埋蔵文化財センター
- 古川知明 2014b 「神通川石工石屋浅吉について」『富山史壇』第174号 越中史壇会
- 古川知明 2014c 「常願寺川石工親成について」『大境』第33号 富山考古学会
- 古川知明 2014d 「富山城の縄張と城下町の構造」桂書房
- 古川知明・蓮沼優介 2009 「五穀山龍高寺宝篋印塔と礎石経の調査」『富山市考古資料館紀要』第28号
- 古川知明・蓮沼優介 2011 「北畝山各願寺宝篋印塔調査報告」『富山市考古資料館紀要』第30号
- 堀 秀邦 1935 『金城山宝寿院由緒』
- 森田柿園 1973 『越中史徵』(石川県図書館協会編 復刻版 富山新聞社)
- 山岸曙光 1977 『城の中にできた町』『巧玄選書8 総曲輪懷古館』巧玄出版

## 報 告 書 抄 錄

**富山市埋蔵文化財調査報告書 76**

**富山市内石造物調査報告書IV**

発行日 平成 27 (2015) 年 3 月 31 日

発行機関 富山市教育委員会

編集機関 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0091

富山県富山市愛宕町 1 丁目 2 番 24 号

☎ 076-442-4246

Fax 076-442-5810

E-mail : maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印刷 前田印刷株式会社